

中国天津における租界の開発に関する研究：
英租界を中心に

筑波大学大学院
生命環境科学研究科
持続環境学専攻
博士（環境学）学位論文

劉 一辰

目次

第1章 序論.....	1
第1節 背景.....	1
第2節 天津英租界の概要.....	2
第1項 天津英租界の設立と三度の拡張.....	2
第2項 英租界の人口構成.....	3
第3節 目的.....	4
第4節 既往研究.....	4
第1項 近代中国における租界形成に関する研究.....	5
第2項 近代日本の外国人居留地形成に関する研究.....	6
第3項 天津の租界空間の特性に関する研究.....	7
第4項 天津の都市空間の変容・景観保存及び活用に関する研究.....	8
第5節 本研究の視点、方法及び史料の位置付け.....	9
第1項 本研究の視点.....	9
第2項 方法及び史料の位置付け.....	10
第2章 租界時代前期の英租界(1860～1897) :	
原英租界の開発.....	14
第1節 天津城と原英租界の立地と開設.....	14
第2節 原英租界の管理体制.....	17
第3節 原英租界の道路・街区の計画.....	19
第4節 原英租界における施設建設.....	21
第1項 原英租界における企業・個人による開発.....	21
第2項 原英租界における公共施設の建設.....	25
第5節 原英租界における開発とその周辺地域の変容.....	27
第6節 小括.....	29
第3章 租界時代中期の英租界 (1897～1917) :	
拡充界の開発と原英租界の変容.....	35
第1節 拡充界の立地と開設.....	35
第2節 拡充界の管理体制.....	36
第3節 拡充界の道路・街区計画.....	38
第4節 拡充界における施設建設.....	40
第1項 拡充界における公共施設の開発.....	40
第2項 拡充界における企業・個人による開発.....	46
第5節 原英租界の変容.....	49

第1項	原英租界における建設状況	49
第2項	原英租界の中心の移動	50
第6節	小括	52
第4章	租界時代後期の英租界（1917～1943）：	
	推广界の開發と原英租界・拡充界の変容	57
第1節	推广界の立地と開設	57
第2節	推广界の管理体制	58
第3節	推广界の道路・街区の計画	60
第1項	当初計画案の意図	60
第2項	埋め立て	61
第3項	道路計画	63
第4項	街区の形成	67
第4節	推广界における施設建設	70
第1項	推广界における公共施設の開發	70
第2項	推广界における企業・個人による開發	72
第5節	原英租界と拡充界の変容と英租界全体の建設状況	76
第1項	原英租界の変容	76
第2項	拡充界の変容	77
第6節	小括	78
第5章	結論	84
第1節	第1節 英租界の開發の全貌	84
第1項	英租界の拡張と設計意図	84
第2項	英租界の拡張と近代性	85
第3項	英租界の拡張と地域社会への定着	85
第4項	天津英租界の一般性と特異性	86
第2節	考察と今後の展望	88
第1項	英租界と現地地域社会の相互関係	88
第2項	今後の展望	89
	参考文献一覧	91
	初出一覧	97
	謝辞	98
	付録図	99

図表一覧

第1章

図 1-1 英租界の各区域の位置と年代.....	1
図 1-2 英租界の人口の構成と推移.....	3
表 1-1 英租界の各区域の概要.....	3
表 1-2 英租界の各区域の設計.....	9

第2章

図 2-1 1860-61 年の天津城と英仏軍の駐在場所.....	14
図 2-2 清江蘆 潞河督運図.....	15
図 2-3 天津城と原英租界の位置関係.....	15
図 2-4 1860-61 年の原英租界.....	16
図 2-5 1862 年～1897 年、原英租界の董事会の人員.....	18
図 2-6 Plan of the British Settlement at Tientsin 1865.....	19
図 2-7 1888 年の原英租界とその周辺地図.....	23
表 2-1 1860 年初期の天津に在住した軍関係以外の外国人.....	16
写真 2-1 Astor House Hotel.....	22
写真 2-2 The quay of Jardine Matheson.....	24
写真 2-3 1900 年代の洋行.....	25
写真 2-4 Gordon Hall in 1890.....	26

第3章

図 3-1 1890 年～1900 年の英租界.....	35
図 3-2 1900 年天津地図.....	36
図 3-3 上：原英租界の 1898 年～1918 年、 下：拡充界の 1899 年～1918 年の董事会の人員.....	37
図 3-4 拡充界の道路形成.....	38
図 3-5 拡充界の道路幅員と街区規模.....	39
図 3-6 拡充界の公共用地.....	40
図 3-7 拡充界の公共施設.....	41
図 3-8 Tientsin Grammar School の場所.....	44
図 3-9 建設状況の史料.....	47

図 3-10-1	1916 年の原英租界と拡充界の新築建設状況	48
図 3-10-2	1916 年の原英租界と拡充界の新築建設状況の分布	48
図 3-11	1916 年新築	49
図 3-12	1916 年建物の一部新設、増改築	49
図 3-13	1920 年時点における海河の河道変更事業	51
表 3-1	拡充界の企業・個人の開発	47
表 3-2	1906 年～1915 年までの建設事業	50
写真 3-1	1900 年の新 Union Church	42
写真 3-2	Tientsin Grammar School の建物	43

第 4 章

図 4-1	1919 年～1938 年まで英租界董事会の人員	59
図 4-2	1917 年推广界設計図	60
図 4-3	1925 年英租界地図	61
図 4-4	埋め建て高さ	62
図 4-5	推广界の埋め建て経緯	62
図 4-6	1919 年下水溝計画	63
図 4-7	1920～1938 年下水溝整備	63
図 4-8	当初案の道路計画	64
図 4-9	実施案の道路計画	64
図 4-10	1917 年計画道路の種類	65
図 4-11	フランス租界の拡張、左 1919 年、右 1925～26 年天津地図	67
図 4-12	街区面積	68
図 4-13	ABC 区域	69
図 4-14	街区、宅地及び建物の状態	69
図 4-15	A、B、C 区域における街区例	70
図 4-16	推广界の発電所	71
図 4-17-1	1922 年の推广界の建設状況	72
図 4-17-2	1922 年の推广界の建設状況の機能分布	73
図 4-18	1925 年の推广界の建設状況	74
図 4-19	1919 年～1922 年及び 1925 年の推广界の新築	75
図 4-20	1919 年～1922 年及び 1925 年の推广界の建物一部新築、増改築	75
表 4-1	各区域の平均街区面積	69
写真 4-1	馬場道の緑化	66
写真 4-2	慶王府	73

写真 4-3 中南銀行の建物.....	76
写真 4-4 中国実業銀行.....	77
写真 4-5 1934 年の耀華学校の校舎.....	77

第 5 章

図 5-1 梁思成と張銳の計画案.....	86
図 5-2 梁思成と張銳の計画案の道路断面図.....	86
図 5-3 日本租界の土地利用.....	87
図 5-4 英租界と地域社会の相互関係.....	88
写真 5-1 20 世紀初頭のフランス租界.....	87

第1章 序論

第1節 背景

近代という時代は世界中の多くの国にとって、変革、混乱、思索する時代であった。都市・建築にとっても例外ではない。アジアの多くの国における近代的な都市システムは、条約開港都市に見られるように、列強によってつくられたものであった。それらの都市では租界や租借地がつくられ、それを介して、現地の地域社会に様々な変化をもたらした。中国においても、これらの言わば「植えつけられた都市」は多く存在している。1840年のアヘン戦争以後、中国には多くの租界、租借地が開設された。欧米や日本によってつくられたこれらの都市は、長きにわたって存在感を放ってきた西安や北京に代表されるような、従来の文化・習慣や社会制度を考慮した伝統的な手法によって計画された都市に対し、世界的な普遍性をもった近代都市という新たな時代の層を中国の都市の歴史に重ねたのである。租界や租借地は欧米や日本との交流・対峙の場となり、また外国人によって行われた都市の計画、施設の建設や生活様式は現地の地域社会に影響し、中国人・組織によって積極的に受け入れられていったのである。

しかし、従来の伝統的な都市に比べ、これらの都市の歴史はまだ比較的浅く、その都市の計画や機能、当時の社会構造の仕組み等の価値に対する評価は十分ではない。さらに、近年において、経済は急速な発展を遂げ、国民の生活は飛躍的に豊かになった。それによって大都市か地方都市に関わらず、都市開発が著しく行われ、多くの歴史的都市・街並が大きく変貌を遂げてきたが、比較的歴史の浅い近代都市はその開発の先鋒となっている。これらの都市における計画の全貌と開発のプロセスより深く掘り下げ、その上で現地の地域社会との相互関係にも気を配りながら、近代都市形成という段階の位置づけと概念を正確に議論する必要がある。

中国の華北に位置する最大の港湾都市である天津では、19世紀半ばから9カ国によって租界が造成され、最大で同時に8カ国の租界が存在した。その租界空間は上海と並んで中国国内において最大規模のものであった。この租界空間の開設によって、旧天津城とその周辺に展開されていた市街地は海河沿いの東南部にその中心を移し、特に海河の西岸に位置していた英租界、フランス租界、日本租界は著しく繁栄していた。これらの租界では道路・街区について、近代的な設計が行われた。図1-1に示すように、いずれの国の租界も海河沿いに面して立地した。そこから内陸に向かって拡張を行うことで必要な面積の土地を確保した。近代における都市の特徴として、職住が分離し、郊外住宅地が出現することがあげられる¹⁾。このことは租界

が開設され、さらにその後の拡張によって空間が拡大されていく過程においても見られる現象であった。

英租界はその代表的な事例である。天津の英租界は 1860 年のアロー戦争直後に開設され、海河に沿って原英租界²⁾が立地した。その後、拡充界、南拡充界、推広界と三度に亘って拡張が行われ、天津で最も面積の広いものとなった。1860 年に最初に開設された原英租界の Victoria Road (現解放北路) 沿いには、上海のバンドと同様に、近代的な建造物が建ち並び、今日に至っても異国情緒の溢れる街並が形成されている。1986 年に天津市は歴史文化名城に指定され、都市・建築に対する保全活用の機運が高まっている。

それを受け、この美しい歴史的空間の形成過程に対しても一層注目度が増している。また、列強による侵略の産物であったという単にナショナリズムの視点に立った解釈だけではなく、当時の地域社会はこの租界空間をどのように理解・使用していたのかについても、再評価することで、現代に残されたこの空間を活かすまちづくりが行われることに期待が寄せられている。

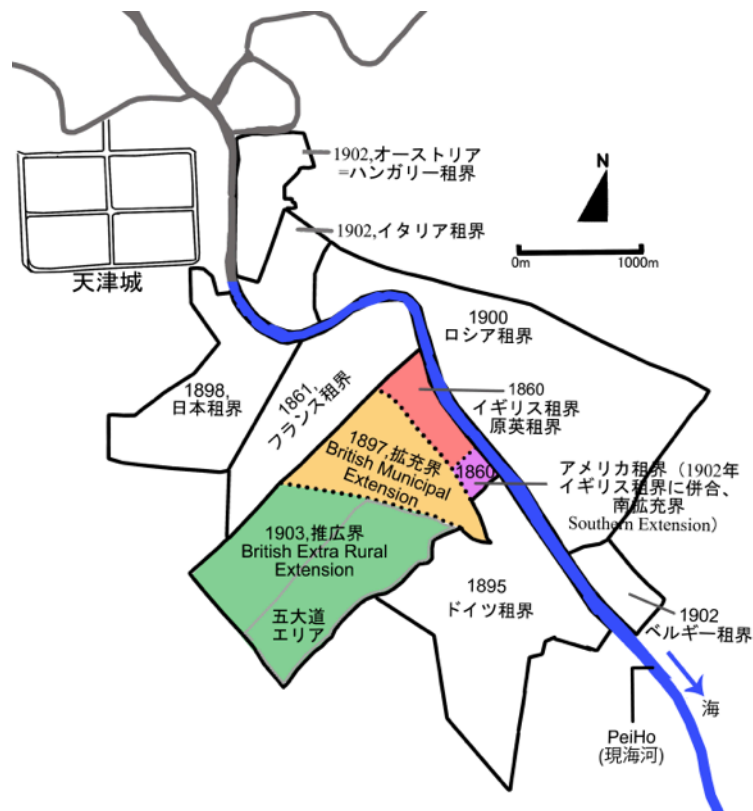


図 1-1 英租界の各区域の位置と年代
(1925～26 年天津地図を基に作成)

第 2 節 天津英租界の概要

第 1 項 天津英租界の設立と三度の拡張

天津の英租界は 1860 年に開設され、その後、三度に亘って拡張された。三度の拡張が中国とイギリス政府によって合意・調印されたのはいずれも 1900 年前後の時期であった。その各区域の名称、開設・拡張された時期及びその面積を表 1-1³⁾に示す。原英租界は図 1-1 に示すように、海河という河に沿って立地し、その後内陸に向かって拡張が行われた。第一次拡張区域の拡充界は原英租界の面積の 3 倍以上に達し

た。第二次拡張区域の南拡充界は米租界を併合した区域である。米租界は 1860 年に開設されたが、南北戦争の影響を受け、租界の管理と運営に有効な措置をとることができなかった。1880 年には一部の権利を保持しながら、租界を放棄する通知を中国当局に行った。しかし、その後の協議が行き詰まり、米租界は管理されない状態が続いた。1902 年、イギリス公使との協議を経て、米国側の権利が一部認められる形で、米租界の英租界への併合が行われた。ただし、その面積は狭いため、本論文では拡充界と合わせて論じるものとする。第三次拡張区域である推广界は面積が最も広く、英租界全体の半分以上を占めていた。最終的に英租界は 400ha 以上の面積を占有し、天津で最も面積の広い租界となった。

表 1-1 英租界の各区域の概要

英租界各区域	時期(年)	面積: 畝(ha)
(原)英租界 British Concession	1860	460 (30.7)
拡充界 British Municipal Extension	1897	1630 (108.7)
南拡充界 Southern Extension	1902	131 (8.7)
推广界 British Extra Rural Extension	1903	3928 (262)

(天津通志・附志・租界より作成)

第 2 項 英租界の人口構成

天津が開港された 1860 年頃の英租界内の住人は 20 人（中国人と外国人を合わせた数であると思われる）に満たなかった。その後 1867 年には外国人の人数だけで 112 人に達した。初期の英租界では中国人の居住を許可しなかったこともあり、人口の増加は緩慢であった。19 世紀末になると、租界内の施設が整えられ、多くの外国商人が租界に居住した。外国商人達は業務と生活上の利便のため、中国人を雇い、仕事に従事させた。また戦乱から逃れるため、租界内に流入する中国人も少なくなかった。これらの社会的な情

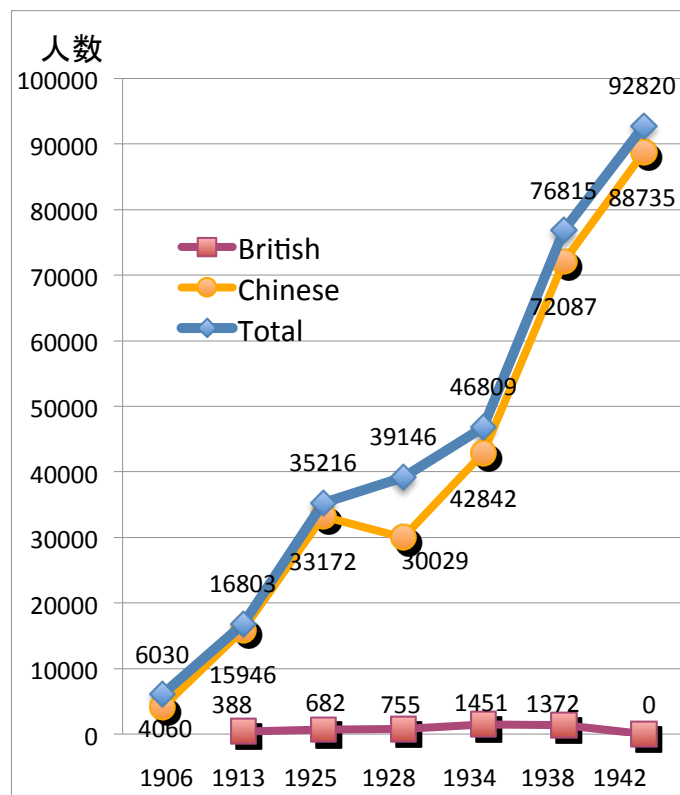


図 1-2 英租界の人口の構成と推移
(天津通志・附志・租界より作成)

勢の変化を受け、英租界当局は中国人が租界内において土地の獲得を制限する規制項目を削除した。20 世紀に入ると英租界の人口は飛躍的に増加し、特に中国人の数は爆発的に増えた。図 1-2⁴⁾に示すように 1906 年の英租界の総人口は 6,030 人であり、内中国人の人口は 4,060 人であった。中国人はこの時点で 2/3 を既に占めていたが、以後は 90%以上の率に達し、1942 年にはそのほとんどを中国人が占めた。英国人の人口は基本的には増加し続けていたが、1930 年代半ばから減少傾向に転じ、1942 年には英租界でありながら、租界内の英国人はほとんどいなくなった⁵⁾。以上のように、国の中の国と言われ、列強による支配の典型とされた租界空間であるにもかかわらず、意外にも内部の人口は 20 世紀初頭から実にその大半を中国人が占めていた。

第 3 節 目的

本研究は英租界の開発の全貌を解明することを目的とする。そのために、1.英租界が開発された場所はどのような環境で、初期の道路・街区等どのような意図をもって開発されたのか、2.租界空間が拡張されるに従い、それぞれの区域にどのような施設が立地し、それによってどのような機能的特徴が生まれたのか、3.租界が天津或いは中国という地域社会へどのように定着したのか、すなわち、開発の意図的、開発の機能的、そして開発の社会的側面の 3 つのアプローチをもって英租界の開発の全貌を解き明かす。これまで租界、租借地に対しては「植えつけられた都市」や「国の中の国」といったように、中国社会に同化しない孤立した存在であったとの評価がなされてきたことに対し、実際の英租界はどのような存在であったのかを論じる。その上で、英租界の開発と、当時の天津、あるいは中国という地域社会との関わりに注意を払い、租界と現地の地域社会との相互関係を考察する。英租界の開発は天津の近代都市化の過程における起点であり、当該地域の根ざす歴史的な脈を知る上で不可欠なものがある。

第 4 節 既往研究

これまで、租界や租借地をテーマとする研究は日本、中国の両方において多く取り上げられてきた。しかし、形成過程を論じたものとして中国の租界・租借地、或は日本の外国人居留地についての研究は多く確認できるが、天津に関するもの少ない。逆に、天津については①現存する近代建築物に関する分析、②建築意匠の特徴について、③保存活用の視点からの研究は多くの蓄積があるが、研究方法は現状観察に基づく分析を行う傾向が見られ、形成過程について一次史料を十分に用いた研

究は見られない。また、中国の地域社会が外国の都市・建築を受け入れ、自国に取り込もうとしていたことを取り上げた研究もほとんどに確認できない。

ここで、中国の租界・租借地形成、日本の外国人居留地形成、天津の都市空間の特性、景観保存及び活用に関する研究に分け、既往研究をまとめる。

第1項 近代中国における租界形成に関する研究

田中重光氏⁶⁾は近代中国の都市と建築について、欧米の近代都市計画を模範として都市計画が策定・実施された広州、黄埔、上海、南京、武漢、重慶、台北を対象として取り上げた。同研究は近代中国の激動期を史料に基づいて、蒋介石を中心とした国民党の要人による都市計画策定や建築様式技術を同時に捉えようとするものである。そして、実際に都市計画策定案を行った人物の留学経験や、計画案の基となった欧米の都市計画理論を明らかにしている。その結果、近代中国の都市計画とは欧米近代都市計画の潮流に沿って起った“ひとつの現象期”であると同時に、踏み越えなければならない現実と交差する、過渡的な都市計画の時代でもあったと評している。

大里浩秋ら⁷⁾は近代中国の日本租界に焦点を当て、長江流域の日本租界、租界の建築と都市計画、資料編の3部構成からなる書籍をまとめた。この研究は日本租界を研究しようとするに当たって、貴重な史料等を所収しており、利用価値の高い研究となっている。また、第2部において中国で開設された漢口、蘇州、重慶、杭州、そして天津の5カ所の日本租界について言及しており、天津以外は繁栄に欠けていたとした。またその運営状況は悪く、銃器や弾薬の密売、各種麻薬の取引が行われ、娼妓館が集中していた場所であり、近代中国社会に危害をもたらした場所として酷評した。また上海と天津の2都市を取り上げ、建国されて以後の都市を象徴する景観区の建設を分析した。その結果、上海、天津を象徴する景観区は、近代中国の都市計画のためのモデルを提供したとしている。

陳雲蓮ら⁸⁾は日本人により上海の共同租界で行われた都市開発について、日本人や日本企業の上海進出での土地の取得・土地利用の特徴を明らかにした。そして、日本人はあくまで英国人所有地の合間を縫って都市施設を配置させたことや、紡績業施設は蘇州河、黄浦江に近い水上交通の便利な場所に配置され、工場地帯の形成に影響したことを明らかにした。また、同氏ら⁹⁾は上海の租界開発における道路計画は既存の通路 (Foot Path) や小川 (Creek) に従っていたと説明した。その背景には英国商人が Foot Path と Creek に沿って、借地を先行的に開発したことがあり、英政府工部局はその後を追うように公道の整備を進めたことを明らかにした。さらに、最終的には、上海の旧英租界は前身集落の構造をベースにして成立したと結論づけた。

恩田重直氏¹⁰⁾や Chen Yu 氏¹¹⁾はアモイの港湾空間を取り上げ、商館という交易都市にとって重要な都市施設が 17 世紀中葉にオランダ東インド会社によって設立され、その立地は廈門の外港の発展段階の初期の場所であったことを明らかにした。その後、アモイは交易都市として整備され、このことが後にできる英租界の形成に大きな影響を及ぼした。つまり、英租界の都市空間は既存市街地の影響を受けながら形成されたと結論づけた。

第 2 項 近代日本の外国人居留地形成に関する研究

日本においては、外国人居留地に関する研究は数多くの蓄積がある。特に都市構造、景観形成、周辺への影響、そして近年では如何なる主体や意思決定の方法によって都市の施設等が造られたのかについての研究が見られる。

村田明久氏¹²⁾は横浜、長崎、函館、神戸、川口、築地、新潟の 7 都市における外国人居留地の都市空間要素について、①制度上どのような取り決めがなされたのか、②独自の都市空間があったのか、③それらの空間構成比について分析を行った。結果として、波止場、道路、下水路が一体となった海岸通りの街路空間が出現していたこと、海岸沿いと裏手で敷地の区分が見られることなどから、海岸線に重点的な計画内容が見られるとしている。また、それぞれの都市において道路、敷地、公園、税関等の面積の構成比には違いがあり、特徴的な都市計画が存在していたという。さらに、母都市において、同様な海岸通りや中央大通りの計画を波及させたことに見られるように、これらの外国人居留地の計画は具体的な都市空間を示したことで日本の都市計画実態を芽生えさせたとした。

小代薫氏¹³⁾は居留地の形成について既存市街との関係や開発の主体に焦点を当てながら、神戸の外国人居留地周辺の雑居地における公共施設の整備過程の特徴をまとめた。居留外国人たちは民主化の実現を目的意識としてもち、自治活動や都市整備事業を進め、各種クラブやメディアを通じて、公共施設を整備していた実態を明らかにした。また、日本人の住民の間にも自治活動が生じ、公園の管理運営を官営化することなく、住民が主体的に公園の管理運営を行ったという。つまり、内外双方の国籍を持つ人々に民主化の動きが起こり、それがそのまま住民が主導する都市整備行動となったとしている。

高村直助氏¹⁴⁾らは、横浜の歴史を開港という事件に重みをおき、古代に遡って、古地図や絵画、写真等を使いながらまとめた。当該研究はその内容とともに、有用な史料も多く所収されている点に特徴がある。

また、藤森照信氏¹⁵⁾らは中国、台湾、香港・マカオ、韓国の 4 地域について、近代建築と都市発展の流れを概観した。特に中国大陸については北京、天津、上海など 18 の都市における近代建築の詳細をまとめている。調査した建築については重

要建築物と主要建築物の2ランクにわけ、その分布、名称、設計者、竣工年、所在地を概観の写真とともに掲載し、極めて実用的な文献である。

第3項 天津の租界空間の特性に関する研究

王藝武氏¹⁶⁾は天津の各租界の領域形成、つまり拡張の時期や範囲を把握した上で、現存する近代建築に関する資料を基に、建築用途の変化を1943年までまとめ、各国の租界の特徴を分析した。その主な結果として、活発な建築活動を示したのは英租界、フランス租界、日本租界、イタリア租界、ドイツ租界であったことが明らかにされている。総用途件数の増加を示すのは住宅、金融、事務、商業、工場、学校の順である。英租界、フランス租界は商業用、住居用の建物延床面積比率が非常に大きかったとしている。用途構成比としては開港初期に、兵舎、商業、住宅、教会の用途から始まったが、開港後、金融が著しく増加し、様々な用途の施設が比較的早い段階で既に設置されていたとした。この研究からも分かるように、英租界、フランス租界、そして日本租界は建設活動に対して熱心であり、租界空間の中でも特に繁栄を極めた区域であった。

孫躍新氏¹⁷⁾は天津の旧城空間、租界空間、新開空間の三つの空間の構成や特性を取り上げ、その中で、英租界と日本租界の設立からその後の発展を通時的に記述した。また、英租界については、Victoria Road と五大道地区の建築様式について例を挙げながら、それらが作り出す景観特性を分析した。その結果、英租界の都市施設の建設が、天津の近代都市の方向をリードしてきたとしている。ガス照明、電気、水道といったような最初の都市施設の公共事業も英租界から発生したとしている。また、租界の開発は欧州列強の経済侵略と政治支配による2つの開発原理のもとで進められ、所在国の実状、都市全体の均衡を考慮しない野蛮な開発と建設を行ってきたとした。その一方で、租界の開発は、近代的な技術開発、新システムの運営方法と新材料の使用等、伝統空間の運営と開発に刺激と啓発を与えたと評価もしている。つまり、租界の開設には積極的な作用と消極的な作用の2面性があると論じた。この研究の述べようとするところは本研究に近い部分はあるが、英租界の空間設計や開発の過程についてあまり触れていない。

『天津史』¹⁸⁾は近代における天津の変容を産業、金融、貿易、交通運輸、通信、政治、外交、租界、下層社会、メディア文化、建築等の面から総合的にまとめた書物である。天津が清末期、中華民国期、その中でも北京政府時期や南京政府時期、そして戦時下において、劇的な一連の変容・変化を経験し、姿を変えながらも直実に再生して、発展してきたとしている。租界については、外国人の生活と組織を中心に分析し、特に租界とは何かを、制度、社会構造について時代背景の変化を踏まえつつ、詳細に論じている。建築と都市施設については建築様式を中心に議論され

ている。最終的に租界に対しては愛国主義の立場からの攻撃対象としての位置づけには歴史的根拠があるとしつつも、それが果たした歴史的役割は非常に複雑であるという段階で議論を留めている。

第4項 天津の都市空間の変容・景観保存及び活用に関する研究

林青氏ら¹⁹⁾は英租界推广界の一部である五大道地区の住宅建築において、用途転換の有無とその後の用途について分析し、さらに建築物の外部空間の変化についてまとめた。結果として52.7%の建築物が非住宅化し、主として公共施設、事務所、商業、サービス業に転換しているという。また建物の外部空間の空間変容、すなわち閉鎖型から開放型への塀の改造、駐車場の確保とアプローチ空間の整備による院落の改変が明らかにされている。当該研究の結果はまさに租界空間の元の景観が損なわれようとしている現在進行形の実態を示している。

大里浩秋氏ら²⁰⁾は第一部において租界の行政と産業、第二部において租界の保存と再生を論じた。その中で、天津について、近代遺産が開発の標的にされている現状をふまえ、現在天津市で行われている開発と保存が直面している問題をまとめた。最終的には今後に向けた文化遺産の保護に関して、①都市保全に関する諸制度と条例のトップダウンによる再定義、②国指定の重要文化財への申請、③都市開発に関わる民間開発業者の社会的責任の意識向上を促すこと、④文化遺産を核としたまちづくり、⑤包括的高度専門職人材の育成、の5点の提案を行った。

劉庭風氏ら²¹⁾は英租界五大道地区の庭付き戸建住宅（花園洋房）の様式について分析した。その中で、建物と庭の関係を類型化し、特に庭の様式について分析を行った。庭の様式の83%は西洋式であり、中洋折衷式は17%存在しているという。さらに、庭を構成する要素についても、花壇の形状、樹木の種類等についてまとめあげた上で、現状では、多くの学者、政府関係者、旅行者が建物だけに意識を集中しており、庭に対する関心が不十分であるとしている。その結果、街区の完全性のみならず、庭の完全性をも失われようとしていることに警鐘を鳴らしている。

夏青氏ら²²⁾は五大道地区の現在の道路、街区の形態を解析し、当該区の形態や景観の特色をまとめた。その中で、推广界の一部である五大道地区の建設開始から成熟は1903年～1930年の間であるとした上で、1913年の格子状の道路網の設計から1925年の現在の道路網への設計の変化は欧米の都市計画の変革の影響を受けたとした。変更後の設計からは、五大道地区を独立した居住区としての計画した意図が読み取れるとも推測している。

このように一部の街区、建築物を対象に建築意匠の検討を行うものや、歴史的街区の、保存活用の視点からの研究には多くの蓄積がある。また研究手法としては都市の現状を分析する傾向が見られる。上記の成果には本研究においても学ぶところ

は多いが、殆どの研究は当時の社会情勢などから間接的な憶測によって租界造成過程について触れたに過ぎず、具体的な造成プロセスに関する先行研究は確認できない。

第5節 本研究の視点、方法及び史料の位置付け

第1項 本研究の視点

本研究ではまず、租界の各区域が開発される時期に応じて時代を区分し、その時期に行われた開発の意図と機能を解明しつつ、同時期の既存の租界空間で起きた変容を明らかにする。その上で、各時期において、英租界と現地の地域社会との間に生じた関係性を考察する。そこで、原英租界の開設から第一次拡張が行われ、拡充界が正式に成立した1860年から1897年までを租界時代前期、1897年から推广界の開発が始まる1917年までを租界時代中期、1917年から英租界が中華民国政府に返還される1943年までを租界時代後期とする。

分析を行うに当たって、まず、各時代区分における外国人達による都市設計と初期の開発状況を把握する。

表1-2に示すように、英租界それぞれ異なる時期に、異なる設計者と開発の経緯をもっていた。例えば、原英租界の設計は英国ロイヤル工兵であったゴードンが行ったとされ、それによってイギリスがそれまでに行ってきた植民都市的な港湾空間設計がなされたと考えられる。それに対し、推广界ではアンダーソンという建築設計を行っていたデザイナーが街区空間の設計を行った。つまり、この設計者の違いにより形成された空間の性質も異なると推定される。

その後、租界空間におけるインフラ整備が進むにつれ、その上に建造物も多く造られるようになった。その機能の特徴と、同時期に既存の租界空間で起こった変容を捉え、全体として建物の機能による分布を分析することで、都市空間として近代化していく実態を明らかにする。

その上で、時期が移行するにつれ、段階的に租界内で中国人によって建設が行われるようになったことが判明する。これによって、外国人による租界の開発・運営手法を解明すると共に、租界空間が異物のまま天津の地域社会の中に同化しながら定着してく状況を捉える。

表 1-2 英租界の各区域の設計

区域	設計者	役職	設計の時期
原英租界	Charles George Gordon	英国軍ロイヤル工兵	1860年～1862年
拡充界 南拡充界	不明(英国工部局が開発)		1897年頃
推广界	H. McClure Anderson	工部局 Acting Engineer	1917年に当初案 1925頃に実施案

第2項 方法及び史料の位置付け

本研究では筆者が独自に入手したイギリス国立公文書館所蔵の地図や英租界工部局年度報告を主史料として使用した。その上で、従来の天津に関する都市史研究や租界研究に使われてきた史料も活用した。ここで、主な史料情報について論述を行う。

1. 地図

①イギリス国立公文書館所蔵の地図

まず、本研究を行うに当たって、筆者が独自に入手したイギリス国立公文書館所蔵の地図について言及する。「Plan of Tientsin 1860-61」は英仏連合軍が天津を占領した1860年～1861年に、イギリスのRoyal Engineersによって測量されたもので、連合軍の駐在位置と天津城との関係や開発される以前の英租界の状態が読み取れる貴重な地図である。

「Plan of the British Settlement at Tientsin 1865」は1865年にイギリスのConsulate AssistantであったJ. B. Goddardによって描かれた地図で、開発初期の英租界の情報を得るための重要な地図である。

②天津市规划局編著（2008）所収の地図

天津城至紫竹林図[1888年（清光緒十四年）]²³⁾（以下1888年地図）は署理津海関道（天津税関の臨時責任者）の劉含芳の指示により、旅順絵事教習候選縣丞（旅順の絵画教師で、道に次ぐ役職）であった陳文瑛とその学生達によって近代的な測量法で描かれた地図である。当該図は中国人によって近代測量法で描かれた最初の天津地図であり、当時の清政府は開港した後の状況を把握する意図があったと考えられる。図中には当時の租界内及びその周辺の状態が緻密に描かれており、さらにスケール・方位等も明確に表示されているため、本研究で主史料の一つとして扱うに相応しいものである。

2. 英租界工部局年度報告

筆者が天津档案馆において近年新たに発見した「英租界工部局年度報告（REPORTS OF THE BRITISH MUNICIPAL COUNCILS, AND MINUTES OF THE ANNUAL GENERAL MEETINGS）」を使用することで英租界の造り手である英国の開発計画、実施過程を把握できた。当該史料は1906年～1940年までの各年の年末に開かれた董事会の「董事会報告」と「財政報告」で構成される。内容としては天津英租界の毎年の市政建設、気候、人口、学校教育、医療衛生状況、治安、財政経済状況及び翌年の予算等について記録しており、当時の租界内部の様子を通時的に把握する上で最も有用な史料である。1906年から1940年は天津档案馆に収蔵されている。その内1907,1908,1909,1911,1913,1915,1923,1924,1926,1928年は欠落。1906～1925年までは英文であり、1927年からは部分的に中国語も

併用されていた。近年になって、天津档案馆により 1927 年以後の年度を中国語に翻訳され、天津英租界工部局史料選編として 2012 年に出版されたが、本研究ではすべて天津档案馆に収蔵されている英文年度報告を使用した。特に 1925 年以前の年度からは英租界推廣界の開發計画の初期段階からその後の実施状況まで詳細に確認できた。

3. 文献資料

既往研究でも取り上げられてきたが、イギリス人記者であった O. D. Rasmussen は当時の英租界の状況を知る上で欠かせない文献を残している。著者の O.D.Rasmussen はイギリスのケント州出身であり、1906 年から天津に居住し、「North China Commerce」、「North China Star」、「Far Eastern Times」等の記者を担当した経歴を持っていた。当該著者は中国に関する著書を多く残しているが、特に O.D.Rasmussen: *The Growth of Tientsin, 1924, The Tientsin Press, Ltd.* と O.D.Rasmussen: *Tianjin: An Illustrated Outline History, 1925, The Tientsin Press, Ltd.* は英租界の都市開発、建物の建設及び住民の生活等、詳細な情報が記述されている。

さらに、このほかの史料、古写真等も併せて使用することで、当初の英租界の街区計画と造成プロセスを把握すると共に、その後の開発の経緯を読み取り、街区の特徴に注意を払いつつ、空間構成を復元的に分析する。

注：

- 1) 鈴木博之, 石山修武, 伊藤毅, 山岸常人：近代とは何か（シリーズ 都市・建築・歴史）, 東京大学出版会, 2005, p.9
- 2) 英租界の第一次拡張区域（拡充界）、第二次拡張区域（南拡充界）、第三次拡張区域（推広界）に対し、1860 年に開設され、拡張される以前の英租界の区域を原英租界と定義する。
- 3) 天津市地方志編修委員会編著:天津通志·附志·租界,天津社会科学院出版社, 1996、 p.71
- 4) 同上、pp.373-375
- 5) 同上。
- 6) 田中重光：近代・中国の都市と建築 広州・黄埔・上海・南京・武漢・重慶・台北,相模書房,2005
- 7) 大里浩秋,孫安石:中国における日本租界：重慶・漢口・杭州・上海, 御茶の水書房,2006
- 8) 陳雲蓮,大場修:上海共同租界における日本人による都市開発過程と施設配置の実態-上海の都市形成に関する研究-日本建築学会計画系論文集, No.694,pp.2047-2054,2010.08
- 9) 陳雲蓮,大場修：1849-66 年間における上海英租界の道路、土地開発過程-近代上海英租界の形成過程に関する都市史研究その 1,日本建築学会計画系論文集,No.622,pp.239-244, 2007.12.30
- 10) 恩田重直:中国福建省の厦門における港湾空間の形成過程に関する考察,日本建築学会計画系論文集,No.527,pp.201-208, 2003.10.30
- 11) Chen Yu: The Making of a Bund in China: The British Concession in Xiamen (1852-1930), Journal of Asian architecture and building engineering 7(1), pp.31-38, 2008-05-15
- 12) 村田明久: 外国人居留地の都市空間要素と構成比の比較考察,都市計画論文集 (25), p457-462, 1990-10
- 13) 小代薫: 明治初期の神戸「内外人雑居地」における公共施設の整備過程: 神戸開港場における内外人住民の自治活動と近代都市環境の形成に関する研究（その 1）, 日本建築学会計画系論文集, No.695, pp.269-277, 2014.01
- 14) 高村直助監修,財団法人横浜ふるさと歴史財団編,横浜 歴史と文化,株式会社有隣堂,2009
- 15) 藤森照信・王坦：全調査 東アジア近代の都市と建築,大成建設,1996.3
- 16) 王藝武,紙野桂人,舟橋国男,奥俊信,小浦久子,木多道宏：近代天津租界形成における土地利用並びに建築用途の変化特性に関する研究,都市計画論文集 1995-30-75-445
- 17) 孫躍新:中国都市における近代空間の形成過程及びその特性に関する研究-天津の旧城空間、租界空間、新開空間の形成及び相互関連を中心に,京都大学博士論文,1993
- 18) 天津地域史研究会編,天津史 再生する都市のトポロジー, 東方書店, 1999

- 19) 林青,池添昌幸,竹下輝和:中国天津租界地における歴史的住宅建築の非住宅化傾向—中国天津租界地における歴史的住宅建築の空間変容に関する研究その1,日本建築学会計画系論文集 605,pp.15~22,2006.7
- 20) 大里浩秋・貴志俊彦・孫安石編:中国・朝鮮における租界の歴史と建築遺産,御茶の水書房,2010
- 21) 刘庭風,田卉,张晶蕊:天津五大道洋房花园探析,中国园林,2010
- 22) 夏青,許熙巍,許萌,崔楠:天津五大道歴史街区空間形態及風貌特色解析,天津大学学报(社会科学版),2012
- 23) 天津市規畫局編著:天津城市歴史地図選編,天津古籍出版社,2008中に所収。

第2章 租界時代前期の英租界(1860～1897)：

原英租界の開発

原英租界の開設は英国本国に利益をもたらすことを主要な目的とし、その計画も都市のデザインというより、貿易の利便性等を考慮した港湾空間のデザインであった。本章では原英租界の空間開発過程を 1860 年の開港から、最初の拡張が行われた 1897 年頃まで明らかにする。また租界の形成は天津、さらには当時の中国の近代化に大きな影響を及ぼした。このことも踏まえ、原英租界の周辺地域でどのような変化が起ったのかについても言及する。

第1節 天津城と原英租界の立地と開設

1856 年～1860 年にかけて、清とイギリス・フランス連合軍の間でアロー戦争が行われた。その間、連合軍は三度に亘って天津の大沽（Taku、渤海に面した区域）に侵攻した。その一回目は 1858 年で、海口（渤海湾と思われる）を封鎖し、その後、大沽を攻略した。さらに、そこから河に沿って北上し天津を占領した。図 2-1 に示すように、天津城の東側の区域では二本の河が海河（Pei Ho または Hai Ho）に合流している。そこは三岔口と呼ばれていた区域で、古来水運の利便性がよく、図 2-2¹⁾に見られるように通商の要地として繁栄していた。連合軍はその区域にあった河北金家窩村の住民 300 戸あまりを追い出し、衣服家具を奪い、家屋を破壊した。その後も撤退するまで周辺区域に対し略奪を行った。1859 年に二度目の侵攻を起こしたが、清軍に敗れた。

その後、1860 年に三度目の侵攻に成功し、天津城を占領した²⁾。1860 年 9 月 11 日、清政府と英国は北京にて中英続増条約を調印し、天津を通商の地として、英国人の居住と貿

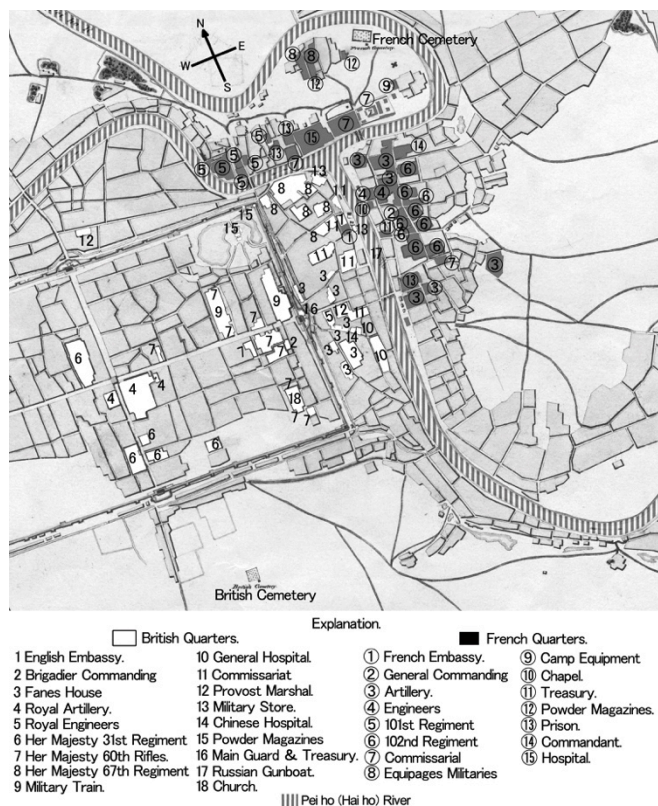


図 2-1 1860-61 年の天津城と英仏軍の駐在場所
(Plan of Tientsin 1860-61 を基に作成)

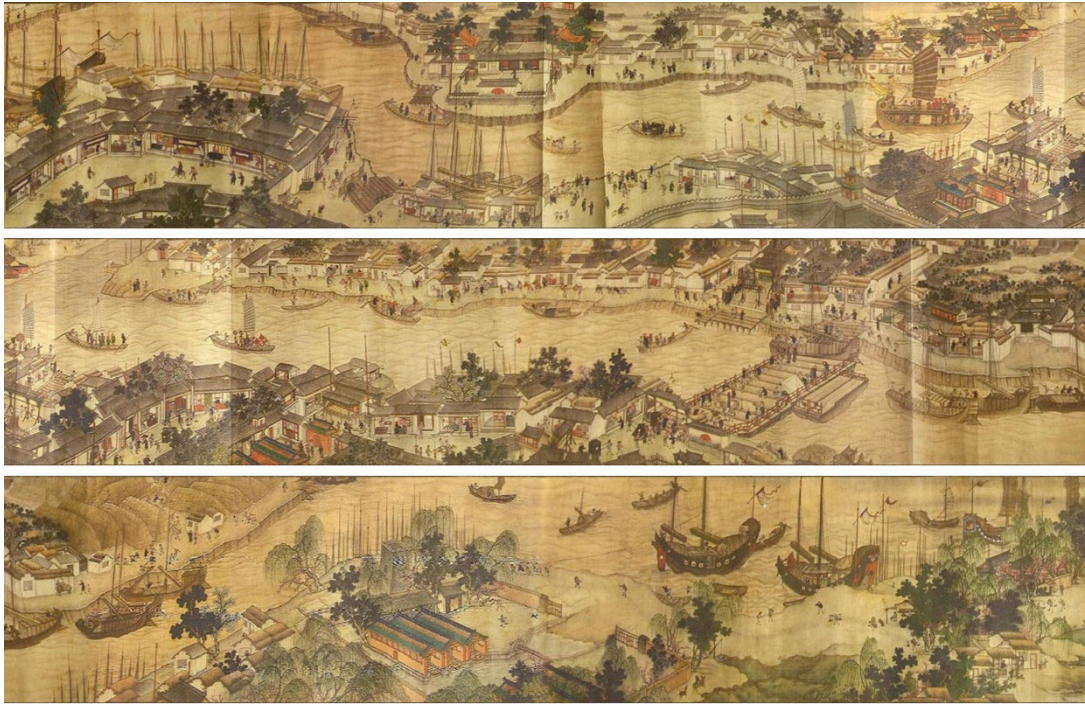


図 2-2 清江荳潞河督運図（国家博物館所蔵）

易を許した³⁾。同年 11 月 6 日、英国外交官 Sir Frederick William Adolphus Bruce の要求により、清政府は紫竹林から下園までの 460 畝（約 30.7ha）を英租界（British Concession）として認めた⁴⁾。図 2-1⁵⁾に示すように、その場所は天津城の南東に位置し、海河(Pei Ho)の西岸と、渤海湾の大沽（Taku）まで通じる古くからあった Taku Road（大沽路）に挟まれた区域にあった。

図 2-1 に示すように、1860-61 年に天津を占領していた連合軍は天津城とその東門外の区域に多くの関連施設を持っていたことが分かる。イギリス軍関係者は天津城内と東門から海河(Pei Ho)までの間の区域に居住し、それに対しフランス軍関係者は海河(Pei Ho)の東岸とさらにその北側の区域に居住し、住み分けていたことが分かる。

図 2-1 の 4 の Royal Artillery、6 の Her Majesty 31st Regiment、7 の Her Majesty 60st Rifles や 8 の Her Majesty 67st Regiment 等のようにイギリス軍の軍団の駐屯している様子が多く見られる。また、13 の Military Store のように軍を対象とした商業施設も見られる。この時点の天津ではまだ連合軍による支配が行われていたこと

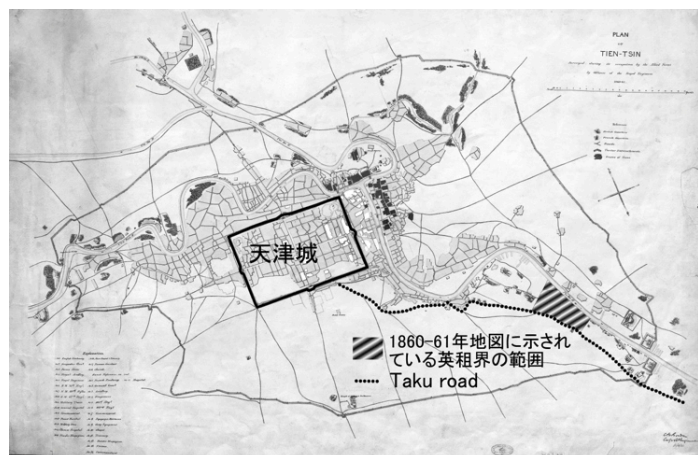


図 2-3 天津城と原英租界の位置関係
(Plan of Tientsin 1860-61 を基に作成)

が分かる。

1860年代初期の一般の外国人の居住場所については、Rasmussenの著書 *Tientsin: An Illustrated Outline History* においてそれに関する記述を確認できる⁶⁾。同書により、1860年代初期に天津にいた軍関係以外の外国人で確認できたのは30名弱である(表2-1)。その多くは

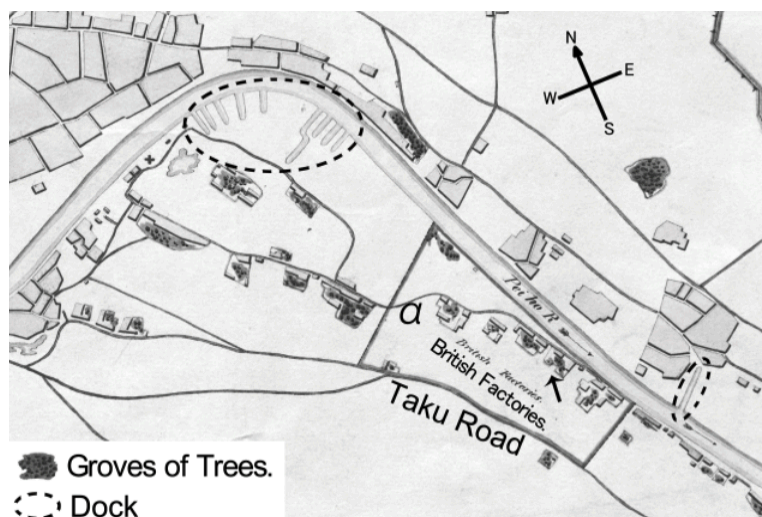


図2-4 1860-61年の原英租界
(Plan of Tientsin 1860-61 を基に作成)

宣教師や商人とその家族であった。彼らは天津城内の中心部、及び東門と海河(Pei Ho)の間にある宮北街周辺に居住し、商業活動を行っていた⁷⁾。彼らの詳細な住所は不明であるが、1861年に連合軍は撤退を開始したので⁸⁾、その後空きとなった住宅、或はその付近の住居を借りて住んでいたと推測できる。例えば表2-1に示すように1860年に天津に来た Blodget は臨時的に礼拝を行う場所として天津城の東門の外側

表2-1 1860年初期の天津に在住した軍関係以外の外国人

天津に来た時期	名前	職業
1860. 9~1862. 5	Henry Blodget	宣教師 アメリカ公理会 (American Board Mission)
1861	J. Mongan	英国副領事
1861	J. Henderson	廣隆洋行 (Lindsay & Co.)
1861	J. A. T. Meadows	密迪士洋行 (Meadows & Co.)
1861	E. Waller	非立士摩公司 (Phillips & Moore)
1861	H. C. Maclean, T. Platt, Stamford, Richard, C. Grant, C. Mellor	怡和洋行 (Jardine Matheson & Co.) (1843年に上海で成立、天津では1867年~)
1861. 4. 4. 上海	Stamman, John Innocent	英国聖道堂 (New Connexion) 後の循道公会 (United Methodist Mission)
1861. 5. 19	John Innocentの妻	
1861. 9. 22天津生まれ	Annie Edkins Innocent 娘	
1861. 5. 19	Edkins夫婦	London Missionary Society
1861. 9. 2	Jonathan Lee夫婦 J. Hanna, Lockhart, W. M. Norton, J. Livingstone, D. Eastwood, S. J. Morris, H. G. Howard, G. Hughes	牧師 注: Jonathan Lee夫婦はCourt Hotel (後にGlobe Hotel, Queen Hotelと呼ばれる) の場所にあった中国式住宅に18ヶ月住んでいた。
1861. 9. 2	Twinem	津海关稅務司 (Maritime Customs Service)
1863. 3. 13	C. A. Stanley	牧師
1864	Williamson夫婦	

Tientsin: An Illustrated Outline History 中の記述により作成

にあった天後宮の一室を占拠した。そして 1861 年には天津城の南門外大街（一説には城内の南西角⁹⁾）に建物を借り、天津最初のキリスト系教会をつくったという。1862 年には教会を天津城内の鼓楼の東にある倉門口に移した¹⁰⁾。図 2-1 に示す 18 の教会であると思われ、実際は城内の南東部に位置していた。また、Rasmussen の著書では、Henry Blodget と John Innocent は天津城の中心から少し東に位置していた Ts'ang Men K'ou chapel（倉門口教堂）の付近に住宅を借りていた¹¹⁾と記されている。他にも図 2-1 の⑩の礼拝堂のように、キリスト教関係の施設が確認できる。以上のことから宣教師たちはこれらの施設を拠点に宣教活動を行っていたと思われる。

一方、図 2-4 に示すように、原英租界の区域は指定されたものの、1860-61 の段階では開発はまだ始まっておらず、 α の既存道路やこれに沿ういくつかの現地の住民の家屋が見られる程度であった。フランス租界内も同じような状態であり、破線で囲んだ部分には既存の舟入も見られる。

図 2-2～2-4 に見られるように、天津城とその周辺、また原英租界内及び海河(Pei Ho)を挟んだ向かい側には従来からの集落や家屋が確認できる。郝福森は『辛酉英法屯津記』の咸丰 10 年（1860 年）の 9 月について、次のように記述している¹²⁾。

英国は上下園、紫竹林廟の 8 カ所の村の土地、126 家を占領した。紫竹林より北、砲台より南の区域はフランスが占領した。9 月 8 日には洋錢（清が対外貿易時に使っていた銀貨）を配り、3 日以内に現地住民を退去させた¹³⁾（括弧内筆者）。

このことからわかるように、天津に来た外国人は原英租界内の現地住民が退去した後に空き家となった家屋に居住したケースもある。例えば、牧師であった Jonathan Lee 夫妻は、当初は英租界内にあった中国式住宅に 18 ヶ月住んでいた¹⁴⁾（図 2-4 の矢印）。つまり、彼らは当初、自分たちの住宅を建てることはなく、現地住民の中国式住宅に住むこともあったと考えられるのである。

このように、この段階では、英租界と言っても空間的にも従前の村落を引きついでいたとみてよい。ただ、図 2-4 において、原英租界の区域には **British Factories**¹⁵⁾ と示されており、洋行（商館）が交易のための最小限の施設として立地し、或いはそれを想定して計画を立てていたことから、この時点では植民都市の初期段階であったことがわかる。

第 2 節 原英租界の管理体制

英租界をはじめ、各租界はいずれも開設初期では駐天津領事館が直接管轄し、租界内の外国住民が増えるに従って、本国における都市の自治制度を租界で実施し、租界を自治区域として租界内の外国住民に自治権を与えた。天津の各租界の管理体制は英租界の住民自治型とフランス租界の領事独裁型がその両極端とされ、他の租

界は自治の程度においてその中間的な方式をとっていた。自治機構として各租界は
 董事会を設立した¹⁶⁾。

天津では上海と同様な市政システムを使っていたとされ¹⁷⁾、原英租界では 1862 年
 に董事会が設立され、租界内の統治と政策決定の機関となった。董事は租界内の納
 税者の選挙によって選出され、任期は一年であり、任期が満了すれば改選が行われ
 た。その形式は地方自治と類似していた。英工部局章程によれば、英租界の董事を
 選出する会議は英租界選挙人大会と称され、常年大会と特別会議の 2 パターンがあ
 り、共に英国総領事によって招集されるものであった。また英国総領事は会議内容に
 対し最終決定を行う権利を持ち、大会の決議事項に対し、口頭で否認でき、また 7
 日以内に書面において否決することができた。しかし、英国領事は英租界の日常行
 政に対しほとんど干渉しなかったとされ、自治的な側面が強かった¹⁸⁾。董事会の組
 織、権限等についても明確に規定されていた。満 21 歳以上の中国人・外国人納税者
 で、毎年不動産税 200 両か 200 両白銀以上を支払う者には一票の選挙権があり、有

BRITISH MUNICIPAL COUNCILS, 1862 TO 1918.			
Year	Chairman	Hon. Treasurer	Councillors
1862	E. Waller	J. Henderson	J. Hanna.
1863	E. Waller	W. M. Norton	J. Hanna.
1864	E. Waller	J. Livingstone	J. Hanna.
1865	J. Hanna	D. Eastwood	J. A. T. Meadows.
1866	J. A. T. Meadows	J. H. McClure	J. H. McClure
			H. C. Maclean
			S. J. Morris.
1867	J. A. T. Meadows	J. Livingstone	J. Hanna, H. G. Howard.
1868	J. A. T. Meadows	J. Henderson	G. Hughes, J. Livingstone.
1869	J. A. T. Meadows	J. Hanna	J. Livingstone.
1870	J. A. T. Meadows	J. Henderson	H. G. Howard
			J. Hanna.
1871	J. A. T. Meadows	M. G. Moore	E. G. Beebe, A. C. Cordes.
1872	J. A. T. Meadows	M. G. Moore	H. Beveredge, A. C. Cordes, P. Kierulf.
1873	E. A. Solomon	J. Livingstone	H. Beveredge, J. J. Hatch, M. G. Moore.
			J. A. T. Meadows
1874	E. A. Solomon	J. J. Hatch	W. Forbes, J. A. T. Meadows, M. G. Moore.
1875	J. A. T. Meadows	M. G. Moore	J. J. Hatch
			S. A. Nathan
1876	M. G. Moore	A. C. Cordes	H. Beveredge, W. Gubbins, J. Henderson, W. Jackson, A. Macpherson.
1877	J. Henderson	P. L. Laen	W. Gubbins, J. J. Hatch, A. D. Startseff.
1878	G. Detring	W. Gubbins	J. Henderson, P. L. Laen, <u>Liao Too Sang</u> .
1879	G. Detring	D. Ezekiel	W. Gubbins, W. Forbes, A. K. Kooznetseff, A. D. Startseff.
1880	G. Detring	D. Ezekiel	W. Forbes, W. Gubbins, A. D. Startseff.
			S. A. Hardoon
1881	G. Detring	S. A. Hardoon	W. Forbes, W. Gubbins, A. D. Startseff.
1882	W. Gubbins	S. A. Hardoon	E. Farago, W. Forbes, H. E. Hobson, Colin Jamieson, A. D. Startseff.
			F. de Bovis
1883	H. E. Hobson	F. de Bovis	E. Cousins, W. Forbes, A. D. Startseff.
			E. Cousins, W. Forbes, J. Grabam, A. K. Kooznetseff, A. D. Startseff.
1884	H. E. Hobson	G. C. de St. Croix	E. Cousins, W. Forbes, A. D. Startseff.
1885	G. Detring	W. W. Dickinson	E. Cousins, W. Forbes, A. D. Startseff.
1886	G. Detring	W. W. Dickinson	E. Cousins, W. Forbes, A. D. Startseff.
1887	G. Detring	W. W. Dickinson	E. Cousins, W. H. Forbes, Dr. A. Irwin, A. D. Startseff.
			A. D. Startseff
1888	G. Detring	A. D. Startseff	E. Cousins, W. H. Forbes, R. Inglis, Dr. A. Irwin.
1889	G. Detring	A. D. Startseff	E. Cousins, W. H. Forbes, R. Inglis, Dr. A. Irwin.
1890	G. Detring	W. W. Dickinson	E. Cousins, W. H. Forbes, A. D. Startseff.
1891	G. Detring	W. W. Dickinson	E. Cousins, W. H. Forbes, A. D. Startseff.
1892	G. Detring	W. W. Dickinson	E. Cousins, A. D. Startseff, J. Wilson.
1893	G. Detring	W. W. Dickinson	R. A. Cousens, E. Cousins, J. Stewart, A. D. Startseff, J. Wilson.
			R. A. Cousens
1894	W. W. Dickinson	J. Wilson	Dr. A. Irwin, W. Fisher, J. Stewart.
			R. A. Cousens
1895	W. W. Dickinson	R. A. Cousens	W. Fisher, D. H. Mackintosh, J. Stewart.
			J. Wilson
1896	E. Cousins	J. M. Dickinson	W. C. C. Anderson, E. Cousins, J. Stewart, Ross Thomson.
1897	E. Cousins	J. M. Dickinson	W. Fisher, M. March, J. Stewart.
			W. C. C. Anderson

— : 中国人

図 2-5 1862 年～1897 年、原英租界の董事会の人員

(1938 年年度報告をもとに作成)

権者登録の手続きを行う 6 ヶ月前に租界内の 600 両以上の価値のある不動産を占有する者には選挙の資格があるとされた。選挙の資格を有する者は同時に董事の候補者になれた。候補者は 10 人を超えてはならず、候補者が 10 人、或は 10 人以下 5 人以上であった場合は直接董事会を組織し、10 人以上の場合は常年大会で投票し、10 人が選ばれた。常年大会が開かれる 10 日以内に 5 人以上の董事を選出できなかった場合は領事が董事を決定した¹⁹⁾。実際には 1897 年まで、董事は 5 人であり、図 2-5²⁰⁾に示すように、1878 年に一人の中国人とみられる董事がいた以外は全てが外国人であった²¹⁾。

董事会の下には電気、病院、水道、工程、会計、警備、義勇隊の 8 つの委員会を設け、董事、董事長が各委員を兼任した。董事会は租界内の全ての業務を担い、例えば、租界の章程の議論と決定、担当官の任免、企業の売買、公有設備及び事業の運営と財政管理や税収の管理等にあたった²²⁾。

第 3 節 原英租界の道路・街区の計画

当時天津で暮らしていた Alexander Michie²³⁾によれば、原英租界が開設された区域には「いくつかの帆船の埠頭、畑、堆土と漁民や水夫の茅屋があり、その間を幅の狭い溝が隔て、溝の両側には管理されていない荒れた小道があった。二つの租界（原英租界とフランス租界）の場所は不潔な沼地と、乾燥した部分には何世代もの墓지가広がっていた」²⁴⁾ 括弧内は筆者。図 2-4 の α の既存道路や既存の住宅、また図 2-6 には Canal と示された堀も確認でき、そのような原英租界の姿を表している。

原英租界は英国軍のロイヤル工兵ゴードン

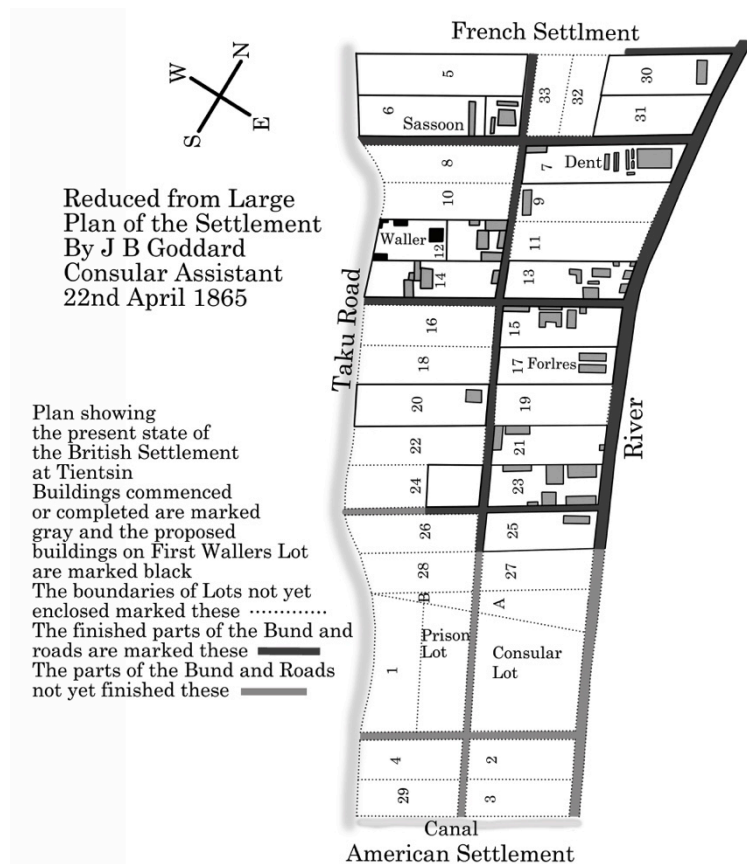


図 2-6 Plan of the British Settlement at Tientsin 1865
(イギリス国立公文書館に所蔵)

(Charles George Gordon)²⁵⁾によって計画されたものである。1860年から1870年の間、原英租界はゴードンが設計したように街区が形成されたとされている²⁶⁾。John Innocent という英国宣教師によると、ゴードンはよく長い道のりの視察を繰り返し、3,000名の兵士の良好な駐在条件を確認すると共に、租界の計画も行った²⁷⁾という。ゴードンは1860年9月から天津に2年間滞在していた。前節でも述べたように、原英租界は海河(Pei Ho)とTaku Roadの間に挟まれた区域に設けられたため、図2-6²⁸⁾の1865年地図において、原英租界の道路・街区の計画とその形成過程を確認することができる。ゴードンはPei HoとTaku Roadに平行してVictoria Roadを通し、それにほぼ直角に交わるように他の道も計画した。Victoria Roadは中街とも呼ばれ、原英租界の中心を貫いた。図2-4のαに見られるように、原英租界の開設前には既存の道路が存在していたが、それには従わなかったことが分かる。こうして、図2-7に示すように①Bund、②Victoria Road、③Taku Roadの3本のメインストリートと長方形の街区が計画された。図2-7に示された寸法をもとに道路の幅員と街区規模を測量すると、Taku RoadとVictoria Roadは幅が約10m~12mとなっているのに対し、Bundは幅が約20m~23mと相当広く、貨物の運搬や一時的な保管を行うのに十分であった。この3本のメインストリートに直交する6本の道路の幅員は約10m~12mとなっており、Bund以外の道路は比較的狭い幅であった²⁹⁾。このことから、ゴードンの設計には、積荷の揚げ降ろしと運搬、さらに一時的な保管を行うのに十分なスペースを確保するためにBundを広く設計し、それに対して他の道路の幅員を狭く抑え、原英租界という限られた区域の中で土地を最大限に利用して商業利益を得る意図があったと推測できる。また、図2-7³⁰⁾に示す②Victoria Roadはフランス租界から直線的に原英租界まで通すことも可能だったと考えられるが、2つの租界の境界を境にずれており、英租界とフランス租界の境界を明示することとなった。

原英租界の両端には比較的小さな4つの街区が設けられ、中心部には6つの大きな街区が形成されていた。街区の面積は平均で2,394m²であり、中の6つの街区は約2,500m²~約3,600m²と相対的に大きな街区が形成されていた³¹⁾。これは後に大規模な商業施設が立地できる十分な街区規模であったと考えられる。街区の形状は3本のメインストリートと平行する辺が長くなっており、奥行きが浅い長方形をなしていた。敷地割りはメインストリートと直交する方向が長くなるように計画され、それによって間口が狭く奥行きが長い敷地が形成されていたことがわかる。

また、図2-6に見られるように、1865年の原英租界では道路と街区の造成は未完成であった。道路は北側から造られていたことが確認でき、フランス租界に近い方から工事が進められたと判断できる。街区・敷地境界はまだ破線で示されている部分が多く、仮の境界であった。完成された街区内敷地の多くには建物が確認でき、既に使用されていたことが分かる。図2-6に見られるように、Bundに面している敷

地のビルド・アップが先行していた。Bund に面していない敷地も、6、20 のように Bund に近い Victoria Road に面するように建物が建てられた。また、7、15、23 のように、多くの敷地には比較的小さな建物が複数建てられていた。1864 年に天津に 8 日間滞在したデンマークの海軍中將 Steen Bille の証言によれば、「幅の広い Bund の後部にはいくつかの道路が通っており、最も目立つ建物は Dent & Co. (顛地洋行、図 2-6 の 7) であったという。他の商人たちは自分の土地の周囲に境界を設け、大きな倉庫と小さな仮設住宅を建てた」と記録も残されている³²⁾(括弧内筆者)。したがって、図 2-6 の建物の多くは住宅や倉庫であったと推測できる。6 の Sassoon(沙遜洋行)や 7 の Dent(顛地洋行)にみられるように、この時点ではまだ洋行³³⁾の会社名ではなく、オーナーの名前のみが記されていた。顛地洋行は原英租界内に最初にビルを建設した洋行であり³⁴⁾、この時既に原英租界内での経営が始まっていたかは不明であるが、少なくとも業務系は既に原英租界に進出していたことがわかる。また、表 2-1 に示すように Phillips&Moore の E. Waller は 1861 年に天津に来ていたことがわかる。個人宅か会社の業務施設かは不明だが、図 2-6 の 12 に示されているように、1865 年には原英租界に新たに建物を建設していた。このように天津に来ていた外国人商人達は徐々に原英租界に進出していったと推測される。

Rasmussen の著書によれば、1870 年までの間、新しく天津にやって来た大部分の外国商人は天津城の中で次々に起業した。既に租界内に建物を建てた人も、まだ天津城の周辺に代理人と倉庫を置いていた³⁵⁾。つまり、1870 年まで、経営の中心地は天津城とその周辺であり、租界への進出は始まったばかりであったと見られる。しかし、1870 年に天津教案と呼ばれる現地の住民が外国人に対する暴動が起こった。Rasmussen の著書によれば、1870 年の天津教案以後、外国人たちの多くが身の安全を考慮して、天津城から原英租界へ移住し、新しくきた外国人も天津城に住むことは非常に少なくなったが、一部の外国商人はまだ天津城に洋行(商館)を開設していたという³⁶⁾。外国人たちは生活の場を原英租界内に移そうとしていたことが分かる。このことが租界の市街化を加速させるきっかけとなったと考えられる。

第 4 節 原英租界における施設建設

第 1 項 原英租界における企業・個人による開発

前章でも述べたように、原英租界の場所には不潔な沼地が広がり、乾燥した部分には何世代もの墓地が広がっていたとされている³⁷⁾。図 2-7³⁸⁾に示す 1888 年の原英租界内には既に多くの商業施設が設けられていた。しかし、その周辺、特に西側には墓地が広がり、その間を小道が通るといふ、従来の状態のままであった。

これに対し、原英租界内には既に多くの商業施設が設けられていた。洋行（商館）、棧³⁹と呼ばれていた宿舍兼倉庫、そして銀行が多く確認できる。これらの商業施設は港湾空間の開発・整備にも大きく関わり、またそれによって、原英租界の市街化が進展した。

先ず、土地の獲得方法について述べておきたい。原英租界内で土地を得たい者はイギリス領事と土地賃借契約を結び、そして、その者は以前の中国人土地所有者とも契約を結んで土地の権利をかうことになっていた。契約書は形式的に中国官憲の認可を受けるが、最終的にはイギリス領事館に保管される。このような土地を Crown Lease（皇家租地）と称した。領土の分割ではないことを示すため、形式的な賃料が清朝に支払われ続けた⁴⁰。

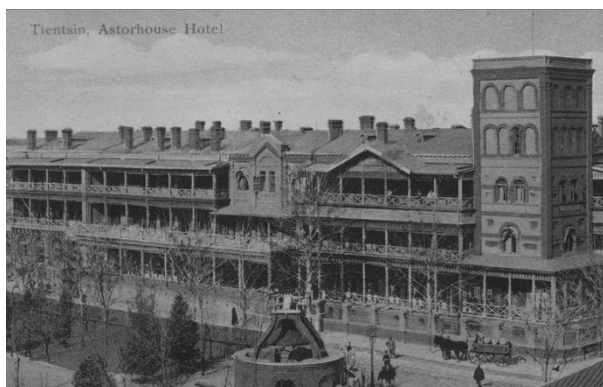


写真 2-1 Astor House Hotel
絵はがきによる（年代不詳）

上記のような方法によって土地を獲得した事例が確認できる。図 2-7 の 41 に示す Astor House Hotel（利順徳徳商客寓）は前出の John Innocent という英国の宣教師によって創業された。彼は 1861 年から天津に居住し、当初は天津城付近に住んでいた。皇家租地についての英国政府と租界内の外国人との間に決められた契約に基づき、白銀 600 両で土地 6 畝（約 4,000m²）を 1863 年の春には購入した。その土地で英国風様式の平屋を建て、貨棧、洋行などとして使った。当時は泥屋と呼ばれていたが、1886 年には写真 2-1 に示すように三階（角の部分は 5 階）建てのホテルに改築された⁴¹。

図 2-7 の 1 の Collins & Co.（高林洋行）のオーナー・Collins はイギリス人で、元は小さな商船の船主であったが、後に大沽領港員（大沽港水先人）となった。Collins & Co. は以前から存在していた貸棧を借り、そこで貯めた資金を使って商売を行った。しばらくすると、人々は元々そこにあった貨棧の名を忘れ、高林貨棧として認識するようになった。70 年代には青海高原から羊毛と革製品を天津まで運送し、天津で包装を行った後、海外へ輸出した。こうして Collins & Co. は原英租界で有名な洋行になった⁴²。このように、原英租界に進出した商人は最初から自分の建物を建てるのではなく、先ず棧を借り、そこを起点に商業活動を行うケースが存在することが分かった。元々あった棧の持ち主は不明であるが、図 2-7 の 21、28、30、38、57 に示すようにいくつかの棧を確認できる。21、28、38、55 のように企業を招き入れるという意味で招商と記されているものもあり、これはまだ企業が入る前の状態を示

すものと考えられる。また 30 の薩實貨棧と 57 の薩實仁記棧房は初期の高林貨棧のように洋行ほどの規模はまだないが、棧を建て、或は借りて、貿易を行って

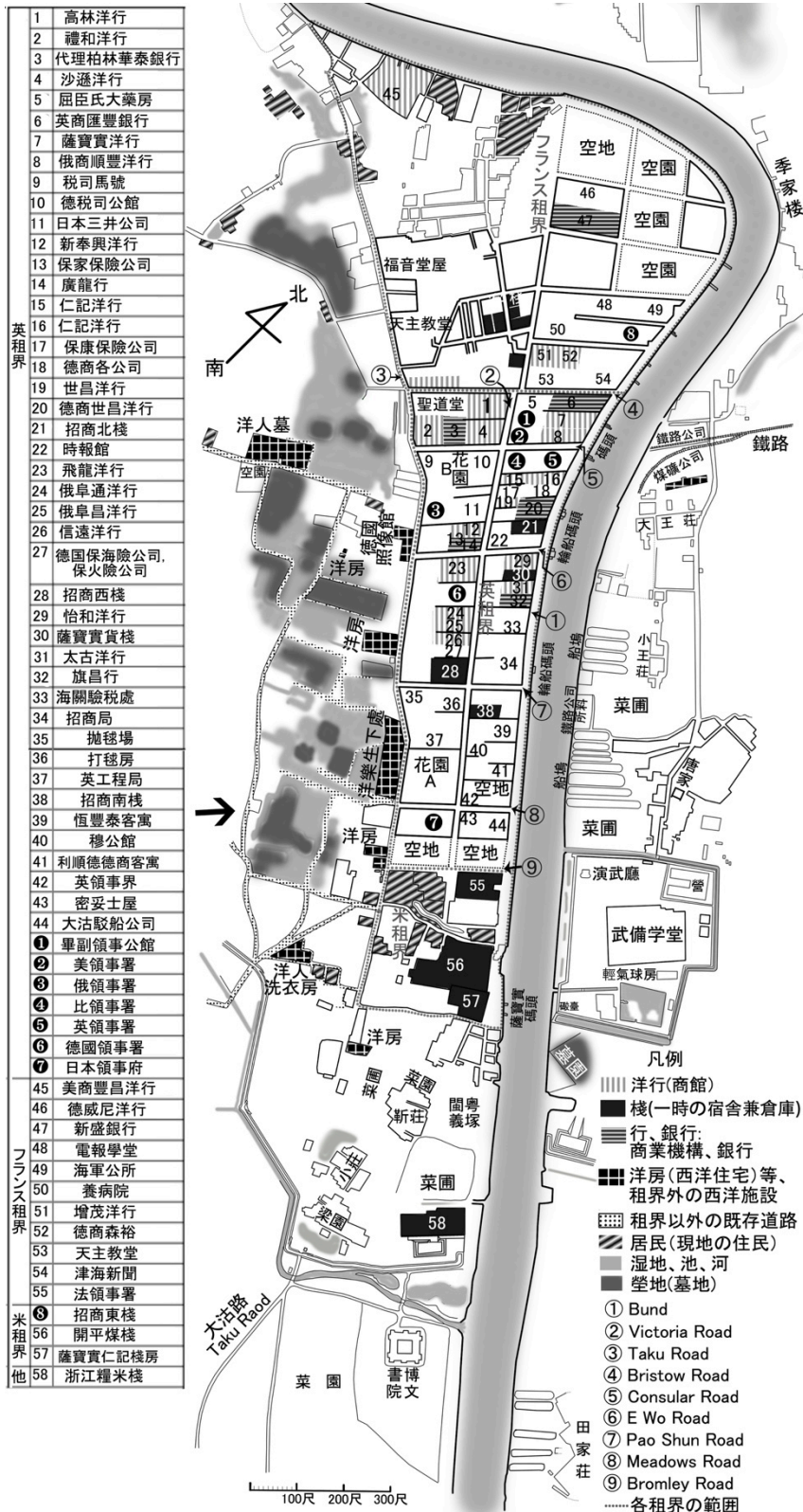


図 2-7 1888 年の原英租界とその周辺地図 (天津城市歴史地図選編所収の天津城至紫竹林図[1888 年(清光緒十四年)]をもとに作成)

たと考えられる。洋行で働いていた従業員もまた棧に住んでいたことが確認できた。例えば、梁炎卿は Collins & Co. と Jardine Matheson の買弁⁴³⁾として、鄭翼之は Swire(太古洋行)の買弁として、吳調卿は匯豐銀行の買弁として勤務し、招商南棧に一時的に住んでいた。その後、英租界が拡張され、推广界⁴⁴⁾が開発されると、買弁の多くはそこに高級住宅を購入した⁴⁵⁾。つまり、原英租界が開設された初期の商人たちはその後天津城内とその付近から活動の場を租界内に移し、洋行や棧に住みながら商業活動を行っていたものと推測される。

一方、図 2-7 に示すように、海河(Pei Ho)には「碼頭」と記された埠頭がいくつか確認できる。租界が開設されてから、各租界は木造の棧橋を建設した。その内原英租界には5つが造られ、上流からそれぞれ 60 フィート、200 フィート、420 フィート、350 フィート、60 フィートの長さがあり、全長は 1,090 フィートに達していた⁴⁶⁾。

29 の Jardine Matheson(怡和洋行)は 1867 年に天津支店を開業し、Collins & Co. に次いで二番目の早さであった。Jardine Matheson は天津に包装工場、生産加工工場、倉庫を持ち、さらには自社の舟入(船塢)と埠頭を持っていたとされる⁴⁷⁾。図 2-7 の 29 の前には埠頭が確認でき、写真 2-2⁴⁸⁾においても、Jardine Matheson のオフィス(右側の 4 階建ての建物)の前には埠頭が造られていたことが分かる。租界の埠頭の岸壁の多くは石と木の板で造られ、船が直接接岸できるようになっていた⁴⁹⁾。Jardine Matheson はこれを保有し、使用していたと考えられる。

また、図 2-7 の 34 に示す招商局は、洋務運動の産物であった。洋務運動は 1861 年に始まった欧州の近代技術を導入・使用しようとする運動である。招商局の正式名称は輪船(汽船)招商局であり、洋務運動を推進した李鴻章⁵⁰⁾が組織したものである。その意図は、商船を外国に航行させ、外国企業だけが得ていた利益を中国の商船にももたらすことで、富国に繋げることであった。招商局は官督商辦企業(官僚系企業)であり、1872 年 9 月に李鴻章は部下を天津、上海に派遣し、中国系企業と連絡を取り、資本を集

め、船を購入し、従業員を雇った。李鴻章自身も 5 万両の株を買い、1872 年 12 月 16 日に正式に営業を開始し、上海に本社を設置して、すべて李鴻章の指示に従わせた。天津は業務を構想し方策を



写真 2-2 The quay of Jardine Matheson

決定する場所であった。(『天津簡史』に所収、年代不詳、周辺の建物が少ないことから遅くとも 1920 年以前であると判断した)

を持っていた（図 2-7 の 34 の正面に示す輪船碼頭がその埠頭である）。招商局の創立は外国企業の極度の不満を招いた。Swire と Jardine Matheson はアメリカの Russell & Co.（旗昌洋行）と直ちに連携し、貨物量毎トン 8 両を徴収していたのを毎トン 5 両にまで値を下げ、客席の価額も半額から 7 割引にまで運賃を値下げした。当時の外国商船は 50 隻に達していたのに対し、招商局及びその代理の船は合計 16 隻しかなく、大きな圧力に晒されることになった。しかし、洋務派官僚は、招商局に漕糧（運河、河川、海等を使って米等の穀物を税として北京まで運送する）を独占的に運送する権利を与え、清政府は沿海各省の公的資産の運送権を与え、さらに運送物資の 2 割の貨物を共に運送する等の特権を与えた。これらの庇護を受けて招商局関連の船も存続を続けることができた⁵¹⁾。1866 年に、英国は中国の租界に対し地畝章程を定め、その中で、如何なる場合も中国人は租界内で土地を租借できないと規定していた⁵²⁾。しかし、招商局のように、実際には中国企業も原英租界内に立地しており、外国企業との対峙の構図は鮮明であった。

この他、原英租界内には英国以外の外国施設も多く確認できる。領事館をはじめ、ロシア、ドイツ、そして日本の商業施設も確認できる。このように原英租界は一種の国際社会を形成していたことが分かる。多くの国の領事館が原英租界に立地の場を求めたことには次節で述べる原英租界が持っていた多国籍性が影響していたと考えられる。

以上のように、原英租界に金融機関や貿易会社等が次々に立地し、図 2-7 の矢印が示す原英租界の西側（写真 2-3）からは洋行が立ち並ぶ景観がみられたことがわかる⁵³⁾。ただし、図 2-6 が示す 1865 年と同様に、この時点でも図 2-7 の 29～34 のように、Bund 沿いにより密集して建物が立地していた。その西側街区の敷地でも Bund に近い Victoria Road 沿いに商業施設が集中していた傾向が見られ、あくまで Bund を正面とした立地であったことがわかる。



写真 2-3 1900 年代の洋行

(Tientsin: An Illustrated Outline History に所収)

第 2 項 原英租界における公共施設の建設

第 1 項で述べたように、各企業が原英租界への進出に伴って商業用建物が建てられ、当該区域が開発され、商業中心地へと変貌を遂げていったが、1888 年の地図に

においては公共施設もつくられたことが確認できる。第 2 節でも述べたように、開設初期の原英租界は天津の英国領事館が直接管轄していたが、1862 年に董事会が組織され、租界内の統治の主体となって施策決定も行うようになった。1899 年まで、董事は 5 人であり、国籍に関する規制はなかった⁵⁴⁾。董事会の執行機関は工部局と呼ばれ、インフラ整備などの市政管理を行った⁵⁵⁾。初期の原英租界とその周辺の都市化に貢献した董事はデトリング (Gustav von Detring)⁵⁶⁾というドイツ人であった。彼は洋務運動を推進していた李鴻章にドイツから武器を購入する手伝いを行い、親交を深めた⁵⁷⁾。1877 年から津海関税務司の役職を任され、さらに 1878 年から 1893 年まで、1882 年～1884 年を除く 13 年間もの間英租界工部局董事会主席に選ばれた⁵⁸⁾。

図 2-7 中に花園と示すように、原英租界の中には公園が 2 つ造られていたことが分かる。その内、花園 A と示してある Victoria Park は天津最初の公園であった。Victoria Park のあった場所は悪臭の漂う水たまりであり、80 年代半ばの Victoria Park の周囲はまだ囲まれておらず、荒れ地のままだった。クリケットのゲームを行う時のみ掃除が行われたが、普段はゴミが置かれていたという⁵⁹⁾。そして 1887 年 6 月 21 日になって、ビクトリア女王の即位 50 周年を記念して正式な公園として開園された⁶⁰⁾。その後の数年間は公園の一角を使いしばしば馬術の訓練が行われた⁶¹⁾。図 2-7 中のもう一つの公園 (公園 B) に関する記録は見当たらないが、1900 年頃の地図には P. A. Park と表記されている⁶²⁾。以上からわかるように、原英租界が華やかな空間として市街地化されるにつれ、西洋人たちは公園緑地という憩いの場を求めたことが分かる⁶³⁾。

1889 年、工部局は 3 万 2 千両の白銀を投資し、近代中国の条約港の中で最初の City Hall であるゴードン・ホールを 図 2-7 の 37 に示す工程局 (工部局) のあった場所に建設した。ゴードン・ホールの名は Charles George Gordon の名前にちなんだもので、1890 年に写真 2-4 に示すように建物は完成した。ゴードン・ホールの設計は先ずチャンバース (Chambers)⁶⁴⁾が行い、それを工部局の初代 Secretary であったスミス (A. J. M. Smith) が調整し、元石工であったドイツ系銀行家フランゼンバッハ (Herr Franzenbach) が石を使うアイデアを提供した。建築様式はイギリス中世の城郭を思わせるチューダー・ゴシック式であり、天津特有の黒煉瓦で構成された⁶⁵⁾。当初は莫大な



写真 2-4 Gordon Hall in 1890

(Tientsin: An Illustrated Outline History に所収)

投資と利用率の低さから住民から批判された。しかし、1900年に起った義和団の乱では、租界内に住んでいた各国の住民の女性や子供がゴードン・ホール地下室に避難し、被害を免れたという⁶⁶⁾。

第5節 原英租界における開発とその周辺地域の変容

図 2-7 に見られるように、1888年の時点では、フランス租界内にはまだ以前からの現地住民の家屋が見られ、空き地等も多く確認できる。開発はそれほど進んでおらず、原英租界内の市街地化の進展とは対照的であったことが分かる。一方、原英租界の対岸には大王荘や小王荘、米租界の南側には斬荘、小荘や梁園のように現地の住民の宅地と、その周辺には菜圃と記された畑が広がっており、現地の住民が耕作しながら生活していたと考えられる。米租界の南側には58の浙江糧米棧があり、浙江から米を運び入れていたと考えられるが、その近くには閩粵義塚（福建と広東の出身で名前が不明の人の墓地）が確認できる。また、原英租界の西側にも墓地が数多く広がっており、そこには小道が既に存在していた。これらは後に英租界が拡張された際の道路形成に影響を与えた可能性がある。そして、その周囲には洋式住宅や洋人墓などの、外国人のための施設がいくつも確認できる。政府間において英租界の拡張が調印されるのは1897年であるので、その前から外国人たちは租界外へ進出をしていたことになる。原英租界内にはまだ空き地がいくつか見られるが、多くの敷地には商業施設や領事館などの公共建築が建てられていた。そのため、外国人達は住宅建築や墓地等の施設をその周辺に求めたことが背景にあったと考えられ、後の英租界の拡張への需要はこの時から生じていたと思われる。また、原英租界の周辺には「民居」と書かれた中国人住民の家屋も見られる。このように租界の西側の地区には雑居地が形成されていたのである。

一方で、上記のような原英租界の周辺区域には、いくつかの中国系施設も確認できる。図 2-7 に示すように、原英租界の対岸に鐵路（鉄道）が示されている。その付近には鐵路公司与煤礦公司が見られる。また、図 2-7 の 56 は開平煤棧であった。煤礦公司与開平煤棧は唐山付近の開平鎮の石炭を運送・販売する会社であった。これらの施設からは、中国の近代化を推進しようとしていた洋務運動の動勢を克明に見ることができる。

1876年李鴻章は招商局の総辦（取締役）唐廷枢及びイギリス鉱山技師であるマリス（馬立師、Samuel John Morris）を唐山付近の開平鎮に派遣し、石炭と鉄に関する調査を行った。北京とイギリスでサンプルを分析し、イギリスの鉱山で採れる石炭の中～上質の石炭と同等の質であるとの結果を得た。唐廷枢の報告により、石炭採掘と製鉄の設備、さらに鉄道の建設には80万両の投資が必要とされた。清政府は資

金不足と判断し、官督商辦方式（商人が株を買って投資し、政府派遣の職員が管理する方式）を取った。1878年、20万両余の株を集め、機械の購入、建物の建設を行い、開平礦務局（開平煤礦）が創設された⁶⁷。また、バーネット（R. R. Burnett）を技師長に雇い、欧州の方法を使って採掘作業を開始した⁶⁸。1881年の一日当たりの産出量は300トンであった。石炭の質は非常によく、東洋で最高の品質であったという⁶⁹。1882年から、開平の石炭は天津の市場に投入され、毎トン4.5～5両の価格で販売された。当時天津で販売されていた日本産の石炭は毎トン7～8両であったため、価格競争に勝利し、その年から天津の外国産石炭の輸入量は急速に減少した。日清戦争の直前では一日当りの産出量は2千トンに達し、天津機器局等の官辦企業（国有企業）と北洋艦隊の需要を満たすだけでなく、天津まで来る国内外の汽船にも開平の石炭を提供していた⁷⁰。原英租界内の洋行も開平の石炭を購入し、使用していたと考えられる。

スティーブソン（Sir MacDonal Stephenson）が中国政府に最初の鉄道建設案を提出した25年後の1888年に、中国で最初の鉄道が天津と唐山を結んだ。初めに開平の石炭を炭坑から30マイル離れた海港の北塘まで運ぶため、唐山から北塘河畔の芦台までの鉄道を建設することとなった。キンダー（Claude W. Kinder）が責任者となり、1881年に先ず6マイルの鉄道が完成した。鉄道工事の初期はロバの牽引を動力とする列車を使いながら行われた。キンダーは中国政府の反対に遭いながらも、開平煤礦総辦の唐景星の支持を受け、李鴻章に計画を受け入れさせて、蒸気駆動の機関車を自作した。機関車はRocket of Chinaと名付けられ、材料を運び、この最初の6マイルの鉄道の完成を加速させた。1886年には芦台まで鉄道の延長が認められ、1887年に竣工し、開平鐵路局を創って管理させた。1887年には塘沽まで、1888年には天津まで延長され、運営会社は中国天津鐵路公司と名付けられた⁷¹。図2-7の原英租界対岸の鐵路（鉄道）は開平まで通っていたもので、その付近の鐵路公司は中国天津鐵路公司であると判断できる。さらにその付近には鐵路公司料所（倉庫）と舟入が確認できる。開平から運んできた石炭を北洋艦隊のある大沽まで、或は中国全土まで運送するには船舶も必要であったと考えられ、その舟入は船を修理、或は停泊させるために開平煤礦、或は鐵路公司が建設したものであったと推測できる。

この他、図2-7の米租界の対岸には武備学堂、さらに米租界の南には博文書院が確認できる。武備学堂もまさしく洋務運動の産物であり、中国最初の近代陸軍の人材を育成する軍事学校であった。1885年に開校され、受験による選抜を行い、入校が認められた。教師や教授にはドイツ人を多く起用したことが知られている⁷²。図2-7に見られるように敷地内には輕氣球房（飛行船を置く場所であったと思われる）や礮臺（砲台）が確認でき、近代的な戦術を学ぶ為に必要な設備を備えていた。

また、1886年、デトリングは天津に総合的な大学である博文書院（Tenney's

College) を創設した。博文書院は資金面の問題によりその後挫折したが、その基礎の上に 1895 年には北洋大学が創設された⁷³⁾。図 2-7 に示すように、博文書院は中庭を囲むように建物が配置され、中国の伝統的な建築様式である四合院様式⁷⁴⁾を彷彿とさせ、まさに洋務運動が掲げていた中体西用⁷⁵⁾を表していた。

第 6 節 小括

原英租界は天津城からやや離れた南東に設けられ、英国ローヤル工兵であったゴードンによって計画され、道路・街区の形態が形成された。道路の形成は既存道路の影響は受けず、全く新しく造られた。その設計は bund を正面としたグリッド状の道路網を計画し、交易の利便性を重視した港湾空間の設計が行われた。つまり、租界時代前期では都市の設計ではなく、植民都市に多く見られる交易のための港湾空間の設計であった。

原英租界では洋行を中心とした多くの商業施設が立地し、それらの企業が埠頭や棧橋を造り、商業活動を行ったことが明らかになった。原英租界の開発に主導的役割を果たしたのは意外にもデトリングというドイツ人であった。彼は工部局董事会主席を担当し、李鴻章との親交を生かしながら、原英租界内の公共施設の開発などを行い、さらにその周辺の市街地化にも影響を及ぼした。これらによって、原英租界の市街地化が大きく推進された。

この時期の原英租界の董事会のメンバーに中国人はほとんどいなかった。原英租界の空間も洋風が中心であり、英国人による開発であった。一方で、当時の天津社会では、海河の西岸には洋行などが立ち並び、その向かいの東岸には中国近代最初の鉄道、石炭会社が立地し、中国資本と欧州資本が対峙する構図が景観的にも鮮明に浮かび上がった。原英租界は西洋の技術・文化を吸収する極めて重要な場所であったと言える。このように、原英租界は当時の天津の近代化を大きく動かし、その影響はまさに原英租界を中心に同心円状に広がろうとしていた。その後の日清戦争での敗戦によって洋務運動が終焉を迎え、さらにロシア、ドイツ等の租界の開設によって海河の兩岸は租界に独占される状況に至ることになる。そのため英租界の拡張は西へ向かうこととなった。租界の開設には敗戦を象徴する屈辱的な側面が存在し、当時の天津に生きた庶民に苦難を与えたことは事実である。しかし、まさにこの原英租界は、中体西用を掲げた洋務運動の受け皿となり、天津に近代都市、さらには中国に近代国家への変貌をもたらした側面も強く存在していたのである。

何れにしても、租界時代前期の原英租界はあくまでも英国人等の外国人のため空間としての性格が強いことが明らかになった。

注：

- 1)天津社会科学院,《天津簡史》編写組：天津簡史,天津人民出版社,1987 の付録図において、清代の潞河督運図を示し、当該図において当時の海河（Pei Ho）及び三岔口が繁盛していた状況を示したと紹介している。当該文献の付録図は不鮮明であるため、国家博物館所蔵の原本をもとに図 2-2 を作成した。
- 2)天津社会科学院,《天津簡史》編写組（1987）、pp.109-113
- 3)天津市地方志編修委員会編著:天津通志·附志·租界,天津社会科学院出版社, 1996、 p.17
- 4)同上、 p.39
- 5)イギリス国立公文書館所蔵。
- 6) O.D.Rasmussen: Tientsin: An Illustrated Outline History, The Tientsin Press, Ltd. 1925 の p.39
- 7) O.D.Rasmussen（1925） p.39 の次の記述による。At first, after the ratification of Treaties, a few foreign traders and two or three Protestant missionaries settled in the native city, in that portion of it lying between the East Wall and the river from the present “Austrian” Bridge around the river bend to the former Viceroy’s Yamen and Tung Fu Chiao (“East Pontoon Bridge”) Most of the firms had offices on the “Kung Pei Chieh” (North Palace Street) which bisects this district, running parallel to the river one block back from the bund, similar to the Victoria Road. The missionaries lived in a house near the center of the city, inside the walls, but some of them, after a while, built small houses in the French and British concessions.
- 8)天津社会科学院（1987） p.114 による。
- 9)1800 年代の天津城の西南角は空き地や沼地であったため、この記述は東南角の間違いだと思われる。
- 10)天津社会科学院（1987） p.127 による。
- 11) O.D.Rasmussen (1925), p.39 の Mr. Innocent and Mr.Blodget hired a house in the middle of the city, near the Ts’ang Men K’ou chapel. という記述による。
- 12)郭蕴静：天津古代城市發展史,天津古籍出版社, 1989 年 09 月、 P.145
- 13)同上
- 14)Jonathan Lee 夫妻は現在(O.D.Rasmussen (1925)が出版された 1925 年を指す)Court Hotel、当時は Globe Hotel、その後は Queen Hotel と呼ばれた場所にあった中国式住宅に 18 ヶ月住んでいた(O.D.Rasmussen (1925), p.39 による)。イギリス国立公文書館に所蔵の 1896 年の地図において、図 2-4 の矢印の部分には Globe Hotel と記されていた。
- 15)布野修司：近代世界システムと植民都市, 京都大学学術出版会, 2005、 p.21 によれば、都市のフィジカルな形態に着目すると、商館 factory、要塞 fort、城塞 castle、都市 city と呼ばれるように、その規模、機能によって、植民都市のレベル、段階を区別できる。商館あるいはロッジ lodge は交易のみのための最小限の施設である。

- 16)天津市地方志編修委員会編著 (1996) pp.81-82
- 17) O.D.Rasmussen (1925), p.44
- 18)同上。
- 19)同上。
- 20)1938 年工部局年度報告 p.12 により作成。
- 21)天津市地方志編修委員会編著 (1996) pp.81-82 及び 1938 年年度報告 pp.12-14
- 22)同上。
- 23)天津地域史研究会編,天津史 再生する都市のトポロジー, 東方書店, 1999、p.138 による。
Alexander Michie はイギリス人であり、上海・牛荘に滞在したあと 1883 年に天津にやって来て、ロンドン『タイムズ』の特派員を務めつつ、天津の英字新聞 Chinese Times の編集を担当した。外交官オールコットの伝記など著作も多い。
- 24) O.D.Rasmussen: (1925), pp.37-38
- 25)天津地域史研究会編(1999)、p.138、p.239 による。Charles George Gordon (1833~1885) は、イギリスの軍人であり、天津では Royal engineer (イギリス工兵軍官)として活躍した。クリミア戦争で戦功をあげたのち、アロー戦争に従軍し、天津の英租界(原英租界)の基礎をつくった。その後、上海に行き、ウォードが創設した常勝軍を率いて太平天国軍を鎮圧した。スーダン総督やモーリシャス司令官をへたのち、スーダンのマフディーと戦って戦死した。
- 26) O.D.Rasmussen (1925), p.40
- 27) O.D.Rasmussen (1925), p.38
- 28)イギリス国立公文書館所蔵の 1865 年天津地図基に作成。
- 29)1888 年地図のスケールは「密達尺」であり、メートルのことを指す。廖礼平:論近代漢語西源外来語,語言研究,No.2,Vol.25,2005.6 の p.68 による。道路の幅員を 1888 年地図からの計測によって一の位まで読み取れた数値を採用した。ある程度の誤差はあると思われるが、相対的なスケールは確認できると判断した。それとともに、現在の道路の幅員も測量した。その結果、現在の幅員の方が広がっている部分はあるが、1888 年と基本的には変わらないことも確認できた。
- 30)当該図には道路名は表示されていないため、O.D.Rasmussen(1925)所収の 1925 年の英租界の地図に示されている道路名を表示した。
- 31)1888 年地図のスケールを基に図面を作成し、面積を計測した。
- 32) O.D.Rasmussen (1925) p.42 による。
- 33)中国で、外国人の経営する商店の称。
- 34)天津社会科学院 (1987) p.122 には「洋行の商人たちは先ず天津城付近で起業したが、その後租界の発展に従い、顛地洋行は最初に英租界にビルを建設した。それから他の洋行も

次々と租界に進出した」とある。以上の記述により、顛地洋行は天津で商業活動を行っていたことがわかる。

35) O.D.Rasmussen (1925), p.40

36) O.D.Rasmussen (1925), p.44

37) O.D.Rasmussen (1925), pp.37-38

38)紫竹林は天津の古い地名であり、その場所は英租界とフランス租界が開設した当初の区域である。

39)天津社会科学院 (1987) pp.61-63 によれば、一般的に中国の棧は貨物の貯蔵、または旅客が宿泊する施設を指す。1684年に海禁が取り消され、天津の中国北方における経済地位が上昇し、福建と広東の商人が開いた棧房が多く天津に出現した。当時は洋行または局棧と呼ばれ、例えば針市街の潮安棧（場所は不明）という棧は福建と広東の商人のための旅館であり、同時に貨物を保管し、買主の紹介、代金の徴収、品物の評価の手伝いまで行っていた。また、山本進:清代の市場構造と経済政策,名古屋大学出版会,2002、p.135によれば、海禁とは貿易の独占や海上の治安維持を目的として、民間船舶の自由な航行を制限または禁止する政策である。

40)天津地域史研究会編 (1999) p140 による。

41)天津档案網, 利順徳見証百年天津史,

(http://www.tjdag.gov.cn/tjdag/wwwroot/root/template/main/jgsl/gsfq_article.shtml?id=4447)による。

この建物は現在も残されている。

42)天津市地方志編修委員会編著 (1996) による。

43)宋美雲,宋鵬 (2006) 、p.60 による。買弁とは洋行等が中国に進出、或は貿易を行う際、その手助けを行う中国人のことを指す。

44)英租界の第三次拡張区域 (British Extra Rural Extension) のことである。

45)吉澤誠一郎:天津誌,近代中国都市案内集成,第19巻,ゆまに書房,2012、pp.188-189 による。

46)同上。

47)6号院創意産業園,怡和洋行天津公司ホームページによる,

http://www.6art.net.cn/news_222.aspx

48)天津社会科学院(1987)に所収の写真による。写真の年代は不明であるが、その周辺にはまだ建物が少ないので、1900年代の写真であると思われる。

49)中国航海史研究会,《天津港史》編輯委員会:中国水運史叢書—天津港史(古、近代部分),人民交通出版社,1986、p.60 による。

50)天津地域史研究会編(1999) pp.16-17 による。李鴻章は科挙合格後、曾國藩に師事、淮軍を編成し、江蘇巡撫として太平天国を鎮圧した。両江総督、糊広総督をへて、1870年には直隸総督兼北洋大臣となり、清末の外交を担当した。日本では、日清戦争後の下関条約調印

の中国側代表者として知られている。また、李鴻章は中国の近代化のために西洋の文化を取り入れようとした洋務運動を推進した。天津はまさにその中心地であったとされる。

51)中国航海史研究会,《天津港史》編輯委員会:中国水運史叢書—天津港史(古、近代部分),人民交通出版社,1986、pp.76-78 による。

52)天津市地方志編修委員会編著(1996) p.163

53)写真3はO.D.Rasmussen(1925)の第13章(Second Stage of Siege)中に所収されており、第10章から15章にかけて1900年頃に起こった義和団の乱について一連の詳細な社会状況を記述している。写真のキャプションにはCarrying in wounded during siege of Tientsin; View shows west end of Meadows Road looking towards river.と表示されている。Meadows Roadは図6の⑧に示す道路であるが、1897年に英租界は拡充界(British Municipal Extension)と呼ばれる第一回目の拡張が行われ、Meadows Roadは西へ延長されていた。写真3はその延長されたMeadows Roadの西端から、海河(Pei Ho)に向かって取られたものである。

54)天津市地方志編修委員会編著(1996) pp.81-82

55)同上、p.83

56)Gustav von Detring(中国名は德瑾琳)はドイツ出身でありながらイギリス国籍であったとも言われているが、宋美雲,宋鵬:話説津商, p.273, 中華工商聯合出版社,2006によればドイツ人であった。

57)宋美雲,宋鵬(2006)pp.23-24による。

58)1886年、Detringは李鴻章との親交を活かし、佟楼より南西の養牲園とその付近の土地を贈与された。彼はそこに自分の別荘、Detring Villaを建てた。その位置は後に第三次拡張域の西端から南へ約500mの場所であったと思われる。宋美雲,宋鵬(2006)のpp.276-277によれば、Detringは自分の別荘付近にアジアの競馬場を建設した。その後、工部局は競馬場への交通確保を名目に、後に第三次拡張の境界となる競馬場から原英租界までの道路を建設した。このようにして、工部局は租界外において道路を建設し、その道路の両側の土地をも獲得していく方法を使って、自分たちの利益を拡大していった。1887年には道路の舗装を行い、天津の最初の碎石路を建設した。1890年代にはDetring自身が出資し、道路の両側に樹木を植え、並木道を形成させた。これは当時開設したばかりのドイツ租界にも模倣された。宋美雲,宋鵬(2006)のpp.281-282によれば、1980年代には中国政府の機関であった工程局もDetringの方法を参考にし、天津城内にも道路の整備、舗装、街路灯の設置を行い、通行の利便性を向上させた。

59)O.D.Rasmussen(1925), P.61

60)同上 P.63

61)同上。

- 62)イギリス国立公文書館所蔵の MAP OF THE FOREIGN CONCESSIONS OF TIENTSIN 中の記述による。当該地図には作成された年代は表記されていないが、義和団の乱に対するイギリス軍やフランス軍の防衛態勢や、租界の市街化状況から 1900 年前後のものであると判断できる。
- 63)他にも、図 2-7 の花園 A の南西斜向いの区域に公園を造る計画もあったが、1887 年に工部局はその計画を中止した。O.D.Rasmussen (1925), P.61 による。
- 64)Chambers という人物に関する記述は見つかっていない。おそらくは当時原英租界内に在住していた、建築設計の経験のある人物であったと思われる。
- 65)天津地域史研究会編 (1999)、P.239 及び O.D.Rasmussen (1925), P.64 による。O.D.Rasmussen (1925), P.64 においては次のように記述されている。The original plan of the Gordon Hall was designed by Mr. Chambers, but was modified by Mr. A. J. M. Smith, first Secretary of the B.M.C., a “man with the versatility of Leonardi da Vinci”, and Herr Franzenbach, a German baker, who had been a stonemason in his youth and who had a ideas of sorts on the subject of building. この中で Herr Franzenbach は baker (パン屋) であったと記されたが、天津地域史研究会編 (1999) の P.239 においては銀行家と訳されている。当時商業地として繁栄していた状況を考え、また、工部局が意見を聞き入れたことから判断すると、おそらく baker は banker のタイプミスであったと考えるのが妥当であり、銀行家であったと考えられる。
- 66)張暢,劉悦:李鴻章的洋顧問:德瑾琳與漢納根,伝記文学出版社,2012、pp.283-284 による。この建築は 1978 年の地震で被害を受け、取り壊されたが、その後再建され、現在は天津市のランドマークとなっている。
- 67)天津社会科学院 (1987) pp.153-154 による。
- 68)O.D.Rasmussen (1925), p.68
- 69)天津社会科学院 (1987) p.154 による。
- 70)同上 pp.154-155 による。
- 71)O.D.Rasmussen (1925), pp.67-69 による。
- 72)天津社会科学院 (1987) p.165 による。
- 73)張暢,劉悦 (2012)pp.300-303 による。
- 74)同上。第一期の校舎として、四合院式の建物とそれを連結する平屋を建設した。
- 75)中国の伝統思想を保持しながら、積極的に西洋の文物、技術として機械、機器を活用し、近代文化を積極的に摂取しようとする運動。田中重光(2005)の p.31 による。

第3章 租界時代中期の英租界（1897～1917）：

拡充界の開発と原英租界の変容

第2章では1860年に原英租界が開発され、その港湾空間を含めた建設過程を1900年まで論じた。本章では拡充界の開発過程を原英租界が開発が本格的に始まる1917年まで明らかにし、さらにその間の原英租界の変容について論じる。拡充界は1897年に拡張された区域であるが、それより前に既にある程度の開発が進行していたので、1897年以前の当該区域の分析も本章に含めた。

公共的な空間・施設の出現は都市の近代化を象徴する特徴の一つである。拡充界は英租界の第一次拡張した区域で、そこにはキリスト教関係の宗教施設である教会や、音楽ホール、学校、病院のように多くの公共施設が立地した。第2章で論じたように、原英租界においてはその発展と繁栄がある程度に達したことによって、憩いの場である公園や、ゴードン・ホールのように公共施設の建設を建設した。しかし、原英租界の範囲は限られており、公共空間の建設を行うには不十分であった。拡充界の開発はまさに公共空間や施設の立地に十分なスペースを与えることとなった。本章では拡充界の道路・街区の形成を把握し、そこに立地した公共施設はどのようにつくられたのかを解明する。

第1節 拡充界の立地と開設

第2章で論じたように拡張される以前の1888年には、拡充界に当たる場所は墓地と湿地帯が広がっており、その間を昔からの小道が通っていた。外国人たちは既にその区域に進出していくつかの施設をつくり、現地住民の家屋と混在して雑居地を形成していた。ラスムセンの著書によれば、Detringが英国工部局を代表し、1892年にTaku RoadからWei Tzu Creek（後の第1次拡張区域である拡充界に当たる区域）までの区域の土地を既にも買収した。当時は人々に「follies」として嘲笑された。し

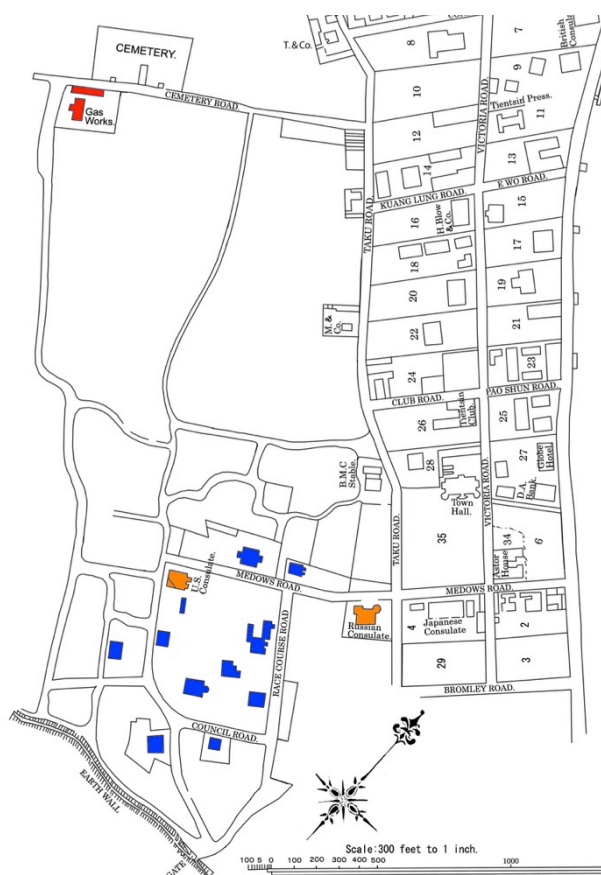


図3-1 1890年～1900年の英租界
（イギリス公文書所蔵の地図を基に作成）

かし、1893 年と 1894 年になると、イギリスの商人たちはこの拡張の「wisdom」(賢明さ)を理解し、一部の人たちは実際の必要のために、もう一部の人たちは投機のため、各自の利益を求めて土地の購入を始めたとされる¹⁾。1890 年～1900 年頃の地図(図 3-1)²⁾を見ると、拡充界として拡張される以前にも関わらず、ある程度の道路が既につくられていた。青色で示したように、拡充界の南部にはいくつかの建物が建てられていた。また、オレンジ色で示したようにロシア領事館とアメリカ領事館も立地し、さらに、赤色で Gas works と示したように、ガス会社もこの区域に立地したことが分かる。

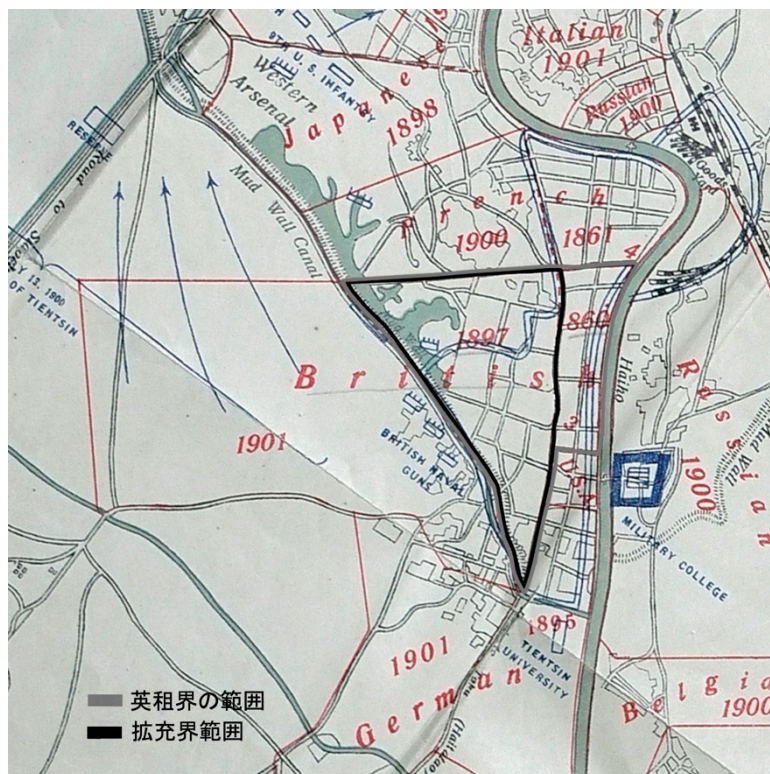


図 3-2 1900 年天津地図
(The Growth of Tientsin 中に所収)

1897 年 2 月 29 日、英国は英租界を Taku Road (海大道、現大沽路) から西に、Wei Tzu Creek (牆子河、現南京路) まで拡張した。これは英租界の第一次拡張であり、拡充界(British Municipal Extension)と呼ばれ、面積は 1,630 畝(約 108.7ha)であった。さらに、1902 年、英、米両国は英租界の南、海河沿い右岸の Kailian Lane (開灤胡同、現開封道) より北の米国租界 131 畝(約 8.7ha)を英租界に合併した。これは英租界の第二次拡張で、南拡充界(Southern Extension)と呼ばれた³⁾。拡張された区域は図 3-2⁴⁾に示すように、フランス租界との境界及び Wei Tzu Creek によって制限され、三角形の区域となった。

第 2 節 拡充界の管理体制

第 1 章では原英租界の管理体制について述べたが、拡充界においても同様な仕組みがあった。1899 年には拡充界でも董事会が組織された。原英租界の住民の中には拡充界で土地を所有していたものも多くいたため、拡充界の董事会には原英租界の

董事を参加させなければならなかった。他にさらに 4 名の董事を選び、董事長は原

原英租界董事会人員

1898	{ W. W. Dickinson... J. M. Dickinson... E. Cousins	W. C. C. Anderson ... E. B. Lees W. W. Dickinson	W. Fisher, E. Heyl, C. H. Ross, J. Stewart. W. C. C. Anderson, E. Cousins, J. Stewart, Ross Thomson. W. C. C. Anderson, E. Heyl, J. Stewart.
1899	{ J. M. Dickinson... E. Cousins	W. C. C. Anderson ... E. B. Lees W. W. Dickinson	W. Fisher, E. Heyl, C. H. Ross, J. Stewart. W. C. C. Anderson, E. Cousins, J. Stewart, Ross Thomson. W. C. C. Anderson, E. Heyl, J. Stewart.
1900	{ J. M. Dickinson... E. Cousins	W. C. C. Anderson ... E. B. Lees W. W. Dickinson	W. Fisher, E. Heyl, C. H. Ross, J. Stewart. W. C. C. Anderson, E. Cousins, J. Stewart, Ross Thomson. W. C. C. Anderson, E. Heyl, J. Stewart.
1901	{ E. Cousins W. Fisher	{ E. Heyl W. E. Southcott	W. W. Dickinson, W. Fisher, J. Stewart. W. W. Dickinson, E. Heyl, D. H. Mackintosh, W. E. Southcott.
1902	{ W. Fisher J. M. Dickinson...	{ E. F. Mackay W. A. Morling	W. W. Dickinson, E. Heyl, D. H. Mackintosh, W. E. Southcott. A. Cumming, E. Heyl, W. E. Southcott.
1903	{ J. M. Dickinson... J. M. Dickinson...	{ W. A. Morling W. A. Morling	J. Boyce-Kup, G. T. Edkins, E. Heyl, W. E. Southcott. J. Boyce-Kup, G. T. Edkins, W. E. Southcott.
1904	{ J. M. Dickinson... J. M. Dickinson...	{ G. T. Edkins W. M. Howell	J. Boyce-Kup, E. Heyl, C. R. Morling. J. Boyce-Kup, G. T. Edkins, C. R. Morling, W. E. Southcott, W. A. Morling.
1905	{ J. M. Dickinson... W. E. Southcott ...	{ W. M. Howell W. E. Southcott	J. Boyce-Kup, G. T. Edkins, C. R. Morling, W. E. Southcott, W. A. Morling. G. T. Edkins, C. R. Morling, G. W. Sheppard, Ross Thomson.
1906	{ W. A. Morling ... W. A. Morling ...	{ W. E. Southcott W. E. Southcott	G. T. Edkins, C. R. Morling, G. W. Sheppard, Ross Thomson. C. R. Morling, G. W. Sheppard, Ross Thomson.
1907	{ W. A. Morling ... W. A. Morling ...	{ W. E. Southcott W. E. Southcott	D. MacHaffie, C. R. Morling, G. W. Sheppard, and Ross Thomson. E. W. Carter, G. W. Sheppard, C. L. Maxwell, and Ross Thomson.
1908	{ W. A. Morling ... C. R. Morling ...	{ W. E. Southcott W. E. Southcott	E. W. Carter, C. C. F. Cunningham, Ross Thomson and C. L. Maxwell. E. W. Carter, C. C. F. Cunningham, T. H. R. Shaw, and for a portion of the year, F. A. Kennedy.
1909	{ C. R. Morling ... C. R. Morling ...	{ W. E. Southcott W. E. Southcott	E. W. Carter, R. Ross Thomson, G. W. Sheppard and for a portion of the year, C. C. F. Cunningham, and T. H. R. Shaw.
1910	{ G. W. Sheppard.. C. R. Morling ...	{ W. E. Southcott W. E. Southcott	R. K. Douglas, R. Ross Thomson, and for a portion of the year, E. W. Carter. R. K. Douglas, C. R. Morling, R. Ross Thomson, and for a portion of the year, R. G. Buchan.
1911	{ G. W. Sheppard.. E. W. Carter	{ E. W. Carter R. G. Buchan	R. K. Douglas, C. R. Morling, R. Ross Thomson, and for a portion of the year, R. G. Buchan, G. S. Knowles, W. W. G. Ross.
1912	{ E. W. Carter E. W. Carter	{ R. G. Buchan R. G. Buchan	C. R. Morling, W. W. G. Ross, and for a portion of the year, G. S. Knowles and F. W. Maze.

— : 中国人

扩充界董事会人員

Year	Chairman	Hon. Treasurer	Councillors
1899	J. M. Dickinson...	E. B. Lees	W. C. C. Anderson, E. Cousins, H. Schroeter, W. McLeish, J. Stewart, C. D. Tenney, Ross Thomson, <u>Tsai Shou Chi</u> .
1900	{ J. M. Dickinson... E. Cousins	{ E. B. Lees W. W. Dickinson	W. C. C. Anderson, J. Droste, E. Heyl, W. McLeish, J. Stewart, C. D. Tenney, <u>Tsai Shou Chi</u> .
1901	{ E. Cousins W. Fisher	{ E. Heyl W. E. Southcott	C. Denby, W. W. Dickinson, J. Droste, W. Fisher, W. McLeish, C. Poulsen, J. Stewart, C. D. Tenney.
1902	{ W. Fisher J. M. Dickinson...	{ E. F. Mackay W. A. Morling	W. W. Dickinson, J. Droste, E. Heyl, D. H. Mackintosh, W. McLeish, C. Poulsen, W. E. Southcott, C. D. Tenney.
1903	{ J. M. Dickinson... J. M. Dickinson...	{ W. A. Morling W. A. Morling	G. Baur, A. Cumming, C. Denby, E. Heyl, A. Hide, W. A. Morling, J. H. Osborne, W. E. Southcott, C. D. Tenney.
1904	{ J. M. Dickinson... J. M. Dickinson...	{ W. A. Morling W. A. Morling	J. Boyce-Kup, C. Denby, G. T. Edkins, E. Heyl, J. H. Osborne, F. Sommer, W. E. Southcott, C. D. Tenney.
1905	{ J. M. Dickinson... J. M. Dickinson...	{ W. A. Morling W. A. Morling	J. Boyce-Kup, C. Denby, G. T. Edkins, A. Hide, W. M. Howell, F. Sommer, W. E. Southcott, C. D. Tenney.
1906	{ J. M. Dickinson... W. E. Southcott ...	{ G. T. Edkins W. M. Howell	E. G. Adams, J. Boyce-Kup, E. Heyl, W. M. Howell, C. R. Morling, F. Sommer, H. D. Summers.
1907	{ J. M. Dickinson... W. A. Morling ...	{ W. M. Howell W. E. Southcott	E. G. Adams, J. Boyce-Kup, G. T. Edkins, C. R. Morling, W. E. Southcott, F. Sommer, H. D. Summers, J. Stewart.
1908	{ W. A. Morling ... W. A. Morling ...	{ W. E. Southcott W. E. Southcott	E. G. Adams, G. T. Edkins, C. R. Morling, G. W. Sheppard, F. Sommer, H. D. Summers, James Stewart, Ross Thomson.
1909	{ W. A. Morling ... W. A. Morling ...	{ W. E. Southcott W. E. Southcott	E. G. Adams, J. R. Brazier, W. M. Howell, C. R. Morling, G. W. Sheppard, F. Sommer, Ross Thomson.
1910	{ W. A. Morling ... W. A. Morling ...	{ W. E. Southcott W. E. Southcott	A. S. Annand, W. A. Argent, Dr. R. Coltman, W. M. Howell, K. F. Melchers, Major Nathan, R.E., J. Travers Smith, P. S. Thornton, Jas. Watts, C. M. G.
1911	{ W. A. Morling ... W. A. Morling ...	{ W. E. Southcott W. E. Southcott	A. S. Annand, W. A. Argent, R. H. Chandless, W. M. Howell, K. F. Melchers, Major Nathan, R.E., J. Travers Smith.
1912	{ C. R. Morling ... C. R. Morling ...	{ P. S. Thornton P. S. Thornton	A. S. Annand, W. A. Argent, R. H. Chandless, <u>K. H. Chun</u> , W. M. Howell, K. F. Melchers, and W. I. Pottinger.
1913	{ C. R. Morling ... C. R. Morling ...	{ P. S. Thornton P. S. Thornton	A. S. Annand, W. A. Argent, R. H. Chandless, <u>K. H. Chun</u> , W. M. Howell, K. F. Melchers, and W. I. Pottinger.
1914	{ C. R. Morling ... C. R. Morling ...	{ P. S. Thornton P. S. Thornton	A. S. Annand, W. A. Argent, R. H. Chandless, <u>K. H. Chun</u> , W. M. Howell, K. F. Melchers, and W. I. Pottinger.
1915	{ G. W. Sheppard.. C. R. Morling ...	{ P. S. Thornton P. S. Thornton	W. A. Argent, <u>K. H. Chun</u> , I. F. Drysdale, R. M. Gatlif, W. M. Howell, D. B. Nye, and W. I. Pottinger.
1916	{ G. W. Sheppard.. G. W. Sheppard..	{ P. S. Thornton P. S. Thornton	W. A. Argent, <u>K. H. Chun</u> , I. F. Drysdale, R. M. Gatlif, W. M. Howell, G. S. Knowles, D. B. Nye, and F. R. Scott.
1917	{ G. W. Sheppard.. E. W. Carter	{ P. S. Thornton W. M. Howell	<u>K. H. Chun</u> , Rev. I. F. Drysdale, R. M. Gatlif, W. M. Howell, G. S. Knowles, D. B. Nye, F. R. Scott, and for a portion of the year, R. W. Hamlet, D. P. Ricketts, and A. H. Watts.
1918	{ E. W. Carter E. W. Carter	{ W. M. Howell F. R. Scott	<u>K. H. Chun</u> , R. M. Gatlif, R. W. Hamlet, G. S. Knowles and D. P. Ricketts, and for a portion of the year, N. Leslie and Major W. S. Nathan, C.M.G., R.E.

— : 中国人

図 3-3 上 : 原英租界の 1898 年~1918 年、下 : 扩充界の 1899 年~1918 年の董事会の人員 (1938 年年度報告をもとに作成)

英租界の董事長が兼任し、その下に単独の執行機構である工部局を設置した⁵⁾。図 3-3⁶⁾に示すように、1898 年から 1918 年までの原英租界の董事は全てが外国人であったことに対し、1899 年から 1918 年までの拡充界では中国人、或は中国系の人が董事を担当するケースが増えていたことがわかった。

第 3 節 拡充界の道路・街区計画

前述のように、拡充界の拡張が決定する以前からこの区域へのスプロールが始まっていたために、開発計画を行う特定のデザイナーはいなかったと考えられる。初期の道路計画は既存の道路の影響を受けて計画された。図 3-4 の右に示す 1900 年頃の地図⁷⁾と、左側の 1888 年の地図と比較すると、1888 年には湿地と墓地が広がっていた区域に、1900 年頃には墓地と湿地が埋め立てられていたことがわかる。黒く塗りつぶした部分には道路と街区が造られ、破線で示されている部分は未完成であるが、開発の予定が行われたことが分かる。また、黒く塗りつぶした部分の道路は 1888 年に既存していた小道に従って計画されたことが分かる。そのため、原英租界の東西向きの道路と接続しない道路が造られ、T 字路がいくつか形成された。拡充界の西側にはまだ湿地が広がっており、埋め立てが行われていなかった。

拡充界の道路・街区の全体が具体的に完成した時期は不明であるが、1913 年の地図では完成されていた。また、1925 年の地図では 1902 年に拡張された南拡充界及び推广界の道路・街区を含めた英租界全体の完成形が示された。道路の幅員について



図 3-4 拡充界の道路形成（左：1888 年地図、天津城市歴史地図選編中に所収の地図、右：1900 年の租界地図、イギリス公文書所蔵の地図を基に作成）

は、この1925年の地図を基に分析可能である。

図3-5に示すように、拡充界は東西方向と南北方向の道路が直交するように形成された。道路の幅員は14m未満から約20mまでとなっており、全体的にばらつきが大きい。東側の原英租界に近い区域はやや幅の狭い道路が存在していることが分かる。これに対し、図3-5に示したように、遅くに埋め立てられた中央から西側にかけての区域では、比較的幅の広い道路が計画された。拡充界では正式に拡張される以前から、既存の道路を利用していた時から開発が行われたため、これらの区域では拡張後に幅の広い道路を計画することが困難であったと推測できる。また、街区の規模も既存の道路に影響されながら形成され、さらに、拡充界の全体の範囲は英租界の境界とWei Tzu Creekによって制限され、三角形をなしていたため、街区の大きさは不均一なものとなった。街区の平均面積は約25,650m²で、最も大きな街区は拡充界中央のRecreation Groundであり、約53,200m²、逆にWei Tzu Creekに接している区域は三角形の比較的小さな街区がいくつか形成された。

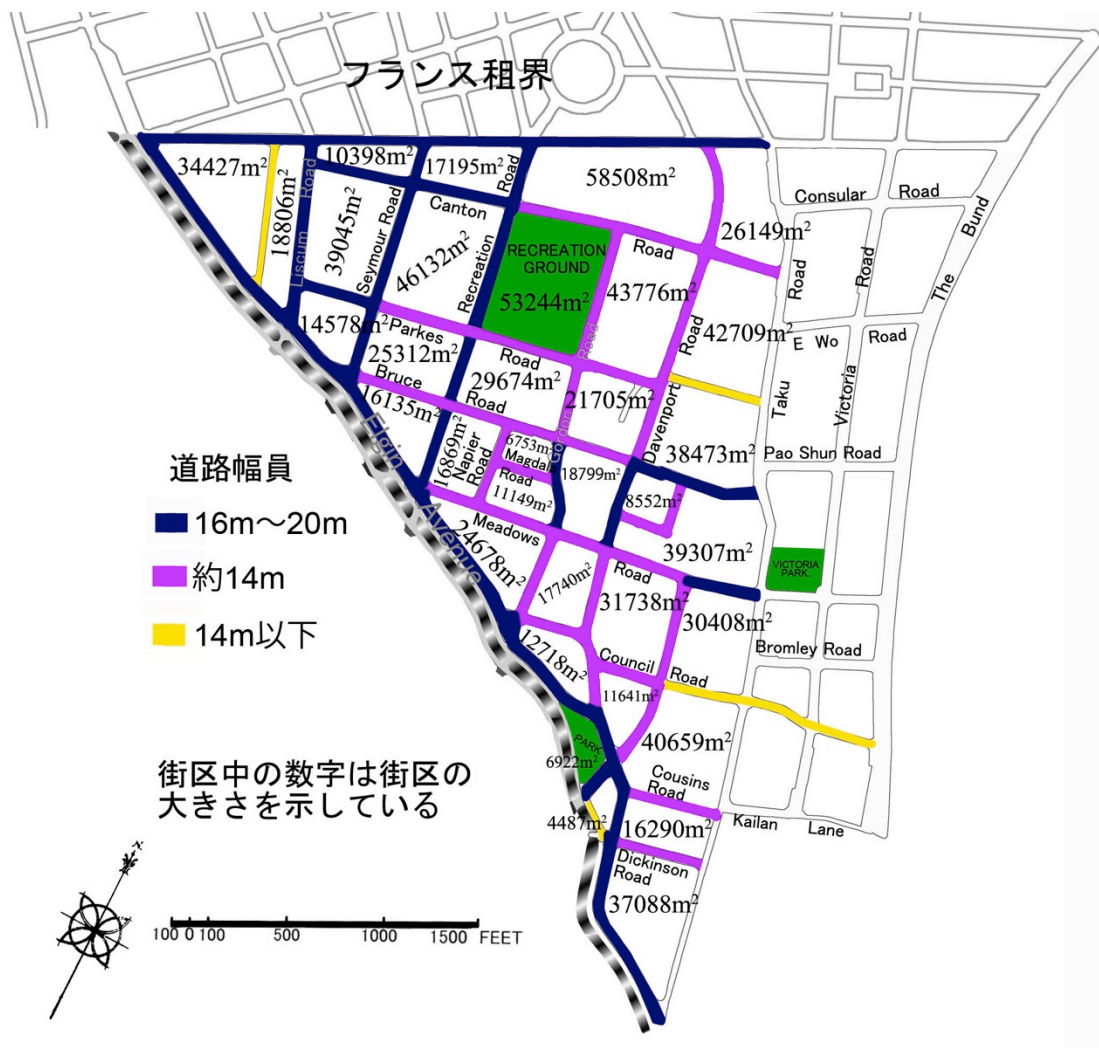


図3-5 拡充界の道路幅員と街区規模（Tientsin: An Illustrated Outline History 所収の1925年天津地図を基に作成）

第4節 拡充界における施設建設

第1項 拡充界における公共施設の開発

第1節で述べたように、Detring の意見により、拡充界の大部分の土地を工部局は事前に購入していた。このことが拡充界において公共空間の造成をより円滑に進めることができた一因であったと考えられる。また、図 3-6⁸⁾に示すように、オレンジ色の区域は土地の借用者の寄付によって確保された公共目的の道路と土地であった。このことから工部局は公共用地を確保できたていたことがわかる。当該図には年代

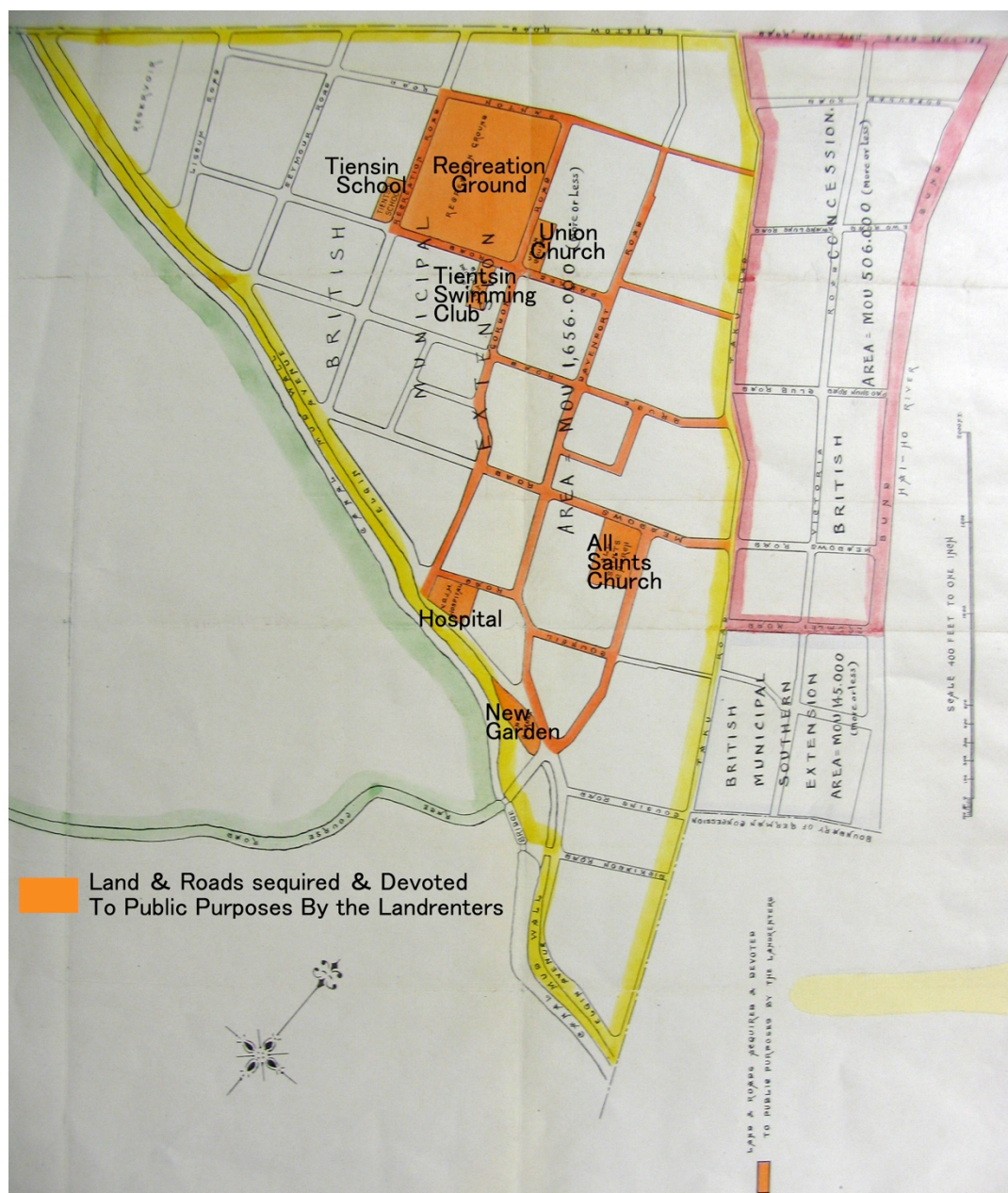


図 3-6 拡充界の公共用地

(Map of the British Concession in Tientsin, 英国国立公文書館に所蔵)

が記されておらず、英租界の各区域を明記した上、拡充界におけるいくつかの公共施設など、重要な施設が示されていた。拡充界にはまだ道路が示されていないことから 1920 年以前に作成された計画図であると判断できる。この時点において、工部局は拡充界の公共性の確保を重視していたことがわかる。

1. 公共公益設備会社

(1)天然ガスと電力

図 3-7 の①に示すように、1913 年の拡充界には Tientsin Gas and Electric Light Company というガス・電力会社が立地していたことが確認できる。天津では oil-gas (天然ガス) を使った照明と電力は 1880 年代に出現したとされる⁹⁾。1885 年 4 月、イギリス人の商人である Poulsen や A. de Linde 等の人達と工部局が共同で The

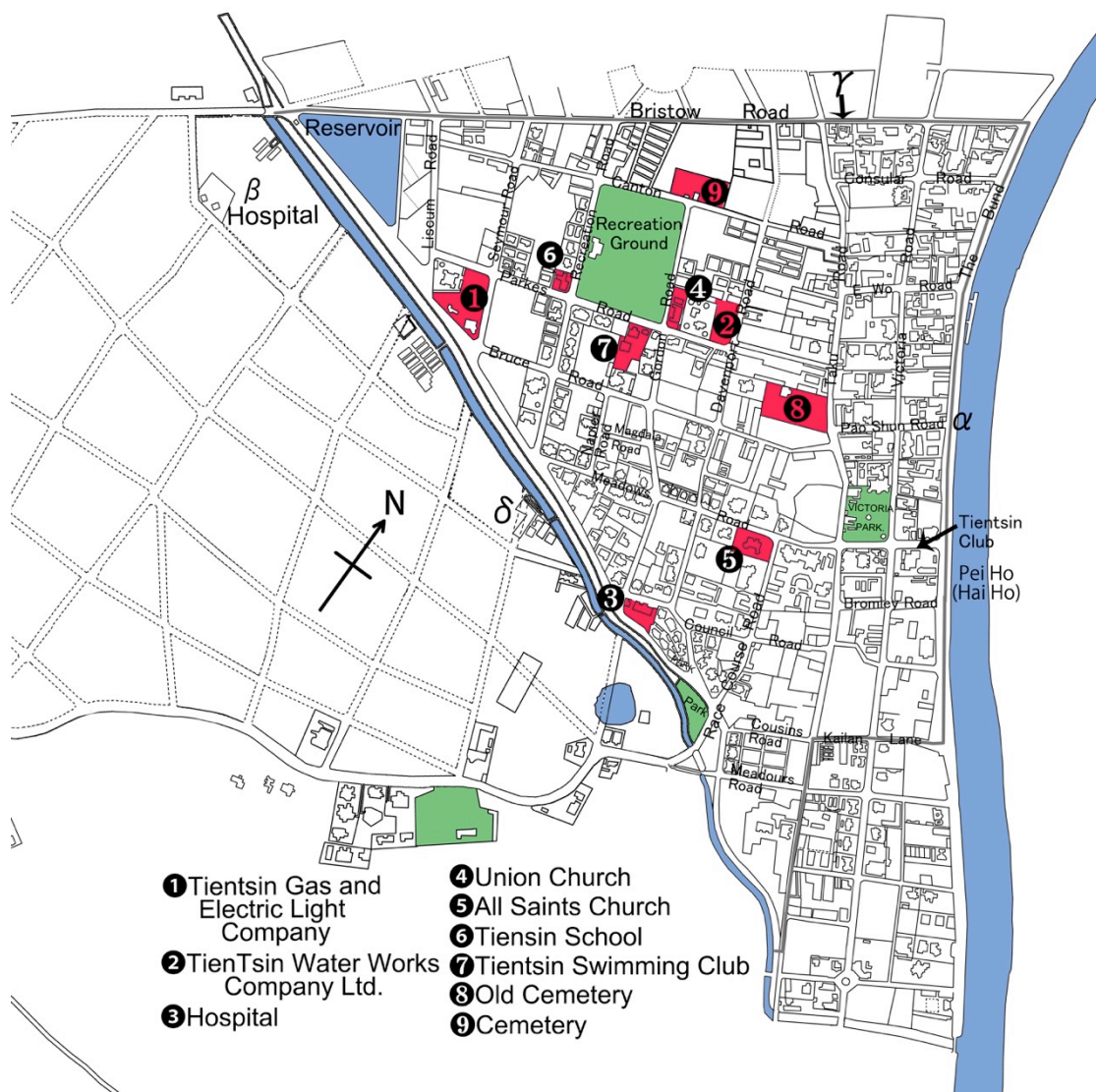


図 3-7 拡充界の公共施設 (天津城市歴史地図選編中に所収の 1913 年天津地図を基に作成、①～⑨の施設はもとの図に示されており、α～δの場所は筆者)

Tientsin Oil-gas Company（図 3-7 の①の場所）の設立計画を始め、1888 年には開業を宣言し、同じ場所にガスを作り出す工場を建設した¹⁰⁾。1888 年 5 月、工部局は Poulsen と A. de Linde が代表する The Tientsin Oil-gas Company と契約を結び、1000 立方フィート 10 元以下の価格で消費者にガスを提供し、租界の道路上の街路灯は 10 燭のものは毎月 1.5 元、7.5 燭のものは 1.12 元徴収するものとした¹¹⁾。最初は英国領事館内に試験的な照明¹²⁾をいくつか設置し、中秋節にライトアップした¹³⁾。1890 年にはガスを作り出す工場が完成し、The Tientsin Oil-gas Company は正式に開業した。当該会社の主任技術者は Hoffman であり、資本は 4.3 万元で、毎年 226 面立方フィートのガスを生産することができ、埋設したガス管の長さは 7950 ヤードに達した。主に英租界内の 96 ヶ所、フランス租界 81 ヶ所の公共用ガス灯、さらに中国鐵路公司（鉄道会社）と開平礦務局にガスを供給した¹⁴⁾。1890 年、工部局の董事長によると、ガスランプによる照明の値段はキャンドルランプによる照明の 2 倍であった¹⁵⁾。1903 年頃、天津使館界発電所が発電を開始し、The Tientsin Oil-gas Company は家庭用ガスの提供のみ行うこととなると共に、また、図 3-7 の①に示す Tientsin Gas and Electric Light Company に名前を変更した¹⁶⁾。

電力については 1888 年の夏、世昌洋行（Eduard Meyer and Co.）が羊毛圧縮機に発電機を装着し、またオランダ領事館内に 1000 燭の電灯を付けた。これはまだ十分な照明設備ではなかったが、将来には改良され一般に使用されるようになると予想された¹⁷⁾。1906 年に仁記洋行は工部局の委託を受け、天津使館界発電所を建設し、その後工部局に接続された。元の建設場所は不明であるが、後に図 3-7 の①の場所の付近に移設されたことが分かった¹⁸⁾。

(2)水道

図 3-7 の②に示すように TienTsin Water Works Company Ltd.という水道会社を確認できる。ラスムセンの著書によれば、天津の開港以来、人々は飲用水の濾過方法を試してきた¹⁹⁾。主な方法としては河の水を高さ 2~3 フィートのカメに入れ、溶解した明礬（ミョウバン）を表面に散布して、泥と砂を沈殿させた。それを竹でつくった長さ 4 フィートのストローで吸い出した後、水を沸騰、或は濾過して飲用したという。この方法は理論的には安全で有用な方法であるが、使用人はしばしば水を沸騰させることを怠ったため、子供等の健康を脅かす危険があったとされた²⁰⁾。『天津通志』によれば、その後、租界の開発と繁栄に従い、人口が増加し、生活、生産や消防のための用水問題を解決することは急務となった。1897 年 3 月 30 日に、仁記洋行が表に立って、隆茂、泰和、利泰興等の洋行を取りまとめ、集中的に都市に水道供給を行う施設を計画した。施設の場所は英租界のバンドであり、その後英租界工部局に浄水場を建設する申請を行った。建設を計画した経営者達は工部局から 1897

年4月2日から25年間の税金を免除する権利と、さらには専利経営²¹⁾を行う権利を獲得した。初めに、経営者達は資本金として65,000両の白銀を集め、その後198,000両(187,000両とも言われている)に増資した。建設過程においては、技術面はすべて工部局が担当した。1898年10月には水道管の埋設工事が完成し、12月から給水が始まった。工部局はTienTsin Water Works Company Ltd.を社名として正式に認可した。開業した当初には海河(pei Ho)を水源とし、図3-7のαに示す場所から取水した。浄水場は図3-7の②に示す場所に設置した。浄水場内には鉄鋼製の沈殿用罐が3つ設けられ、容量は36万ガロン(1,636m³)であった。緩速濾過池が5つ、容量は4,500 m³であった。また、3台のポンプと4台のボイラーをもっていた。初期には蒸気を動力としていたが、後に電気ポンプに変えた。開業初期には、毎日30万ガロン(1,363トン)の水を生産でき、英租界の洋行と住民が集中していた区域及びフランス租界のバンド沿いの区域に水を供給できた。その後、英租界の拡張に従い、水の生産能力が追いつかなくなった。1932年1月、英租界工部局は当該会社を買収し、名称を英工部局水道処に改め、公的事業として経営し、水の生産場を増やす計画を始めた。技術者達はいくつかの計画案を比較した結果、井戸水を水源とする決定をした。1925年から工部局は図3-7の②の浄水場内で最初の井戸を掘り、その後11ヶ所の井戸を掘った。1938年には井戸水は基本的には再び河水にとって変わった。また1929年から工部局は設備の更新を行うと共に、第三次拡張区域である推广界内にも三カ所の浄水場を造った²²⁾。

これらによって、英租界の住民のライフラインが充実し、生活の質が劇的に向上し、近代的な都市システムが出来上がろうとしていたことがわかる。

2. 病院、宗教、学校等の公共施設

(1)病院

1890~1900年頃、後に英租界で最も著名なVictoria Hospital(図3-7の③)が北京、天津及び付近地区の外国住民の資金を集めて建設された。当該病院ではハイレベルな医者と経験豊富な看護師が治療と看護を担当した。病院は内科と外科に分かれ、X線及び他の電気検査設備を備え持っていた。英租界の住民及び英租界工部局に納税する患者の医療費はやや低く、他の外来の患者はやや高かったとされている²³⁾。また図3-7のβに示すVictoria Hospitalの附属病院の隔離病院も確認できる。

(2)教会、学校

図3-7の④と⑤に示すようにUnion ChurchとAll Saints Churchという教会が確認できる。英租界のキリスト教関係の組織は学校の設立にも熱心であった。第1章でも述べたJohn Innocentという英国聖道堂(English Methodists, or “New Connexion” mission)の宣教師は開港した初期から天津に来ていた。彼は1860-61年頃に学校を

建設し、10～12 人の中国人の男子学生を招集し、彼の妻も 1862 年に中国女子学校を開設し、当時は 2 人の学生がいたという。この教会は 1866 年には天津で 4 カ所の礼拝堂、2 つの day school、男女各一校の寄宿学校と盲学校を開設していた。1871 年には教師と布教の仕事に従事する中国人のための Institute（育成学校）



写真 3-1 1900 年の新 Union Church (Tientsin: An Illustrated Outline History に所収)

を設立した。初年度のクラスは Taku Road にあった Old Union Church の地下室で授業をしていたが、1878 年には図 3-7 の γ に示すように Taku Road と Bristow Road の交わる角地²⁴⁾にもう一つ建物を建て、そこを授業に使った。この建物は 18 年もの間使われ、1896 年には Collins & Co.に売却された。Collins & Co.はその建物を改装してオフィスとして使用した。租界の外国人は図 3-7 の④の場所に写真 3-1 に示す新しい Union Church を建設したので、Institute は同じ年に Old Union Church に移った。さらに新しい Union Church の付近には教職員や学生のための宿舎を建設したという²⁵⁾。

All Saints Church についても同様であった。英租界が開設された後、聖公会（イングランド国教会の中国華北教区²⁶⁾）は天津で英国国外説教会と聖公会華北教区主教（英国人）に直属する英国国教会を設立した。これは中国国内における純粋な英国国教会であった。1893 年、英国国教会は工部局の支持を受け、図 3-7 の⑤の場所の空き地を借り、英租界内における土地を確保した。1900 年に教会の建設を始め、1903 年に All Saints Church を完成させた²⁷⁾。1890 年代まで続いた不満、すなわち英租界の住民の子供達が良好な教育を受けられないことに対する不満を解消する為に、Race Course Road にあった教会の建物で All Saint's School²⁸⁾を開校させた。このため 1900 年になると建物は生徒の数に対して狭くなり、さらに生徒の保護者達による無宗教の教育

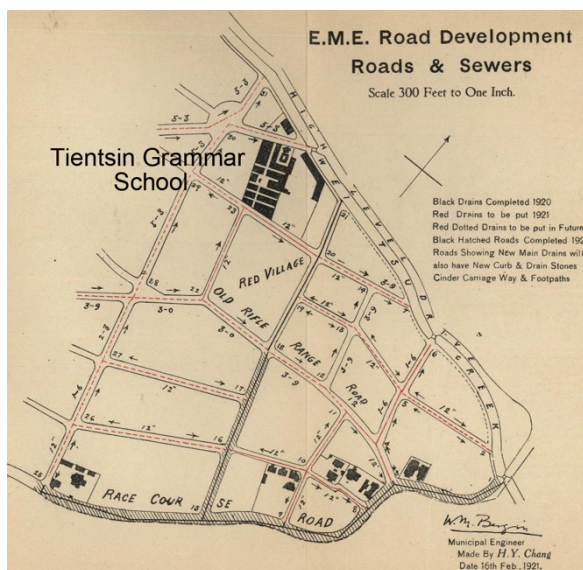


図 3-8 Tientsin Grammar School の場所 (1920 年年度報告による)

への要望も次第に強くなった。
1900年の義和団事件後しばらくすると、All Saint's Schoolは閉校となった²⁹⁾。1905年に天津学校会(Tientsin School Association)³⁰⁾の決定によりAll Saint's Schoolの基礎の上で無宗教のTientsin Grammar Schoolが創設された。当初は英国租界学校委員会によって管理され、教員4名と生徒約40人であった。1918年春には工部局に同校の管轄が移った。管理が工部局に移って

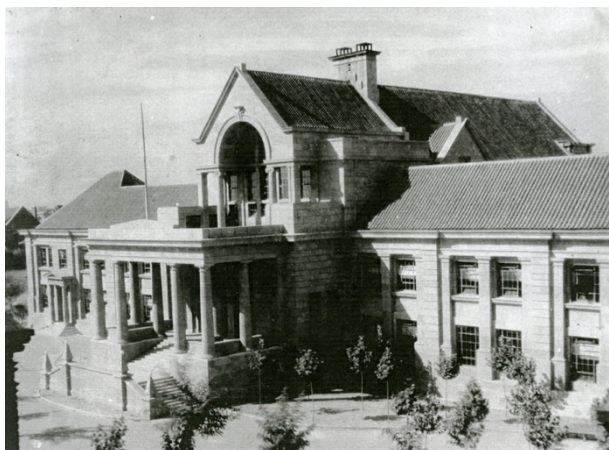


写真 3-2 Tientsin Grammar School の建物
(<http://us.midnightinpeking.com/downloads/tientsin/>による、年代不詳)

から、図 3-7 の δ 及び図 3-8 に示すように推广界でより大きな、現代的な校舎を建てる計画が立てられた³¹⁾。計画では 10 万元をかけ、400~500 人の生徒を収容できるようにした。図 3-8 に示すように 1921 年の地図には新校舎(写真 3-2)ができていた。当該校は設備等が不十分な時は両親が英国籍の子供を優先して入校させたが、基本的にはすべての住民に対し開放されたが、中国国籍の納税者は入校できなかった³²⁾。1924 年の報告では生徒数は 226 人、男子生徒 110 名、女子生徒 116 名、109 名は上級生で、117 名は下級生か予備生であった。また、130 名は英国人で、96 名は他の国の国籍であった。当該校は 6 歳~16 歳までの児童の為のもので、幼稚園から始まり、そして 2 年間の過度的な年級(Transition classes)で、その後さらに 5 年間の年級であった。高学年では Cambridge University Local Examination をパスするために準備を行った。教師は英国工部局が英国から最も経験と資格を持つ者を選んだという³³⁾。

以上から英租界の初期の学校のいくつかは教会によって創設され、また教会の建物を使って授業を行ったことがわかった。

3. オープンスペース、娯楽・社交施設

図 3-7 に示すように、1913 年の地図では拡充界に 2 カ所のオープンスペースが確認できる。拡充界のほぼ中央に位置し、第 2 節でも論じたように面積が約 53,200m²と拡充界の中で最も大きな街区が一つの Recreation Ground となっていた。1895 年 1 月に租界内で土地をクラウンリースしていた住民によって行われた公共集会で、一人の人物が公共運動場を建設すべきという要求をした。クラウンリースの住民達はその要求を受け入れ、工部局に建設を委託することにした。工部局は運動場を建設・維持する計画を立てた。1895 年 10 月 1 日、借地の住民達は拡張区域(拡充界)の西部の 72 畝(約 48,000 m²)の土地を寄付し、何人かの代理管理人に天津の全て

の外国人が利用できる運動場として、永久の管理を委託した。運動場の維持と更なる改善の為の資金を確保するため、工部局は拡充界の Feus（地税）を担保として、1万両の「C」公債³⁴⁾を集めた。さらに、管理の委託規定には「如何なる国も他国のクラブを排斥してはならず、また、全ての外国人がクラブの一員になることを許可しなければならない」と定められた。運動場の維持費は毎年工部局からの少ない支出金といくつかのクラブからの賃料でまかなわれたとされる³⁵⁾。

図 3-7 に示す拡充界の南端にも公園が一つ造られていたことが分かる。この公園は Elgin Garden と呼ばれた。この他にも Victoria Hospital Garden と Isolation Hospital Garden も 1927 年までには造られていた³⁶⁾。

以上のように、拡充界には少なからぬオープンスペースが確保されていた。また、図 3-7 の⑦のように Recreation Ground の近くには Swimming Club が造られていたことが分かる。Swimming Club の建物は 1900 年 1 月に完成していたが、義和団の乱により、使用可能になったのは 1902 年 8 月になるまで使用できなかった。その後は、プールには濾過した清潔な水道水が使われ、男女に対し平等に開放され、早朝と夕方は児童にのみ開放された³⁷⁾。この他にも多くのクラブが拡充界で活動していた。1905 年には、図 3-7 の Reservoir の場所は池であったが、Tientsin Ice Hockey Club は凍った池の上で試合を行ったという³⁸⁾。また、Tientsin polo Club は 1918 年に Race Course に移るまでは Recreation Ground を利用して試合を行ったとされ、Tientsin Cricket Club は 1890 年代に Recreation Ground が開放されてから、1922 年にクラブが解散するまではよくそこで試合を行ったとされる³⁹⁾。このように、多くのクラブが活動を行い、英租界の住民の社交の場も充実したと考えられる。

第 2 項 拡充界における企業・個人による開発

公共公益施設の充実により、拡充界での企業・個人の開発もより盛んになった。図 3-9 に示すように、工部局の年度報告により、1906 年から 1915 年の間⁴⁰⁾、いくつかの年に実施された建設事業を確認できる。表 3-1 に示すように、拡充界においてもオフィス、商店、倉庫等が建設され、特に中国人オーナーによる House（戸建住宅）が多く建設されたことが確認できる。さらに、Chinese House（中国式の住宅）と示され、英租界内において中国式の住宅が建設されたことがわかる。また Dwelling House（住宅）Tenement House（賃貸集合住宅）、さらに Quarters のような使用人向けの集合住宅も建設された。これらの開発の主体もほとんどが中国人であり、英租界において従業する中国人に住宅を提供していたことがわかる。このような建設活動が英租界内に中国人人口が増加していくことと対応していたと考えられる。その中、オフィスの建設ではすべきが外国人オーナーによって行われたのに対し、

住宅の建設の多くは中国人オーナーによるものであったことがわかった。さらに、全体の開発の主体が中国人であるケースが実に半数以上を占めていた。

1916年及び1917年の年度報告では、建設事業が行われた具体的な場所を確認できた。図3-10-1に示すように、1916年には多くの Dwelling House と Servants Quarters が建設されたことがわかる。原英租界ではいくつかのオフィス、商店が造られていたが、Servants Quarters も建てられていた。これは従業員向けの宿舎であり、洋行等の商業機関で働きながら、その付近の宿舎に居住していた。つまり、従業員等にとってはまだ職住が比較的近い距離にあったと言える。しかし、Dwelling House のような住宅は拡充界の西側にも多く建てられた。このことから、英

租界内の住人は広い敷地を求めて、内陸の方に住宅を建て、職住が徐々に分離し始めていたことがわかる。このことは1917年においても同様な傾向が見られる。商業建築と住宅の建設を抽出し、その分布を図3-10-2に示す。原英租界における商業施

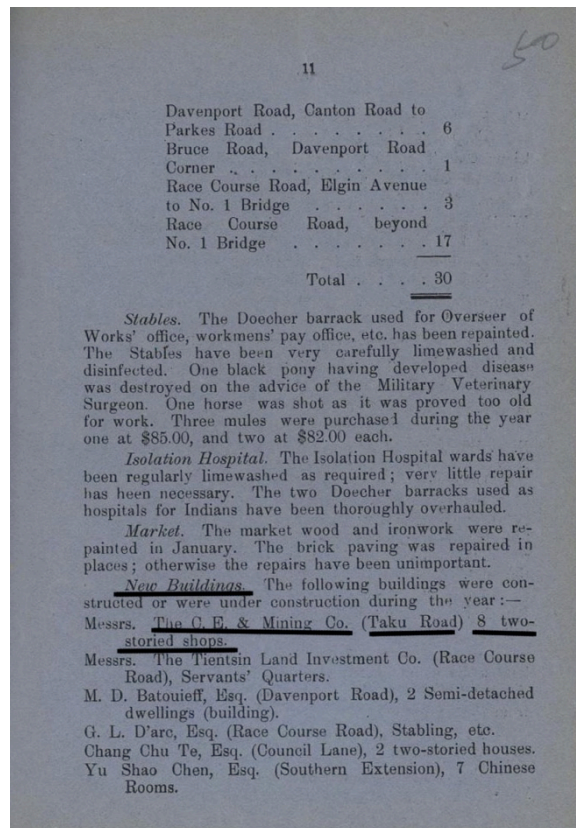


図 3-9 建設状況の史料
(1906 年年度報告の一部)

表 3-1 拡充界の企業・個人の開発

新築	種類	1906		1910		1912		1914		1915		
		外国人	中国人	外国人	中国人	外国人	中国人	外国人	中国人	外国人	中国人	中外合資
商業	Office Building(オフィス)	5		1		1				2		
	Store,Shops(商店)	9			4							
	chinese shops								1			
	Godown(倉庫)			2		3		3	1			
住居	house(住宅)	7	8			11	29	4	9	1	8	
	Dwelling House(戸建住宅)	2				2	3	1	6		3	
	chinese house		7		1			1	1		1	
	Residence (building) (邸宅)					3	1					
	Tenement House(賃貸住宅)			1	2							
	Servant's Quarters(使用人住宅)	2					1		5	2		1
	Coolies' Quarters(労働者宿舎)			1								
	Green (Flower) House(温室)								2			
その他	6	3	4	1	8	4	4	2	4		1	
合計	31	18	9	8	28	38	12	27	10	12	2	

合計 外国人 90 中国人 103

1906年、1910年、1912年、1914年、1915年の年度報告により作成

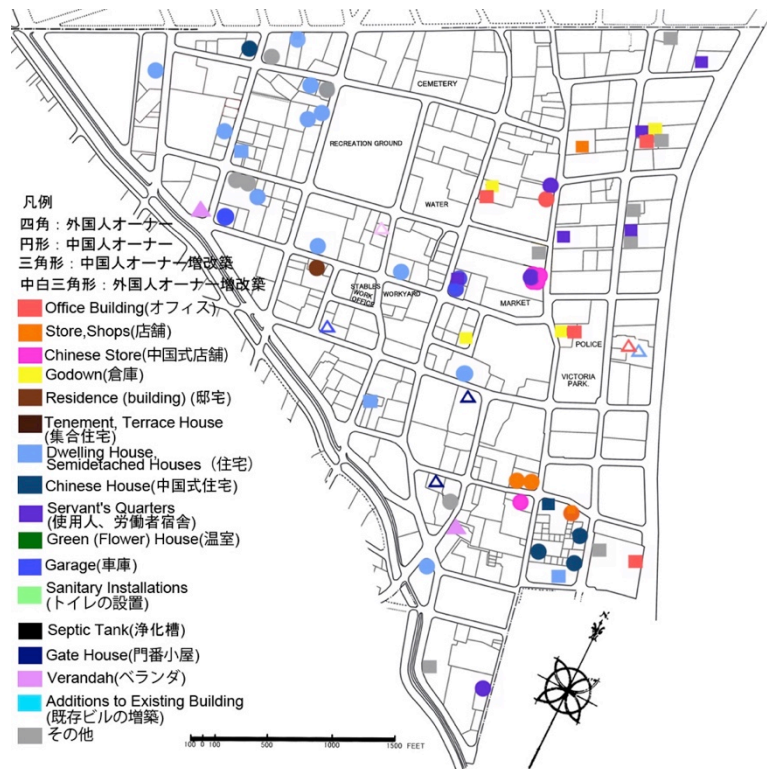


図 3-10-1 1916 年の原英租界と拡充界の新築建設状況
(1916、1917 年年度報告により作成)

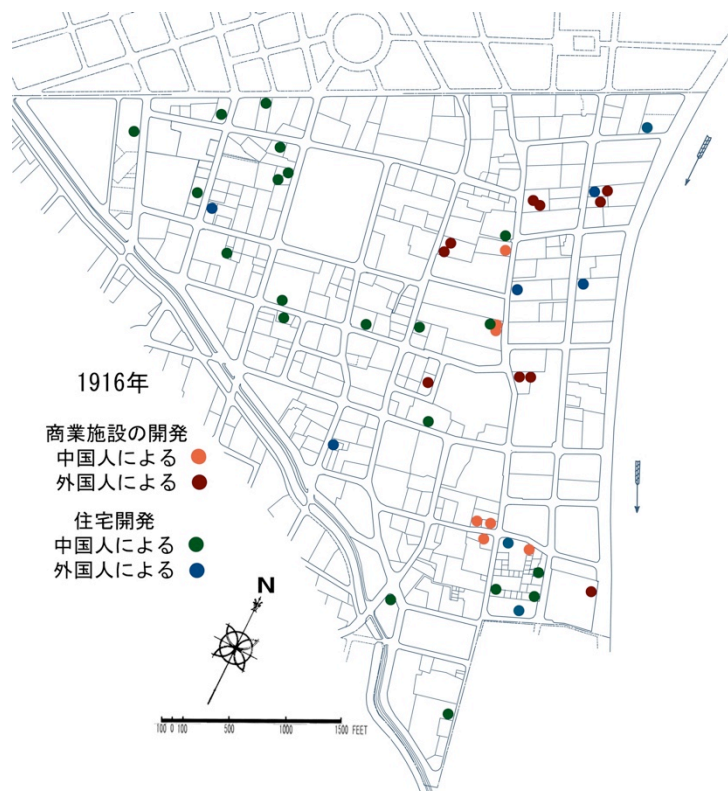


図 3-10-2 1916 年の原英租界と拡充界の新築建設
状況の分布 (1916、1917 年年度報告により作成)

設と住宅の開発は全てが外国人オーナー によるものであった。それに対し、原英

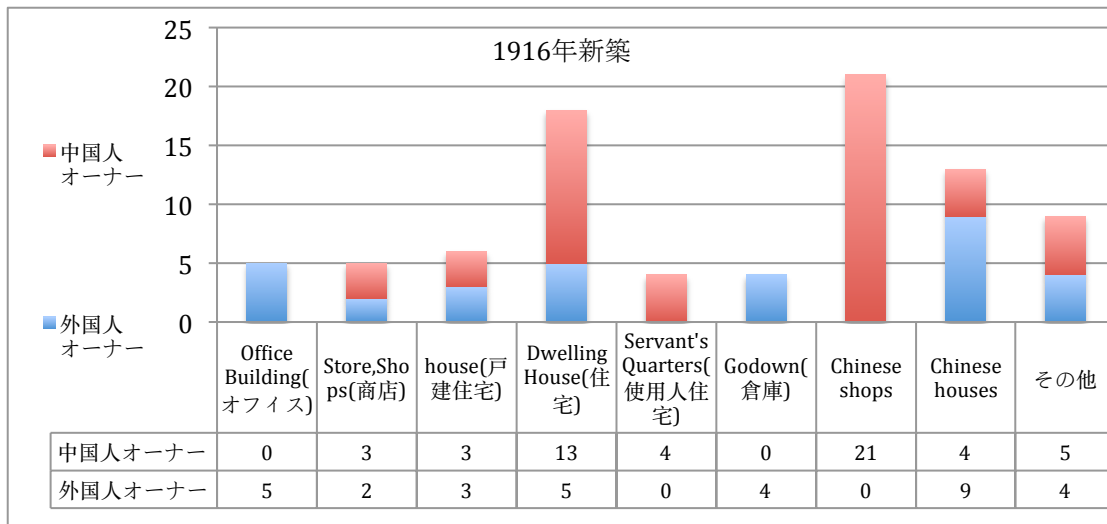


図 3-11 1916 年新築 (1916、1917 年年度報告により作成)

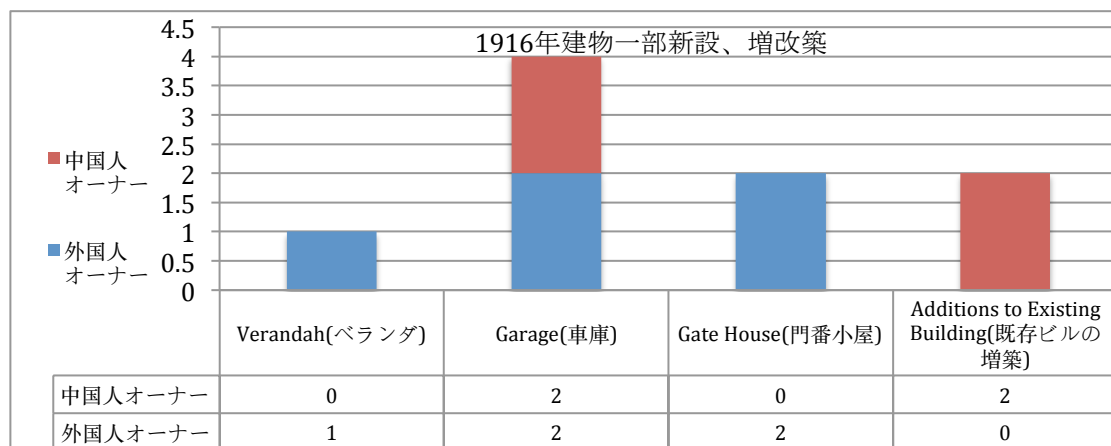


図 3-12 1916 年建物の一部新設、増改築 (1916、1917 年年度報告により作成)

租界に近い拡充界の区域では中国人オーナーによる商業施設の開発もいくつか見られた。また、拡充界では中国人オーナーによる住宅の開発が顕著に見られた。この他、図 3-11 に示すように、Chinese houses の建設は全体で 13 件であったが、開発の主体が中国人であるケースは 4 件であった。つまり、イギリス人等の外国人が中国式の住宅を建設することもあったことがわかる。また、図 3-10-1 に示すように、Chinese houses の建設は南拡充界に集中していたことがわかる。これは、米租界が英租界に合併する以前から、アメリカの消極的な租界経営により、中国人が既にその区域で生活していたことが関係していた⁴¹⁾。また図 3-12 に示すように、建物の一部の新設に関してはガレージの建設が 4 件確認でき、自動車の使用が始まった様子が窺われる。

第 5 節 原英租界の変容

第 1 項 原英租界における建設状況

表 3-2 1906 年～1915 年までの建設事業

	年	Owners.	場所 (Road)	Description, Reinforcement
1	1906	Carlowitz & Co.	Consular Road	New Offices
2	1906	Watson & Co. (屈臣氏大薬房)		Stores, Offices, Flats, &c., extension scale
3	1906	E.Meyer & Co.	The Bund	Large go-down
4	1906	German Consulate	Victoria Road	pull down
5	1910	Queen's Hotel	The Bund	Additions of four Bed Rooms
6	1910	Hatch, Carter and Company	The Bund	One 2-Storeyed Godown
7	1910	Melchers and Company	Taku Road	Addition to Godown and Offices
8	1910	Wilson and Company	Victoria Road	Addition to Godown
9	1910	The Tientsin Club	Bund and Victoria Road	Addition to Club
10	1910	British Municipal Council	Victoria Road	Concrete Prison
11	1910	British Municipal Council	Victoria Road	New Fire Station
12	1912	F.Thomas for the Mission Du Tchili	Victoria Road	Alteration and Additions
13	1912	K.C.O Liddell, Esq. for Mrs. Boodilin	Victoria Road	Alteration and Additions
14	1912	Karatzas Bros. and Company for Messrs. Hall & Holtz	Victoria Road	House and Shops
15	1914	Hirsbrunner & Company	Victoria Road	Sample Room
16	1914	Queen's Hotel	Bund	Addition to Hotel building
17	1914	Kodak Company	Victoria Road	New Shop
18	1914	W Forbes & Company	Victoria Road	Additions and Alteration to upper floor of existiong godown
19	1914	Collins & Company	Taku Road	Addition and Alteration to compradore's Offices and Quarters
20	1914	Reuter Brocklemann & Company	Bund	Addition and Alteration to existing godown
21	1915	Chi Li S. E. Mission	Victoria Road	Addition to Office (Tientsin Press)

黄色: 公共施設の建設 青: 新築 赤: 増改築

(各年の工部局年度報告により作成)

先述の通り、原英租界が開設されると、洋行を中心とした商業施設が多く立地し、さらには埠頭等の整備も行われた。また 1880 年頃から公園やゴードン・ホールのような公共施設も建設された。その中で、Astor House Hotel のように 1886 年に増築され、大規模化するものもあった。1900 年頃からも、建物の増築やより大規模な建物への建て替えが行われた。表 3-2 に工部局年度報告で確認できた 1906 年～1915 年の建設状況を示す。事業内容において、青色は商業建築・倉庫の新築、赤色は増築・改築である。オフィス、倉庫、商店の新築もいくつか見られるが、増築・改造が事業の大半を占めていたことがわかる。19 番では買弁のオフィスと使用人の宿舍の増築が行われた。第 2 章で説明したように、買弁とは洋行等が中国に進出、或は貿易を行う際、その手助けを行う中国人のことを指す。つまり、1914 年には、洋行の社員等はまだ原英租界に居住しながら仕事に従事し、職住が一体であった。また、黄色で示したように、消防署も建設されたことがわかる。

建設事業の場所については道路名しか記載されておらず、具体的な場所は示されていないが、企業による建設事業の多くは Victoria Road 沿いに立地していたことがわかる。

第 2 項 原英租界の中心の移動

租界で埠頭を建設した当初は、2,000 トン以上の汽船が原英租界に入港していた⁴²⁾。しかし、1886 年頃から海河(Pei Ho) の深さが徐々に浅くなり、1898 年には租界沿い

の埠頭に到達できる船は無くなり、1899年には海河の下流で渤海湾に面する塘沽より上流 30 マイルの区間は殆ど航行できなくなった。このため外国及び中国企業は塘沽⁴³⁾に埠頭を建設するか⁴⁴⁾、河口の大沽口に汽船を停めて、荷物をそこからはしけで市内の埠頭に運ぶかの何れかを選択しなければならなくなった。また、川が浅く、流れが大きく曲がりくねっていたから、天津は何度も洪水や氾濫にみまわれた⁴⁵⁾。

海河の水運を改善するため、1897年には海河工程委員会が組織され、図 3-13⁴⁶⁾に示すように、海河の蛇行する部分をまっすぐにする河道整備事業が1901年～1927年の間に6回行われた⁴⁷⁾。最初の事業は1901年に始まり、新しい河道をつくり、蛇行をまっすぐに整備すると共に、浚渫や川幅の拡幅を行った。浚渫によって、1906年には喫水 3.7m(12 フィート)の船は満潮時に租界の埠頭に到達できるようになった。1908年には 4m (13 フィート) の船が安全に海河を通過し、1909年には租界の埠頭に到達できた延べ 623 隻の船の内、54 隻の喫水は 3.7m(12 フィート)以上であり、1911年には、698 隻の内、20 隻は 4m (13 フィート) 以上であった。1914年までに海河を通過した記録に残っている喫水の最も深い船の喫水は 4.6m (15 フィート) であった。しかし、1916年～1918年に川の水が急に減り、1917年には喫水が 3m(10 フィート)を超える船は通過してはならないとの警告が出された。それでも、その後も海河工程局の努力によって、1924年には 1,311 隻の船が租界の川岸に到達し、最大の喫水は (5.4m) 17.6 フィートであった⁴⁸⁾。また、第 4 章で詳細な分析を行うが、英国は海河工程局と協議し、海河の整備を行うときに掘り出された川底の堆積土砂を使って、租界の地盤の埋め立てを行った⁴⁹⁾。この作業は1919年に始まり、1935年頃には完成した。また、目的を達した後の船は帰航のため向きを変える必要があったため、川幅の拡幅も行われた。1905年に作業が開始され、それによって、天津の河道は 84m(275 フィート)の船が方向転換してもまだ 6m(20 フィート)の余裕がある広さまで拡幅された⁵⁰⁾。この他、海河は毎年冬の 12 月以降の 2～3 ヶ月は結氷し

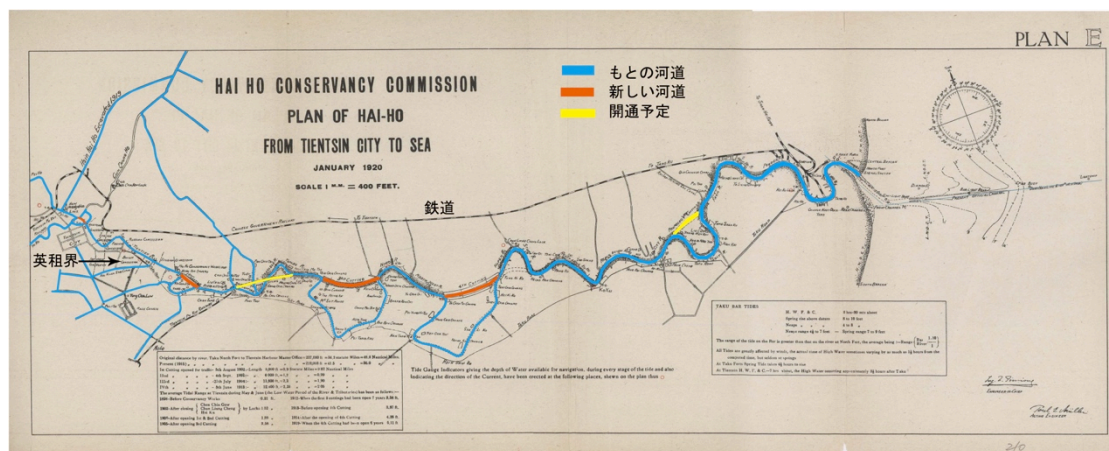


図 3-13 1920 年時点における海河の河道変更事業
(Hai-ho Conservancy Board 1898-1919 に所収の図を基に作成)

てしまい、船が入港できなくなるので、砕氷船を利用した。1914年から、海河工程局は、大沽口の河道の砕氷事業をはじめた。1921年には大沽口から市内の埠頭までの天津港区における砕氷に成功した。海河工程局は、1913年から25年までの間に、6隻の砕氷船を買って配置したから、こののちは冬でも自由に船が航行できるようになった⁵¹⁾。したがって、これらの作業によって、海河の水運がある程度改善されたことがわかる。

しかし、中国や外国の運行企業は、海河がまた運航できなくなることを心配していた。そこで、19世紀末以来、各国の企業は、早期に鉄道駅を建設した塘沽に埠頭をつくって事務所を置くという対処をした。イギリス系の怡和洋行、太古洋行や中国の輪船招商局、開平礦務局をはじめ、十社前後の企業が次々と塘沽に埠頭を開いた。これがのちに「塘沽新港」に港湾機能に移していく先がけとなった⁵²⁾。

以上からわかるように、海河の水流の自然的要因が船舶の運航に大きな影響を及ぼし、それによって原英租界の Bund 沿いの埠頭の使用率が下がり、企業は水運よりもむしろ鉄道等の陸運を利用するようになったと考えられる。そのため、水運を利用して貿易を行っていた洋行等は建物の大規模化を行う際、Bund よりもまだ両側に空き地のある Victoria Road に面して建設した。それにより、原英租界の中心は徐々に Bund から Victoria Road に移り、現在の景観の原型が創られたと推測される。

第6節 小括

拡充界は原英租界からのスプロールによって形成されたという側面があるため、特定のデザイナーによる特徴ある街区計画は行われなかったと推測できる。道路の形成は既存の道路の影響を受け、街区もその道路と拡充界の境界に制限を受けたことがわかった。

原英租界の繁栄によって、公共施設の需要が高まり、拡充界にはその多くが立地したことが分かった。特にガス、電気、水道会社等の公共施設が結果的に全英租界のほぼ中央に立地したことによって、原英租界に対するエネルギー供給を行うのみならず、その後の推広界の初期の開発を促進することにもなったと考えられる。また、Recreation Ground 建設の事例から分かるように、住民間での話し合いによってその建設の必要性が確認され、住民たちが土地を寄付することで建設に大きな貢献を果たしたものもあった。つまり、拡充界の公共施設の建設に関する意思決定においては民主的な側面が存在していた。一方で、この時期の原英租界については、建物の建て替え、増築等が行われ、大規模化が図られた。しかし、海河の状態悪化により、原英租界の企業が水運から陸運へ移行することとなり、原英租界の繁栄の中心は Bund から Victoria Road に移ったのである。

洋務運動により原英租界の周辺において中国の地域社会の近代化が起ったが、中国人が董事会のメンバーになることはほとんどなかった。また、招商局のように中国資本の企業、組織が原英租界内に入り込むことは稀なケースであった。これに対し、租界時代中期になって、拡充界が開発されると、董事会のメンバーに中国人が担当することが少数ながら見られるようになり、また中国人や中国系組織による開発・建設事業も見られるようになった。これによって、租界の外国人が内陸に向かって進出していくと同時に、現地の中国人や中国系企業等がその空隙をついて租界内に向かって入り込んでいったこともわかった。

原英租界と拡充界では開発の意図的側面と開発の機能的側面が異なり、空間的に異なる特徴をもった。また、開発・建設事業に対する中国人の関与の仕方が異なっていたことがわかった。租界時代中期では原英租界は英国人の等の外国人のための都市的性格を保持していた。新たに開発された拡充界では中国人の関与が深まったが、依然として英国人のための都市的性格が強かったと言える。

注：

- 1) O.D.Rasmussen : Tientsin: An Illustrated Outline History, 1925, The Tientsin Press, Ltd. の p.77 及び p.95 による。
- 2) 当該地図には年代が示されていないが、Town Hall と表記された Gordon Hall が既に建設されているため、1890 年以後であると判断できる。また、図 3-2 の 1900 年地図と比較すると、図 3-1 中に描かれた道路は少ないので、それ以前の地図であると判断した。
- 3) 天津市地方志編修委員会編著:天津通志・附志・租界,1996,天津社会科学院出版社、p39
- 4) 当該図には英租界の第三次拡張区域の時期が 1901 年と記されていたが、実際には 1902 年である。また 1900 年に起きた義和団の乱に対する軍事行動の作戦も記されていた。
- 5) 天津市地方志編修委員会編著 (1996)、pp.81-82 及び 1938 年年度報告 pp.12-14
- 6) 1938 年工部局年度報告 pp.12-13 により作成。
- 7) 当該図には各租界の状態と、1900 年に起きた義和団の乱に対して、イギリス、フランス、ドイツと日本が占有・建設した建物が明記されている。
- 8) イギリス国立公文書館に 2 枚セットで所蔵されており、図 3-6 には目立った建物、海河、運河 (小川)、街区、公共目的に開発された道路と他の道路が示されている。もう一枚の地図 (Map of Tientsin) には英租界と他の租界、河と鉄道が示されている。また Revised 1922 と記されており、1922 年以前に描かれ、1922 年に修正したものであることがわかる。このことから、図 3-6 も同じであることと推定される。
- 9) O.D.Rasmussen (1925) pp.88-89 による。
- 10) 天津市地方志編修委員会編著 (1996) p.302
- 11) O.D.Rasmussen (1925) pp.88-89 による。
- 12) ガスランプであると思われる。
- 13) 天津市地方志編修委員会編著 (1996) p.302
- 14) 同上
- 15) O.D.Rasmussen (1925) pp.88-89 による。
- 16) 天津市地方志編修委員会編著 (1996) p.302
- 17) O.D.Rasmussen (1925) pp.88-89 による。
- 18) 天津社会科学院 (1987)、pp.459-460
- 19) O.D.Rasmussen (1925) pp.106-107 による。
- 20) 同上。
- 21) 独占経営のことであると思われる。
- 22) 天津市地方志編修委員会編著 (1996) pp.302-304
- 23) 同上、pp.364-365
- 24) 1888 年の地図において同場所には「聖道堂」と示されている。

- 25) O.D.Rasmussen (1925) pp.247-249
- 26) Anglicanism、英語の発音から中国語では安立甘教会とも呼ばれる。
- 27)天津市地方志編修委員会編著（1996） pp.383-384
- 28) O.D.Rasmussen (1925)には学校を組織した主体は記述されていないが、租界内の住民の要望を満たす為であったことと、学校の名前が All Saint's School であったことから推測して、工部局と教会が共同で組織したと考えられる。また All Saint's School の場所は All Saints Church を建設する以前に教会が確保した土地に建てられていた建物を使ったと推測できる。
- 29) O.D.Rasmussen (1925) pp.275-276
- 30)当該組織に関する情報は見つかっていないが、租界の住民間で学校教育に関する自治組織であると思われる。
- 31) O.D.Rasmussen (1925)の記述からは初期の校舎の場所は不明であるが、管理が工部局に移ってから推广界で新校舎を建てる計画が策定されたと解釈できる。しかし、『天津通志・附志・租界』では当該校は最初から推广界に立地していたとされる。O.D.Rasmussen (1925) は1925年に書かれたものであることを考慮し、後に推广界に移ったと考えられる。
- 32)天津市地方志編修委員会編著(1996) p.356
- 33)同上 p.351 及び O.D.Rasmussen (1925) pp.276-277 による。
- 34) C は COUNCILS 最初のアルファベットで、工部局が発行したローンである。
- 35) O.D.Rasmussen (1925) pp.105-106
- 36) 工部局年度報告 1927 年, p.41
- 37) O.D.Rasmussen (1925) pp.313-314
- 38) 同上、 pp.314-315
- 39) 同上、 p.317
- 40)ただし、面する道路名のみが記載され、具体的な場所は不明である。
- 41) 同上、 pp.233-234
- 42)天津地域史研究会編,天津史 再生する都市のトポロジー, 東方書店, 1999、 p.66
- 43)塘沽と大沽は海河の河口部に位置し、河口の南岸は大沽と呼ばれ、そこから約 5km 上流の河の北岸は塘沽と呼ばれる。
- 44)中国航海史研究会,《天津港史》編輯委員会:中国水運史叢書—天津港史（古、近代部分）, 人民交通出版社, 1986、 p.116 による。
- 45)天津地域史研究会編(1999), p.66
- 46)Hai-ho Conservancy Board 1898-1919,天津档案館に所蔵
- 47)天津社会科学院（1987） p.458 による。
- 48) O.D.Rasmussen (1925) pp.238-240
- 49)天津市地方志編修委員会編著（1996） p.163

50) O.D.Rasmussen (1925) pp.238-240

51)天津地域史研究会編 (1999) p.72

52)同上、 p.67

第4章 租界時代後期の英租界（1917～1943）：

推广界の開發と原英租界・拡充界の変容

上海の高大な商業建築に対し、天津の租界建築の特徴は住宅建築が中心であったことである。特に第三次拡張域である推广界(British Extra Rural Extension)の一部であり、後に五大道と呼ばれた区域においては政府要人を始めとする多くの上流階級が土地を購入し、住宅を建設して、高級住宅街を形成した¹⁾。O.D.Rasmussen は著書 *The Growth of Tientsin* において次のように述べている²⁾。

And yet here in prosaic Tientsin the really marvelous work goes on in the British Extra Area³⁾, where a great waste tract of swampy land is being turned into a garden city, with modern homes, parks and avenues of trees.

O.D.Rasmussen 自身は記者であり、都市計画の専門家ではなかったため、garden city はいわゆる「田園都市」を直接指すものではないと推測できるが、庭園を伴った非常に住環境の良い住宅地が形成されていたと判断できる。洋風の戸建て住宅という意味で「小洋楼」と呼ばれるこれら租界時代に建設された多量の住宅建築は、住宅地を含む都市構造と共に現存しており、今日に至るまで天津の特色ある都市景観を構成している。現在、天津市は「生態都市」⁴⁾に位置づけられているが、その基礎は租界時代に築かれたのである。

原英租界は狭い区域に限られた空間設計であり、拡充界は早い時期にスプロールによって形成された区域が広がったため、明確な意図を持った街区設計を行うことが困難であった。しかし、推广界は十分な空間と、ほぼ白紙からの開発であったため、設計者の意図を明確に反映した街区であった。そこで、本章では 1917 年に制定された推广界の設計意図と実際の開発経緯に注意をはらいつつ、街区空間や街並みがどのように形成されたのかについて解明する。これは天津市において、近代に始まった戸建住宅の住文化が根ざす歴史的な脈を知る上で不可欠なものであると考える。また原英租界と拡充界を含めた英租界全体の開発状況を、英租界が中国に返還された 1943 年まで明らかにする。

第1節 推广界の立地と開設

20 世紀初頭の推广界はほとんどが湿地であり、僅かに従来からの小道が通っているだけだった⁵⁾。施設としてはフランス租界との境界付近に英国兵舎、また馬場道沿いにいくつかの宅地が形成されていたが、正式な開発は行われていなかった。

1902 年 12 月 15 日の英国圍牆外拡充租界章程において、英租界は Wei Tzu Creek を超え、南西側は後の Hai Kuan Ssu road (海光寺道、現西康路) まで拡張

し、南東側は馬場道に沿って、北東は Hai ho（現海河）に面し、西北は後の Bristow Road（宝士徒道、現営口道）に沿ってフランス租界に隣接すると定められた。英租界の第三次拡張推广界（British Extra Rural Extension）は 1903 年に確立され、面積は 3,928 畝（約 262ha）であった。拡充界からの計三回の拡張後、天津英租界の総面積は 6,149 畝（約 410.1ha）に達した⁶⁾。

第 2 節 推广界の管理体制

推广界は開設されたが、1918 年までは如何なる行政管理も行われなかった。1915 年初めには、Peking and Tientsin Times において英租界の三つの行政区を合併する運動が起こり、1917 年 10 月には 180 人が署名した請願書が英国政府に送られたと報道されている。これを受け、英国政府は天津の英国領事に対し、各行政区の工部局で会議を行い、合併案の制定を開始するよう命令した。これによって、原英租界と拡充界の工部局は連合委員会を成立し、合併後の新しい『地亩章程』を起草した。この章程は 1918 年に正式に公布され、1919 年 1 月 1 日に発行した。その後、新しい『地亩章程』と統一された董事会工部局の管理の下、英租界は新たな歴史を始めることになった⁷⁾。

選挙権については、1918 年の『地亩章程』⁸⁾の定めでは毎年地租 20～80 両を支払う者に 1 票の投票の権利があり、80～240 両を支払う者には 2 票、240～480 両を支払う者には 3 票、それ以上の者には 4 票の権利があった。賃貸住宅の居住者で、家賃が 480～3000 両／年を支払う者は 1 票、3000～10000 両／年を支払う者は 2 票、それ以上を支払う者には 3 票の権利が与えられた。1899 年以前まで、董事は 5 人であり、国籍に関する規制はなかった⁹⁾。1918 年の『地亩章程』では董事会は 9 人以下、5 人以上が英国人でなければならないと定められていたが、1928 年に章程が改正され、董事は 10 人以下 5 人以上、内英国人は 5 人以上と定められた。また 1918 年には英語のできない者は董事会には加入できないとされたが、1928 年では当該項目は削除された¹⁰⁾。董事会や工部局の機能等は原英租界と同じであったが、推广界が開発される時期になると中国人に対してもより平等な権利が尊重されるようになったことがわかる。特に 1928 年以後では、理論的に董事会のトップの半数を中国人が占めることができた。実際には図 4-1¹¹⁾に示すように 1919 年から董事会には中国人が加入し、1925 年までは中国人の人数は 1 人であった。1926 年には中国人納税者からの董事会の人員構成に対しての抗議を受け、董事会は中国人董事を 2 人に増やし、さらに 1927 年には中国人による英租界の返還を求める声が大きくなったことを受け、中国人の董事を三人まで増やし、局面の打開を図った¹²⁾。さらに、1930 年からは副董事長に中国人が選ばれ、また、通年の董事の内 3～4 人は中国人が担当した。

BRITISH MUNICIPAL COUNCILS, 1919 TO 1938.

(AMALGAMATED AREAS).

Year	Chairman	Vice-Chairman	Hon. Treasurer	Councillors
1919	E. W. Carter	F. R. Scott	R. G. Buchan	<u>K. H. Chun</u> , W. M. Howell, N. Leslie, F. W. Maze, Major W. S. Nathan, C.M.G., R.E. and Dr. D. B. Nye.
1920	E. W. Carter	W. M. Howell ...	R. G. Buchan ...	<u>K. H. Chun</u> , F. W. Maze, D. B. Nye, E. C. Peters, W. J. Warsley and P. C. Young, C.B.E.
1921	Major W. S. Nathan, C.M.G., R.E. P. C. Young, C.B.E.	W. M. Howell ...	F. A. Fairchild ...	M. Boniface, <u>K. H. Chun</u> , A. C. Cornish, F. A. Kennedy, W. W. G. Ross, R. H. R. Wade, and for a portion of the year, E. C. Peters.
1922	P. C. Young, C.B.E.	W. M. Howell ...	F. A. Fairchild ...	R. G. Buchan, <u>K. H. Chun</u> , A. C. Cornish, E. C. Peters, A. E. Tipper, R. H. R. Wade, and for a portion of the year, E. W. Carter and H. A. Lucker.
1923	P. C. Young, C.B.E.	W. M. Howell ...	F. A. Fairchild ...	E. W. Carter, <u>K. H. Chun</u> , H. A. Lucker, E. C. Peters, A. E. Tipper, R. H. R. Wade, and for a portion of the year W. E. Leckie.
1924	P. C. Young, C.B.E. W. M. Howell ...	Vice-Chairman & Hon. Treasurer E. W. Carter		<u>K. H. Chun</u> , H. F. Dyott, H. A. Lucker, E. C. Peters, A. E. Tipper, James Turner and for a portion of the year H. Bailey, R. G. Buchan and E. J. Nathan.
1925	E. C. Peters	E. W. Carter		R. G. Buchan, <u>K. H. Chun</u> , W. M. Howell, H. A. Lucker, E. J. Nathan, Howard Payne and James Turner and for a portion of the year A. E. Tipper and P. C. Young, C.B.E.
1926	P. C. Young, C.B.E.	W. J. Warsley...		G. H. Charleton, <u>K. H. Chun</u> , <u>J. S. Chwang</u> , H. A. Lucker, Howard Payne, E. C. Peters and James Turner, and for a portion of the year R. T. McDonnell and R. H. Rowlett.
1927	P. C. Young, C.B.E.	E. C. Peters		<u>K. H. Chun</u> , <u>S. M. Chung</u> , <u>J. S. Chwang</u> , R. T. McDonnell, Howard Payne, James Turner and W. J. Warsley and for a portion of the year A. E. Tipper.
1928	P. C. Young, C.B.E.	E. C. Peters		<u>K. H. Chun</u> , <u>S. M. Chung</u> , <u>J. S. Chwang</u> , R. T. McDonnell, Howard Payne, A. E. Tipper and W. J. Warsley, and for a portion of the year C. D. Dixon, Z. S. Bien and A. Brearley.
1929	P. C. Young, C.B.E.	E. C. Peters		Z. S. Bien, A. Brearley, H. K. Chang, <u>K. H. Chun</u> , <u>S. M. Chung</u> , <u>J. S. Chwang</u> , Howard Payne and A. E. Tipper and for a portion of the year T. S. Young and J. C. Taylor.
1930	P. C. Young, C.B.E.	<u>J. S. Chwang</u>		Z. S. Bien, <u>S. M. Chung</u> , <u>K. C. Hu</u> , <u>L. K. Liang</u> , Howard Payne, E. C. Peters, J. C. Taylor and A. E. Tipper.
1931	A. E. Tipper	<u>J. S. Chwang</u>		A. Brearley, <u>Chunta T. L. Chao</u> , <u>C. Cheng</u> , <u>Cheng Pin-zen</u> , Howard Payne, E. C. Peters, <u>Sun Feng-tsao</u> and J. C. Taylor, and for a portion of the year <u>C. K. Wang</u> and <u>K. Y. Pao</u> .
1932	A. E. Tipper	<u>J. S. Chwang</u>		A. Brearley, <u>Chunta T. L. Chao</u> , <u>C. Cheng</u> , <u>K. Y. Pao</u> , Howard Payne, E. C. Peters, J. C. Taylor and <u>C. K. Wang</u> , and for a portion of the year <u>Li Ta</u> , F. A. Perry and L. R. Rees.
1933	A. E. Tipper	<u>J. S. Chwang</u>		Z. S. Bien, <u>Chunta T. L. Chao</u> , <u>L. V. Lang</u> , <u>Li Ta</u> , R. D. Murray, E. C. Peters, L. R. Rees and <u>C. K. Wang</u> , and for a portion of the year Howard Payne.
1934	E. C. Peters	<u>J. S. Chwang</u>		Z. S. Bien, <u>Chunta T. L. Chao</u> , <u>L. V. Lang</u> , <u>Li Ta</u> , H. H. Reed, L. R. Rees, James Turner and <u>C. K. Wang</u> , and for a portion of the year W. F. Ridler.
1935	E. C. Peters	<u>J. S. Chwang</u>		Z. S. Bien, <u>Chunta T. L. Chao</u> , <u>Li Ta</u> , C. E. Peacock, H. H. Reed, R. K. Rodger, James Turner and <u>C. K. Wang</u> , and for a portion of the year D. O. Russell.
1936	A. E. Tipper	<u>J. S. Chwang</u>		<u>Chunta T. L. Chao</u> , T. F. Hwang, <u>Li Ta</u> , E. C. Peters, H. H. Reed, R. K. Rodger, D. O. Russell and <u>C. K. Wang</u> , and for a portion of the year Mr. C. H. Pian and Mr. C. D. Dixon.
1937	A. E. Tipper	<u>J. S. Chwang</u>		A. Burgess, <u>Chunta T. L. Chao</u> , C. D. Dixon, <u>P. Y. Hsu</u> , T. F. Hwang, R. K. Rodger, D. O. Russell and <u>C. K. Wang</u> .
1938	A. E. Tipper, C.B.E.	<u>J. S. Chwang</u>		A. Burgess, <u>Chunta T. L. Chao</u> , C. D. Dixon, <u>P. Y. Hsu</u> , T. F. Hwang, R. K. Rodger, D. O. Russell and <u>C. K. Wang</u> ; and for a portion of the year <u>Mr. F. P. Ling</u> , <u>Mr. Keats S. Chu</u> , Mr. T. H. R. Candlin and Mr. J. A. Andrew.

— : 中国人

図 4-1 1919 年～1938 年まで英租界董事会の人員
(1938 年の工部局年度報告より作成)

1926 年に国務総理兼代行総統を担当し、後に天津に移住した顔惠慶は自身の日記に「英租界（推廣界 Hong Kong Road）に住むことにした。当該区は居住生活に適し、街区道路が広く、良好な市政管理と安全な居住環境を持っているだけでなく、租界管理委員会は中英共治原則に基づき、双方各 5 名からなっている。仏、伊、日本租界はその国の駐天津領事館が統轄しており、租界内の中国人や他国の住民は管理事務に参与できない。また華界、前独租界、奥、露租界は距離が遠かったり、外出が

不便で、狭く混み合ったりして、閑静快適な地を得るのは難しい。(括弧内筆者)」と記している¹³⁾。自ら居住する街区の管轄に関与できたことが 20 世紀初頭の中国上層階級の人々には魅力的であり、このことが当該区に居住することを選択した一要因であり、中国人が英租界内に流入する要因でもあったと考えられる。

第 3 節 推广界の道路・街区の計画

第 1 項 当初計画案の意図

推广界は開設されたが、1917 年まで開発計画は策定されなかった。1917 年に英租界推广界工部局により初めて開発計画案が作成され、図 4-2¹⁴⁾のように街区の設計がなされた。設計を担当したのは H. McClure Anderson というイギリス人技術者であった¹⁵⁾。その計画案には主に五つの狙いがあったことが 1917 年の工部局年度報告に記されている¹⁶⁾。次にその意識を示す。

- I. 英租界のすべての部分だけでなく、隣接する他租界や周辺の地域一般からの直接的な交通アクセスを確保する。商業中心地区への通行がスムーズになればなるほど、推广界¹⁷⁾のような住宅地は開発されやすくなる。
- II. 大部分の住宅不動産が面する狭い通りを周到に計画することで、建物の四方のどれかの面に、一日の内ある時間帯に直射日光を得られ、結果として通風と健康的な環境を得ることが出来る。また、このアイディアには直接的に南北或は東西に建築街区を配置することを避けながらも、東西方向の道路を優先的に配置することで、将来の家屋にできるだけ南向きを与えることが出来るようにすることが含まれる。

- III. 十分な排水設備を備え、洪水から安全を確保する。推广界での最も良い方法は元の地盤高さを最低 18.50 Taku Datum まで、或は Hai Ho の堤防頂部より 6 インチ (15cm) 高くあげることである。この高さは昨秋到達した洪水の水位より 3 フィート (0.9m) 高い。これにより Wei Tze Creek へのこの区域の自然な排水を保障する。



図 4-2 1917 年推广界設計図
(1917 年の工部局年度報告に所収)

- IV. 必要に応じて道路の

幅を調節する。これはまさに熟慮を要する経済的な要点である。大通りは幅を十分広くするが、住宅街の道路は通過交通に備える必要はないので、幅を広くする必要はない。不必要な幅は無駄で、土地の賃貸料を増加させ、利益の逸失を招き、発展を遅らせる。建



図 4-3 1925 年英租界地図

(Tientsin: An Illustrated Outline History に所収)

築用地を減らしてスペースを道路に割けば、その分の舗装とメンテナンスが増加し、余分に経費がかかる。光、空気とレクリエーションについては、家屋により多くのオープンスペースと公園を供給することで居住者により大きな利益を与え、経済的に住民を満足させることができる。この提案のポイントは建物と道路境界線の間には十分なスペースを確保することである。

V. 正しい道路境界線を決める。建築物群に比較的広い空間を与え、建築設計において表現する機会を与える。

以上の五つの項目から見られるように、Anderson は 1917 年の計画案において I 交通アクセス、II 住宅建築の方位、III 洪水に対する防衛及び排水、IV 道路の幅及びオープンスペース、そして V 敷地の広さについての配慮をしながら、開発計画を行おうとしていたことが分かる。しかし、図 4-3¹⁸⁾の 1925 年の英租界の計画図では道路、公園、街区構成等において一程度の変更が見られる。この 1925 年の計画図は現在の当該地区と基本的に一致し、実施案であったと考えられる。次に 1917 年と 1925 年の設計にはどのような変化があったかに焦点を当て、実際の造成経緯を検討する。

第 2 項 埋め立て

天津は 19 世紀から 20 世紀初頭まで度々洪水に襲われた。1871 年には Hai Ho (海河) が氾濫し、特に 1917 年の洪水¹⁹⁾による被害は甚大であった。そのため、第 3 節第 1 項の III においてみたように洪水に対する防衛と排水についての計画が行われ、推广界全体の地盤を 18.50 Taku Datum まで上げるとしていた。Taku Datum とは「大沽高程」のことであり、1902 年に海河工程局によって塘沽海河河口北砲台院内に原点を埋設し、その後華北地方で広く使われた高さの基準である²⁰⁾。18.50 Taku Datum

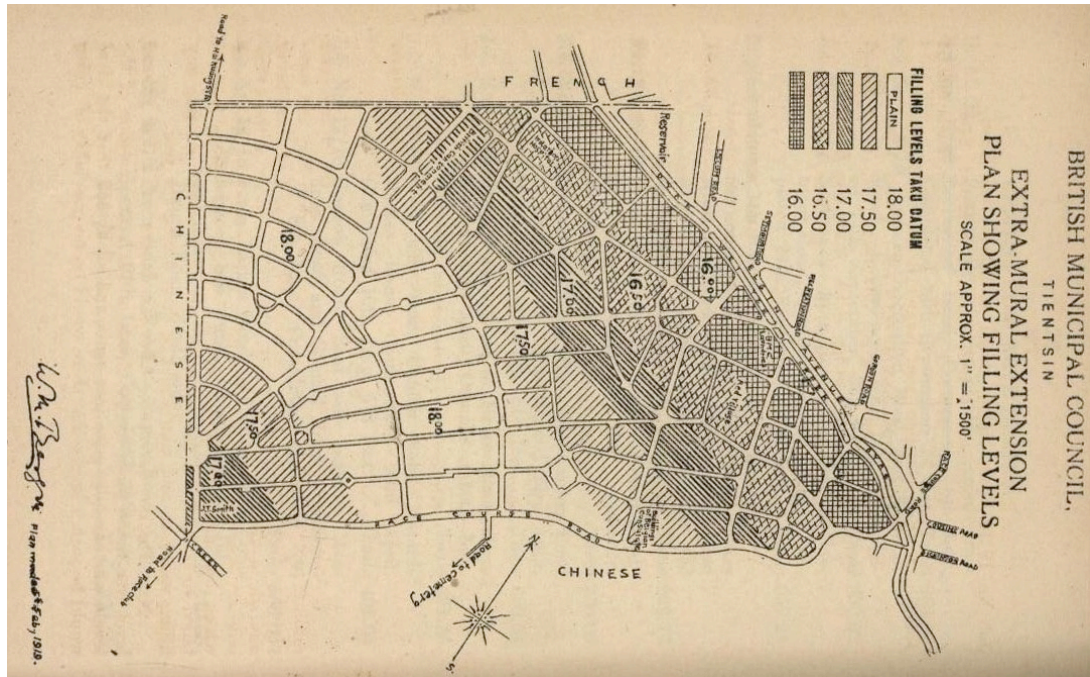


図 4-4 埋め立て高さ（1918年の工部局年度報告に所収）

は原点より 18.5 フィート (5.6m) 上の高さを指していると推定される。しかし、地権者²¹⁾の反対により 1918 年には図 4-4 の計画案に示すように、推广界の中央部を最も高い 18.00 Taku Datum (5.5m)、両脇（南北）に向かって順次低くなるように計画された。Wei Tze Creek 付近の低い部分では 16.00 Taku Datum (4.9m)、最南端の Tung Chia Lou Creek に近い部分は 17.00 Taku Datum (5.2m) になるように埋め立て計画がなされた。実際の埋め立てはこの高さ基準に従い行われたと考えられる。海河工程局は Hai Ho の治水を行う為に作られた組織である。英国はまず海河工程局と協議し、Hai Ho の整備を行うときに掘り出された川底の堆積土砂を使って、推广界の地盤の埋め立てを行った²²⁾。翌

年の 1919 年には最初の部分の埋め立てが完成された。埋め立て方法は、先ずある一定区域の周囲に必要なとする地平面より高いあぜを造り、そのあぜにより囲まれた部分に機械（汲筒挖泥機）を使って汲み上げられた Hai Ho の堆積土砂を地下に埋設されていたパイプを通して注入するというもので

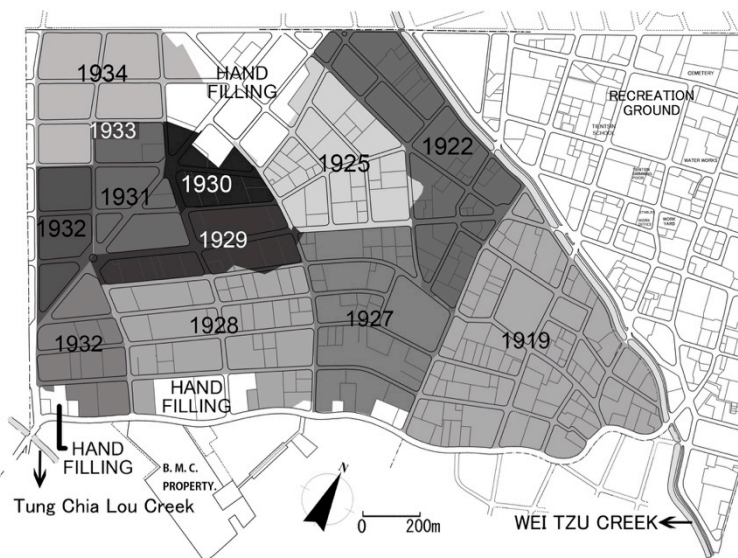


図 4-5 推广界の埋め立て経緯
（工部局の各年度の報告により作成）

あった。その後沈殿させ、水分は浸透・蒸発させた。この方法で毎年 25 万～40 万 m³ を埋め立てることができた。図 4-5²³⁾に示すように、埋め立て事業は Hai Ho に近い東側から順次行われ、1930 年代半ばにはほぼ完成した。

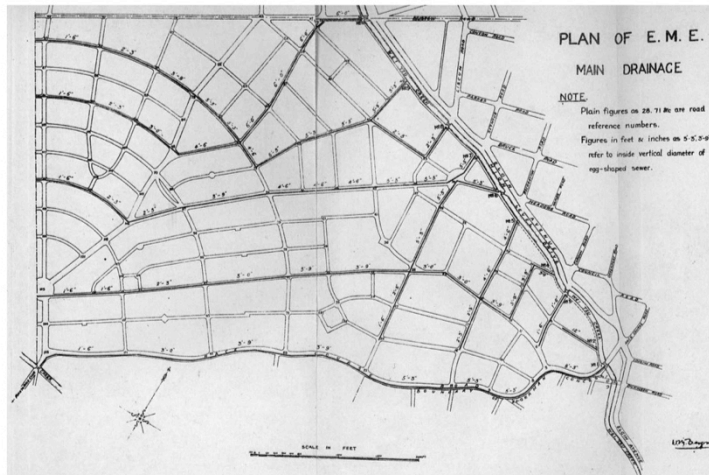


図 4-6 1919 年下水溝計画
(1919 年の工部局年度報告に所収)

また、図 4-6²⁴⁾に示すように 1919 年には生活排水と共に、洪水時の氾濫水を排水できるよう排水設備を計画した。ただし、その後の道路設計の変更に合わせて、下水溝の設置にも変更があった。図 4-7²⁵⁾に示すように 1920 年からの工事により 1938 年には、黒線の部分の下水溝がすでに完成していた。この間、年度報告が欠如している年があるため、全ての部分については確認できないが、道路の造成に従い、ほぼ推广界全域に下水溝が配備されたと推測できる。

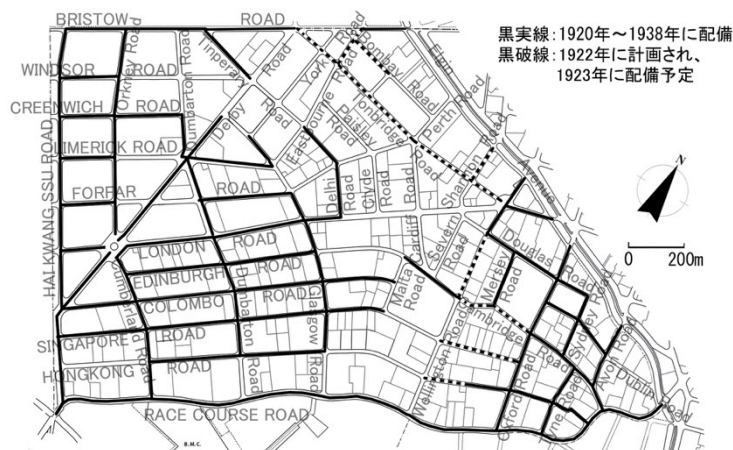


図 4-7 1920～1938 年下水溝整備
(工部局の各年度の報告より作成)

第 3 項 道路計画

推广界が開発されるまでには、原英租界はすでに造成されており、銀行や企業のオフィスなどが数多く集まって、商業地区を形成していた。また拡充界（第一次拡張）も 1900 年初頭～1920 年頃にある程度の開発が行われ、道路やオープンスペースなどが造成され、原英租界に近接していたため教会や映画館など公共施設が多数建設された²⁶⁾。推广界はそれらの区域から、Wei Tze Creek を超えた南西に位置し、最初の英租界の近郊に当たる場所であった。そのため、街路の計画において既存の英租界との接続に対する配慮は不可欠であったと考えられる。こうして第 3 節第 1 項の I に示したように、工部局はまず交通の利便性を確保するための道路計画を行った。

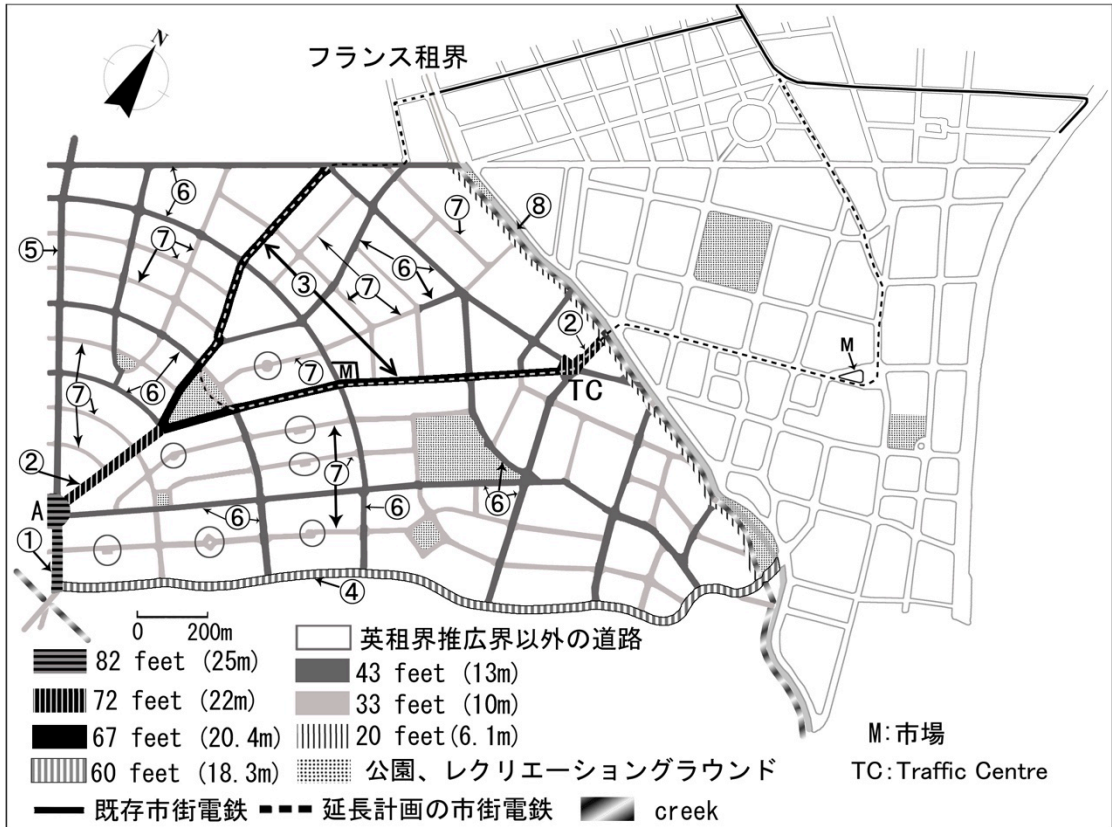


図 4-8 当初案の道路計画 (1917 年の工部局年度報告中の図をもとに作成)

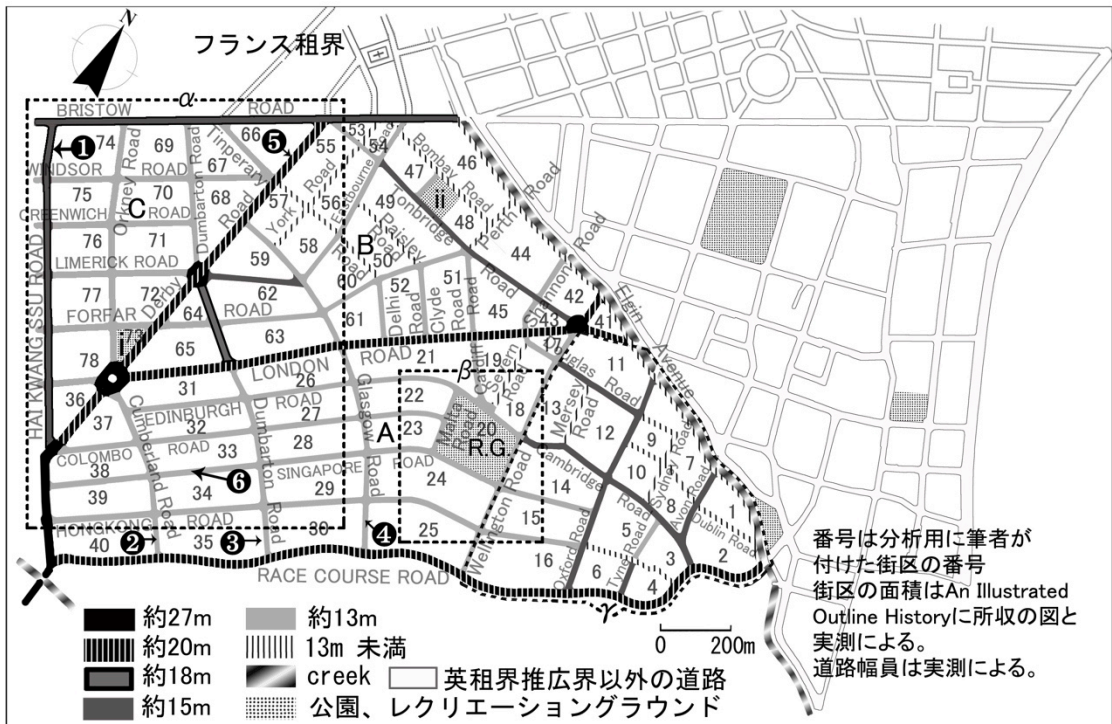


図 4-9 実施案の道路計画

(Tientsin: An Illustrated Outline History 中の図をもとに作成)

図 4-2²⁷⁾の 1917 年の工部局年度報告で描かれた設計図から、推广界の道路の幅は

一律ではなく、8種類の異なる幅で設計されたことが分かる。図 4-8²⁸⁾と図 4-10²⁹⁾に示すように道路の緑化と舗装についても細かい計画がなされた。道路は図 4-10 の①～⑥の交通道路と⑦の住宅街路に分けて設計され、後者の道路幅は狭く計画され、2.のIVに基づいた計画がなされたことが分かる。道路⑧は元々Mud Wall と呼ばれたWei Tze Creek の堤防の上で、そこに樹木に挟まれた高い位置の道路を計画された。推广界の道路は既存の原英租界や扩充界のような道路ではなく、より自由な設計となった。図 4-8 の南西部の道路はA地点を中心に同心円状に道路が広がり、またそれらに直交するように放射線状の道路が配置された。中心となる道路としては最大幅員である 82 フィート (25m) 幅の①の道路から同 72 フィート (22m) 幅の②の道路を経て、67 フィート (20.4m) 幅の③の道路に枝分かれし、Y字型の道路網を形成していた。そのうちの一本は東南側境界の馬場道と北西側のフランス租界との境界に概ね平行し、推广界の中央を横断するように配置された。その北東端にはトラフィックセンターが設けられた (図 4-8 中TC)。その場所は英租界全体のほぼ中心

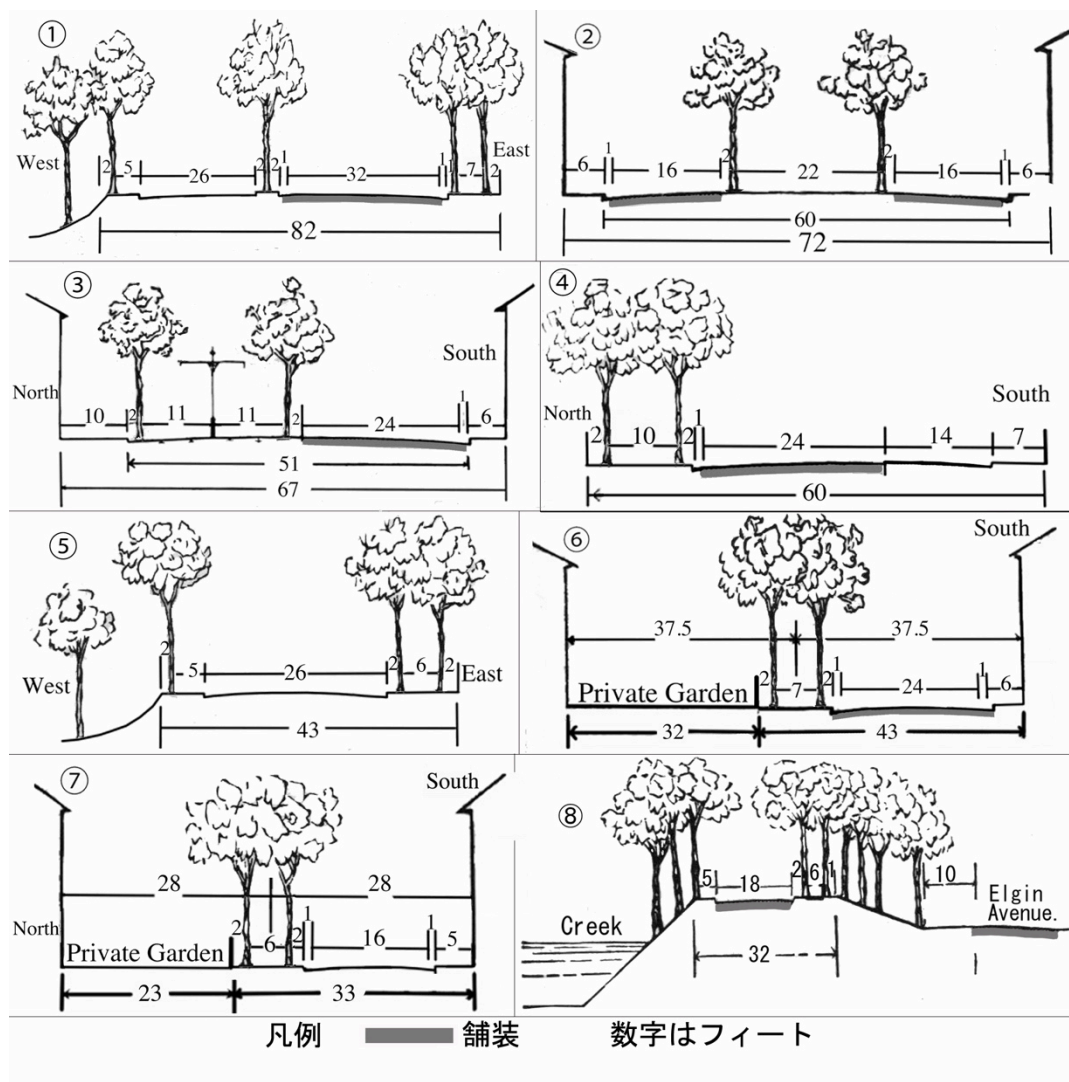


図 4-10 1917 年計画道路の種類 (1917 年の工部局年度報告により作成)

に位置し、そこからも推广界の中に放射線状に道路を延ばすことで既存の拡充界と直接連結することが図られていた。もう一本の③の道路は北へ延ばされ、フランス租界との境界に達している。これらの2本の③の道路によって推广界や英租界の他の部分、及びフランス租界への交通を確保しようとしたことが分かる。これらに加え、南東端の幅員 60 フィート (18.3m) 幅の④の馬場道と⑥の 43 フィート (13m) 幅の道路を主要な道路とし、また住宅地内には⑦の幅員 33 フィート (10m) の道路が計画された。図 4-10 の道路断面図を見ると、すべての道路に植樹が計画されていたことが分かる。②、③のように住宅が道路からセットバック、或は⑥、⑦のように住宅の南側に Private Garden を配置することで、住宅に良好な日当りを確保しようとしたと推測できる。この時点では樹種に関する記述はないが、天津の気候と図 4-10 の樹木の形状からは落葉樹を予想した設計であったと推測できる。それによって、夏には家屋への直射日光を遮り、冬には十分日光を取り込めるように設計する意図があったと推測できる。また③、④、⑥、⑦のように東西方向の道路において、道路の北側にのみ街路樹を配置することで、樹木に日光をよく当てて、成長を促し、さらに、早期に街路樹を植えることで、道路の境界を明示する目的もあったと考えられる³⁰⁾。さらに、①～⑦の道路では植樹列の間には歩道を計画し、夏には木陰に覆われ、冬には日の当たる歩行者道を計画したと推測できる。しかし、④の馬場道についての写真 4-1 を見ると、図 4-10 のような設計ではなく、実際にはこの計画案通りには開発はされなかったが、並木等による緑化は行われたことがわかる。



写真 4-1 馬場道の緑化

(1927 年の工部局年度報告に所収)

さて、先述のように、1925 年までに推广界の設計が一部変更され、道路設計についても変更が確認できる。図 4-9³¹⁾と図 4-8 を比較すると、大まかな道路の形状は同じだが、図 4-9 の①の Hai Kuan Ssu Road 側の道路と Recreation Ground 周辺の道路には若干の変更が見られる(破線枠 α で囲んだ部分)。また、Cumberland Road、Dumbarton Road、Glasgow Road (図 4-9 の②、③、④)の三本の道路は、Race Course Road から Derby Road (図 4-9 の⑤)までの区間は 1917 年の設計案のように、同心円状に伸びていたが、その先は直線状に変更されていた。さらに、Hai Kuan Ssu Road (幅員約 27m) から北に向かってフランス租界に通じる Derby Road (図 4-9 の⑤、同約 20m) が直線道路に変更された。この設計の変化によってフランス租界へのアクセスがより強化された。フランス租界は開設されてから英租界同様に西側へ

拡張されていたが、1916年の夏に図 4-11³²⁾ に示すように、老西開地区への強硬拡張を受け、フランス当局と天津の住民の間で大規模な闘争が発生し、それによって拡張は一時停滞したが、数年後からまた徐々に進行し、1931年には拡張を完成させた³³⁾。つまり、設計変更の背景にはフランス租界の拡張があったと考えられる。図 4-9 に示すように、推广界の周囲の境界となる道路は幅員が約 18m、

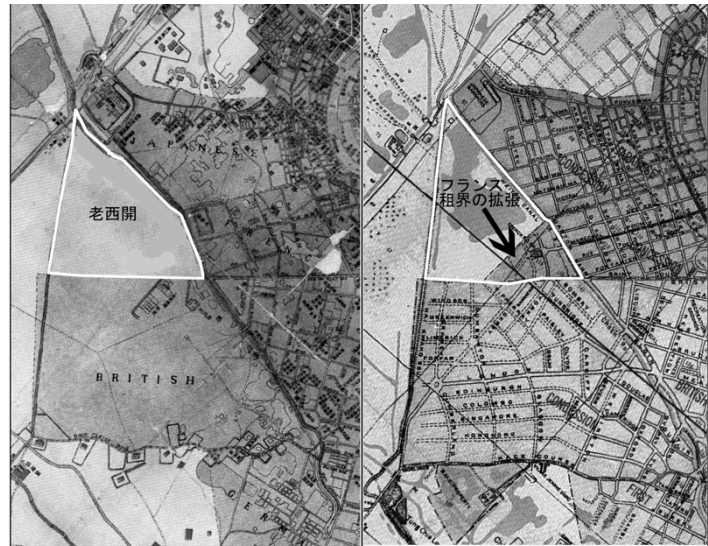


図 4-11 フランス租界の拡張、左 1919 年、右 1925～26 年天津地図（天津城市历史地图选编に所収の 1919 年及び 1925 年-1926 年地図を基に作成）

20m、27m と幅が広く、内部では幅が約 20m 以上の Derby Road と London Road が幹線道路となり、推广界を大きく ABC の 3 部分に分けていた。残りの道路の幅は大部分が約 13m で計画され、図 4-8 と比較すると⑥の道路のように周囲の道路幅との差がなくなり、幅員が均一化したことがわかる。もともと、Wei Tzu Creek に近い東側の道路は約 15m と、若干幅が広がっている³⁴⁾。この部分は 1919 年に最も早く埋め立てられた部分で、道路の造成も早く行われたが、その後は道路幅を狭く調整したのであろう。

また、当初は図 4-8 に示すようにフランス租界の市街電車軌道を延長し、英租界の扩充界と推广界を通り、英租界全体を連結するように設計されていた。これによって一定の公共交通も確保しようとしていた。計画された路線は二つの市場を結び、利便性を考慮していたが、結局 London Road より南には延ばされなかった。しかも、この市街電車計画は最終的に実行されることはなく、英租界に市街電車は開通しなかった³⁵⁾。また図 4-8 の円で囲んだ部分が示すように道路の途中には街路を膨らませた形態のスペースの設計、或は道路を意図的に雁行させるような仕掛けが見られる。これらは道路の装飾や、アイストップの役割を果たす効果を期待し、景観美を重視した設計だったかと推測される。しかし、1925 年の地図ではこれらは確認できず、道路の単純化・直線化が計られ、実現されなかったとみられる。

第 4 項 街区の形成

1917 年の当初案において、推广界の街区の形状はそれまでの英租界にあったような奥行の深い長方形ではなく、その多くは相対的に奥行の浅い長方形に設計された。

これは住宅敷地の分割をし易いよう考慮したからと考えられる。その後 1925 年の実施案では道路計画などの変更がなされ、それに伴って街区の構成にも変化が生じた。

1917 年の当初案では 88 の街区となっていたが、1925 年の実施案では 78 に減っており、推广界の総面積は変わっていないので、一街区の平均面積は大きくなった。形成された 78 の街区（図 4-9 中に街区番号を記す）について規模³⁶⁾を見ると、平均面積は 24,792 m²（周長 653m）であり、最大面積は 52,343 m²（同周長 1,050m）で、最小面積は 3,604 m²（同周長 246m）である。最大のものは図 4-9 中の 24 番であり、推广界の南端に位置していた。最小のものは図 4-9 の 53 番であり、フランス租界との境界にある三角形の街区である。小さい街区としては 41、43、64、65 番のように TC の近くや Derby Road に接している部分にも見られ、三角形の街区である。

図 4-12 に示すように街区の規模は全体的にばらつきが大きく、一定規模ではない。図 4-9 及び図 4-13 に示すように幹線道路によって ABC の 3 部分に分けてみると、London Road を境に推广界南部の A 区域は表 4-1 のように街区の平均面積が最も広い。1925 年の時点ではある程度街区内の敷地を分割し、宅地の分譲販売や賃貸が行われていたが、地盤の埋め立て状況などから判断すると、推广界全体では街区の分割はまだ途中段階であり、最終的な宅地割りを図 4-3 が示しているとは考えられない。1919 年に埋め立てが完成され、一部は既に建築が建てられた区域（図 4-9 の γ 及び図 4-14）では、宅地割りが完成していた。その区域の全 16 の街区において、宅地は 87 筆であり、一街区平均で 5.8 の宅地に分割されていた。平均宅地面積は 3,768 m²であり、非常に広い。一宅地に建物一棟のみではないが、図 4-14 に示すように、

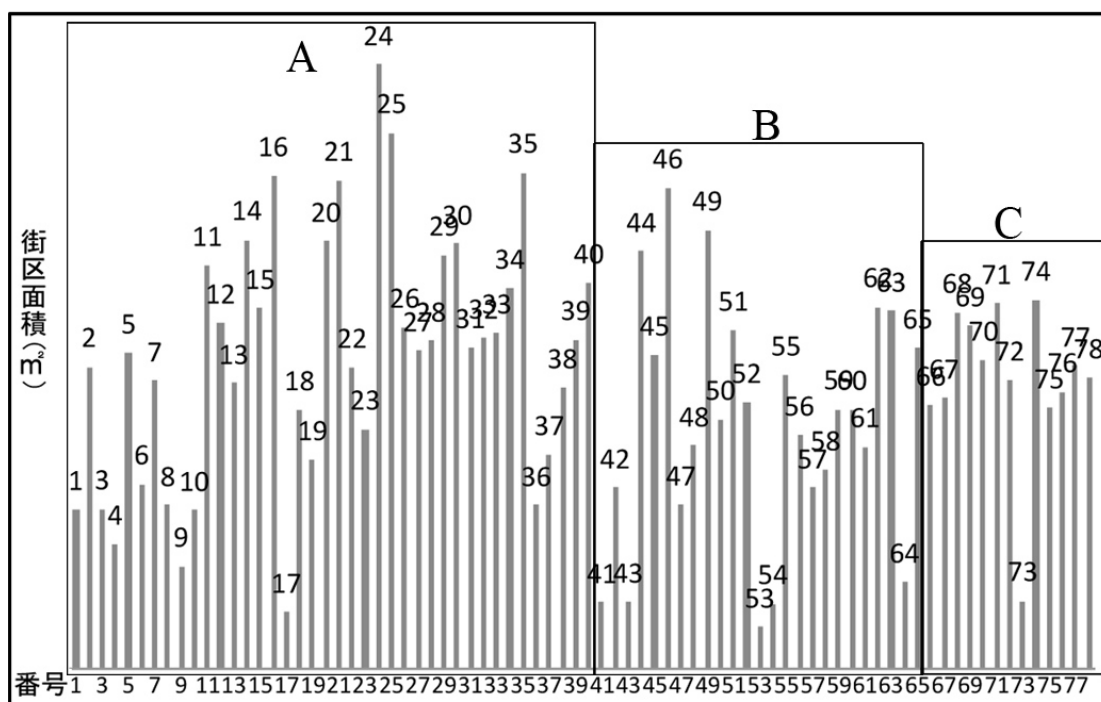


図 4-12 街区面積

相当余裕のある敷地割りになっており、第3節第1項のⅣとⅤを十分満たしたと考えられる。

街区の形状と方向について、A区域では大部分の街区と、B区域では一部の街区において、図4-15の14番、27番、49番、50番のように、比較的統一性のある東西に細長く、奥行きが浅い長方形の街区となっている。これは第3節第1項に従

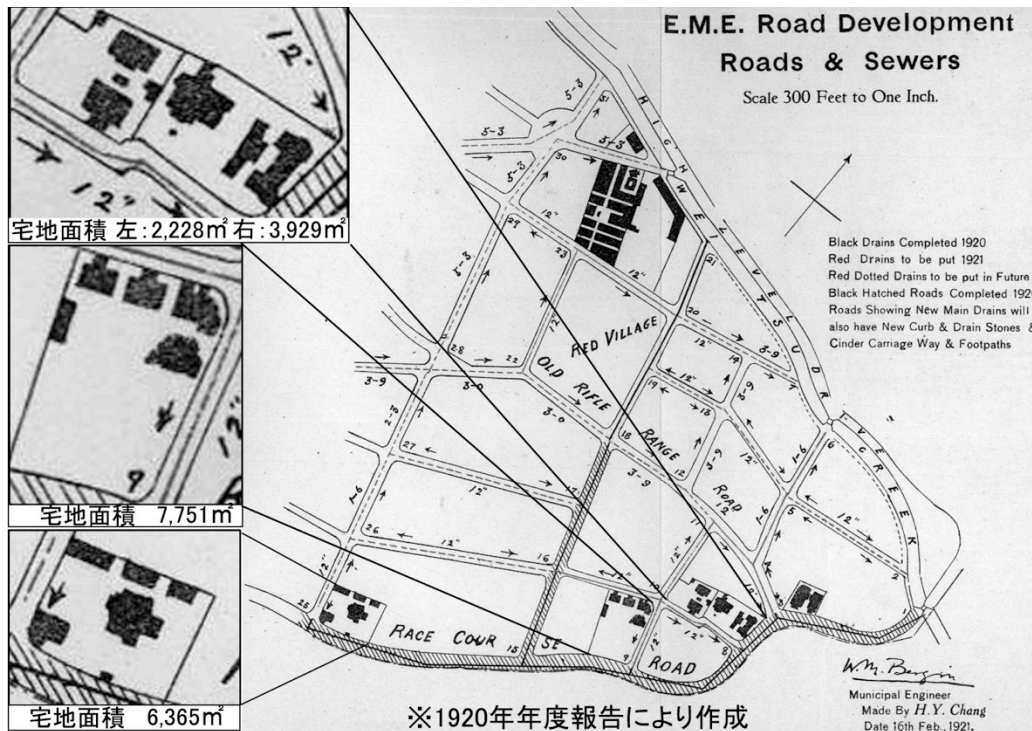
い、東西方向の道路を多く配置することで、南北に奥行きが浅い街区を造り、宅地の間口が南向きになることを可能にしている。また14番や49番のように背割りを入れても家屋が南を向くことができた。図4-9のγの部分の街区は図4-15の3番のように、馬場道とWei Tzu Creekにより空間が制限されたため、形状の不規則な街区が

表 4-1 各区域の平均街区面積

	推広界全体	A	B	C
平均面積(m ²)	24,792	26,999	21,102	25,098



図 4-13 ABC 区域 (Tientsin: An Illustrated Outline History 中の図を基に作成)



※1920年年度報告により作成
図 4-14 街区、宅地及び建物の状態

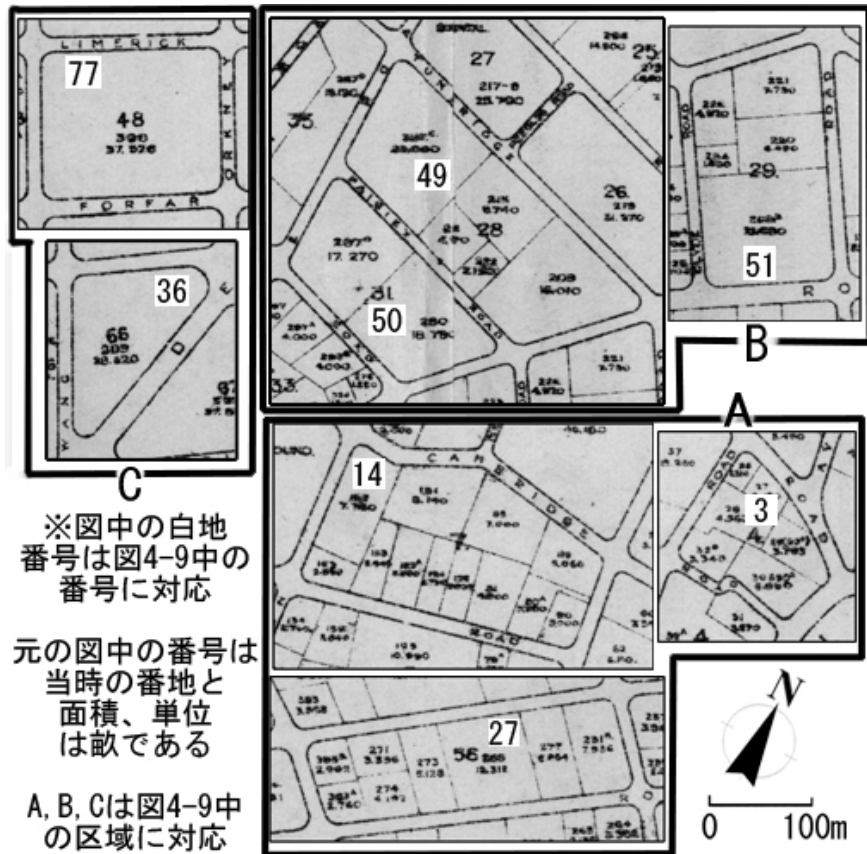


図 4-15 A、B、C 区域における街区例

(Tientsin: An Illustrated Outline History 中の図を基に作成)

見られる。方位はほぼ正確に東西南北に合っているが、A 区域の残りの街区は第 3 節第 1 項の II に対応し、比較的自由的な方向をとった。B 区域では図 4-15 の 51 番のように A 区域同様細長い長方形の街区も見られるが、方位のばらつきは大きい。C 区域ではほとんどが統一した方位を向いているが、図 4-15 の 77 番のように多くの街区は奥行が深く、また図 4-15 の 36 番のように推广界を斜めに分断する Derby Road 付近では三角形の街区が多く見られ、土地の分割開発がし難くなり、また敷地が形成されたときの方位が不規則なものになったと推定される。

第 4 節 推广界における施設建設

第 1 項 推广界における公共施設の開発

1. オープンスペース

1917 年の当初案の計画意図において、第 3 節第 1 項の IV に見られるようにオープンスペースの創出も重視されていた。それを踏まえ、1917 年の設計図では推广界に大小 4 つの公園が計画され、さらに、南側の区域のほぼ中央部に Recreation Ground

が計画された（図 4-8）。1925 年には Recreation Ground が計画されたが、その形状はより使いやすい長方形に変更された（図 4-9 の R.G.）。そこへ向かうアクセスをスムーズにするため、その周辺の道路にも変化が見られる（図 4-9 の破線枠 β）。北側の正面に道路が集中するように設計が変更され、小さな広場となっている。公園としては 1925 年の実施案で確認できたのは図 4-9 の i、Jubilee Park 一つのみであったが、1938 年には図 4-9 の ii の Queen's Park の整備が始まり、この 2 つの公園がつけられたことが確認できた。公園内には植栽がなされ、また、遊歩道、ベンチや公衆トイレなども整備された³⁷⁾。これによって豊かな環境が形成され、一定のオープンスペースは確保できたのである。

2. 発電所の新設

推广界は住宅地として計画されたため、原英租界や扩充界と比較して、公共建築の建設は少なかった。しかし、推广界の開発を促進するため、発電所の新設等の整備が行われた。図 4-16 に示すように、1922 年には付録の図 7 中 A の場所に発電所が新設された。これによって推广界への電力供給が十分行うことができるようになった。

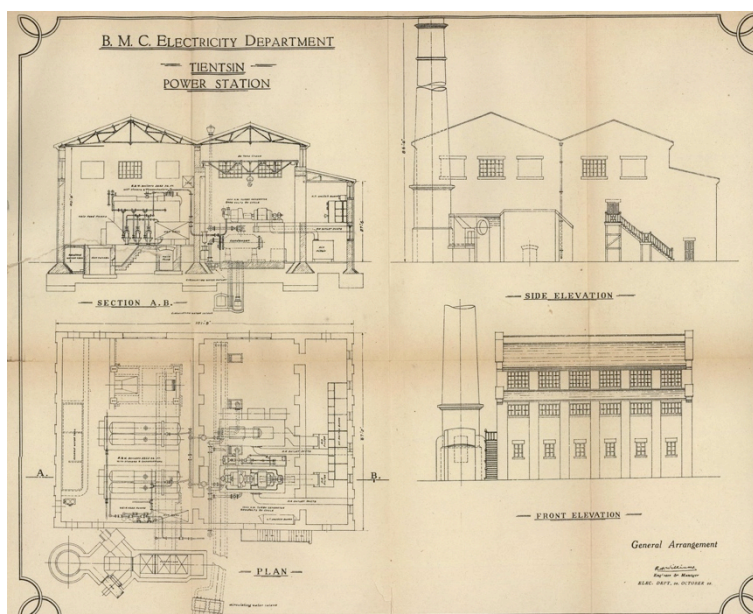


図 4-16 推广界の発電所

(1922 年の工部局年度報告に所収)

3. 学校の建設

住民が増加するにつれ、住宅に近接した学校等の建設の建設も行われた。例えば、1920 年、フランス領事の提案と天津の各教会との協力により、天津工商学院が Race Course Road で設立された。校舎は 1921 年に建設が始まり、1923 年には部分的に校舎が完成し、授業が始まった。同校は専科大学であり、工商学科と神学系があり、フランス語が主要な課程であった。教師の多くはフランス人の神父が担当し、学生のほとんどはキリスト教徒の子供と資産家の子弟であった。1926 年には全ての校舎が基本的に完成し、1933 年には学生が 600 人に達し、大規模な大学となった³⁸⁾。

第2項 推广界における企業・個人による開発

第3節第2項で論じたように、推广界の埋め立ては拡充界に近い方から順次行われた。それによって、埋め立てが完成次第、その区域に個人や企業が住宅建築の建設を行い、住宅地としての景観を形成していた。付録図1に示すように、1916年の推广界ではまだ埋め立てが行われておらず、唯一最南端の Race Course Road と Hai Kwang Ssu Road が交わる場所の付近に Dwelling House がいくつか建設されていただけだった。その場所は競馬場の近くにあり、推广界が開設される以前から競馬が行われていたため、いくつか宅地が先行的に造られていたものと推定される。このような状況は 1916 年～1920 年頃まで続いたが、1921 年以後、推广界での住宅等の開発が顕著に見られるようになった。1921 年の開発状況を見ると（付録図6）、拡充界に近い区域、特に Race Course Road 付近には多くの Dwelling House と Servant's Quarters が建てられたことがわかる。また、London Road の近くには Tenement House(賃貸集合住宅)も建てられていた。1922 年と 1925 年についても同様である。図 4-17-1 に示すように、1919 年に最初に埋め立てが完成した部分には多くの住宅が建設された。その多くが Dwelling House であり、写真 4-2（図 4-17-1 の a）³⁹⁾に示す

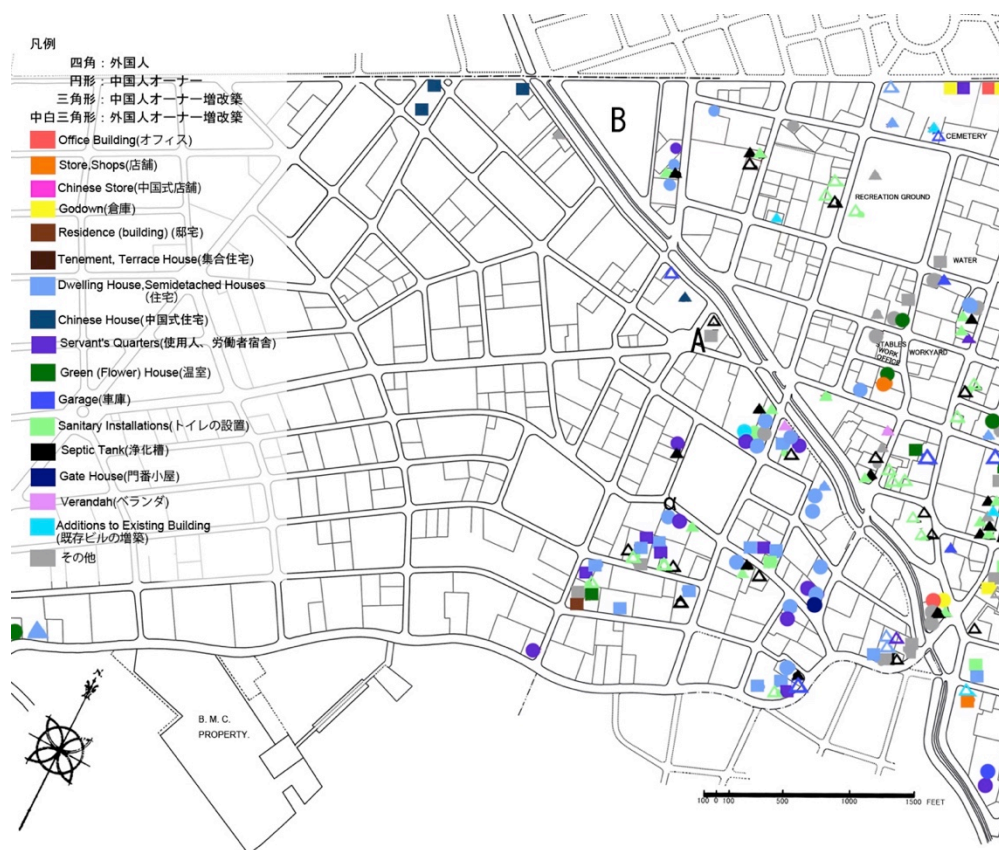


図 4-17-1 1922 年の推广界の建設状況
(1922 年の工部局年度報告により作成)

ように、これは一般の戸建住宅よりやや大規模な住宅である。当該建物は 1922 年に清朝宮内監小徳張によって建設され、1926 年に清慶親王が購入したものである。またそれと共に Servant's Quarters も建てられ、使用人も多く推广界に居住していたことがわかる。さらに、商業建築と住宅だけを抽出し、図 4-17-2 にその分布を示す。中国人、外国人オーナーの双方が推广界で住宅の開発を行っていた。それに対し、原英租界では商業施設の開発が行われ、拡充界では中国人オーナーによる住宅と商業施設の両方の開発が見られた。したがって、推广界が住宅地としての性質は鮮明であったことがわかる。

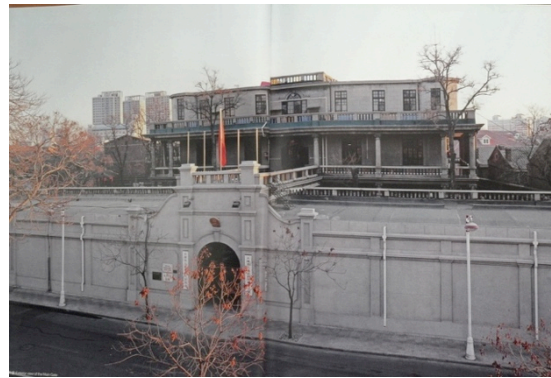


写真 4-2 慶王府
(天津歴史風貌建築に所収)

1925 年においては図 4-18 に示すように、推广界の London Road より北側でも開発が進行し、中でも多くの賃貸集合住宅が建てられたことがわかった。図 4-19 に 1919 年～1922 年及び 1925 年の推广界の新築建物の状況を示す。全体的に居住目的の建物の建設がほとんどだが、中国人オーナーと外国人オーナーによる開発は五分

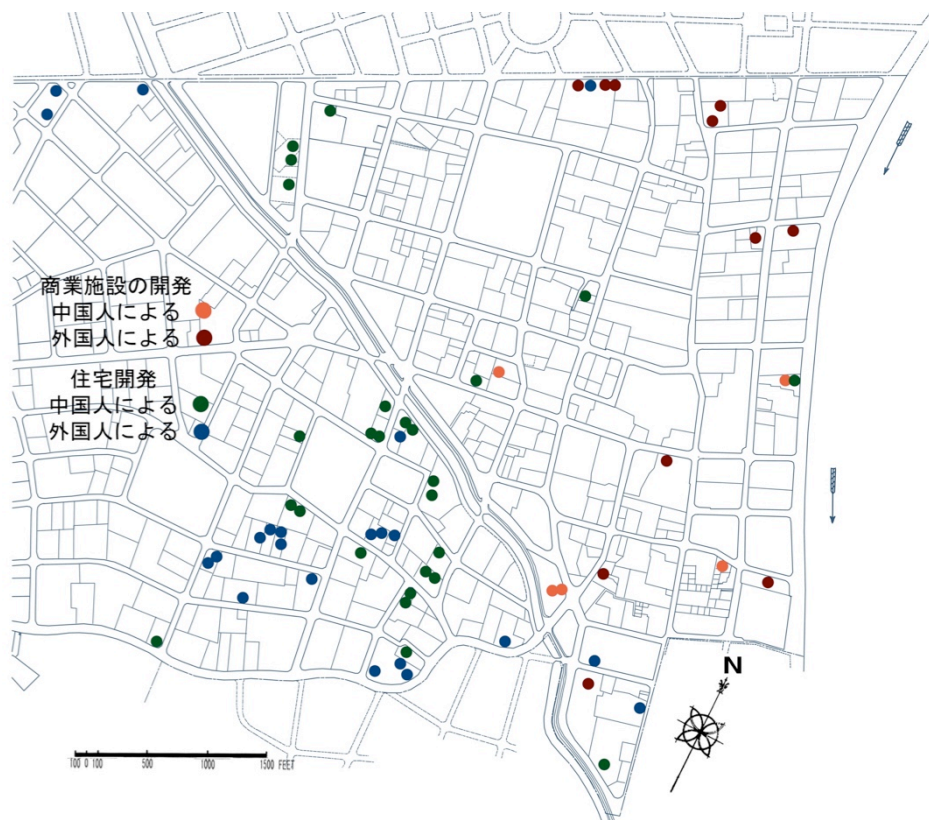


図 4-17-2 1922 年の推广界の建設状況の機能分布
(1922 年の工部局年度報告により作成)

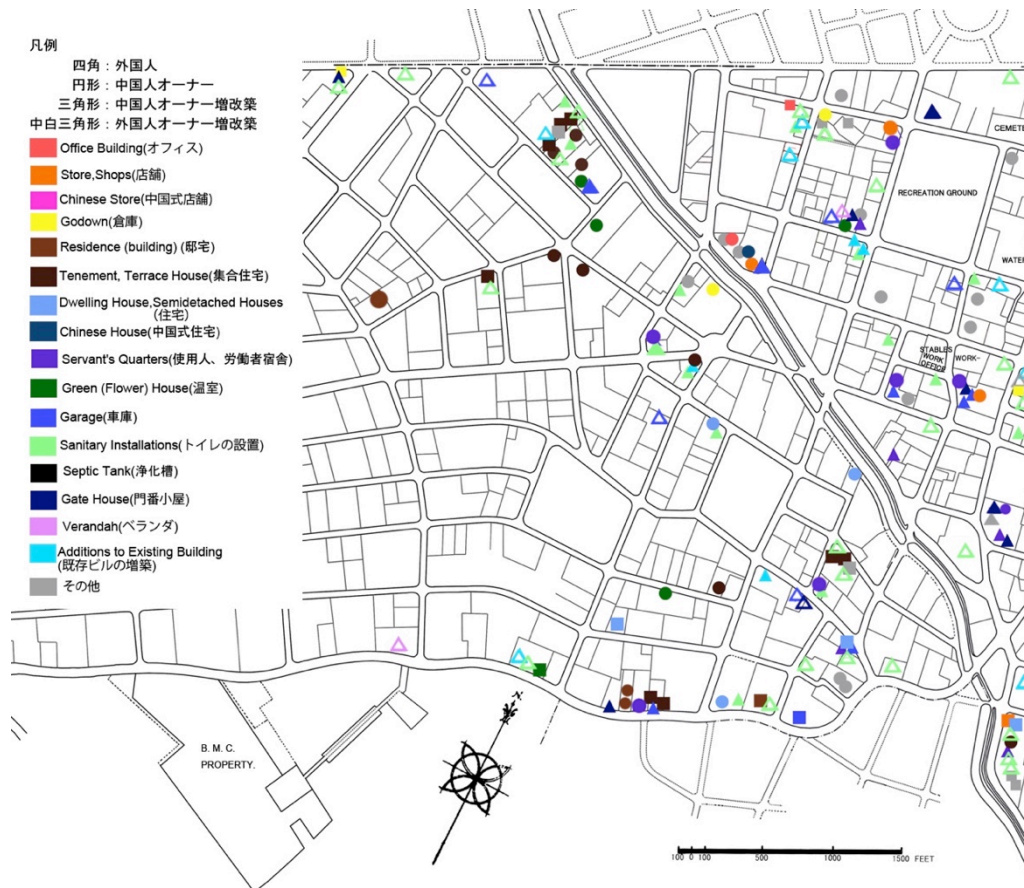


図 4-18 1925 年の推广界の建設状況
(1925 年の工部局年度報告により作成)

五分になっていた。特に Tenement House の数が最も多い。また多くが中国人オーナーによる建設であり、中国人が租界内において居住するだけでなく、不動産の開発と経営を行うこともより顕著に見られるようになった。

建物の一部新設、増改築に関しては図 4-20 に示すように、Garage の建設、Sanitary Installation 及び Septic Tank (浄化槽) の設置が多く見られた。Garage の建設は全体で 9 件確認でき、ある程度、自動車が普及していたと考えられる。また、増築による大規模化や、Gate House の建設も行われた。

特に、Sanitary Installation と Septic Tank の設置は多く見られる。それまでは手押し車等で排泄物を運搬していたのであるから、下水システムの充実したことを示している。下水処理について、推广界は埋め立てからの開発であったため、既存建物は少なく、当初から有利な条件を備えており、原英租界と拡充界は種々の不利な要素をもっていた。新しく開発した区域の排水と下水システムは以前からあった租界区域での工部局の経験を踏まえて、計画設置されたものである。それまで原英租界と拡充界では Septic Tank の設置は非強制的であったが、推广界の開発当初から設置が事業者には義務づけられた。下水システムには徐々に太くなる主管システムが含まれ、

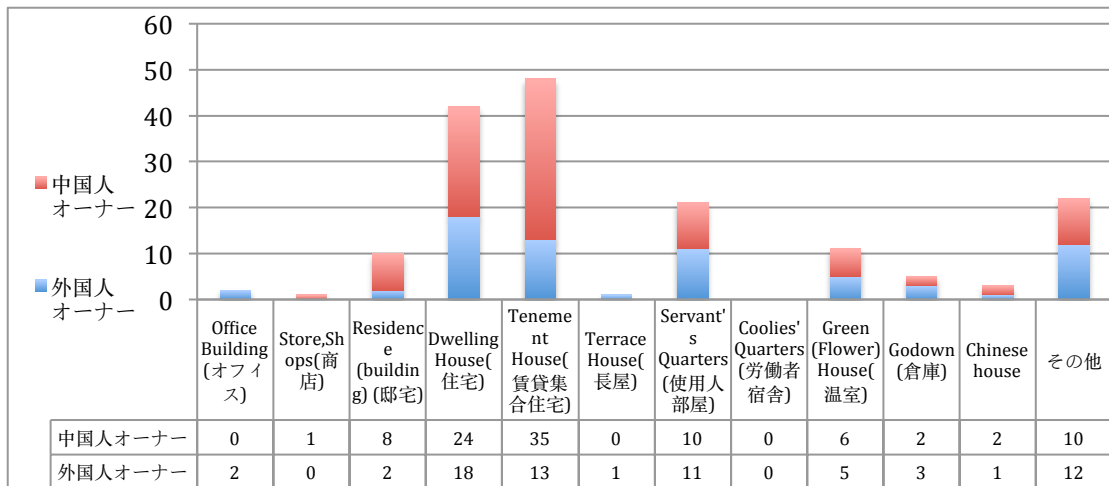


図 4-19 1919 年～1922 年及び 1925 年の推广界の新築
(1919 年～1922 年及び 1925 年年度報告により作成)

最も遠い海光寺付近の道路（推广界の最西端の Hai Kwang Ssu Road）から始まり、最初の直径は 12 インチであり、徐々に 18 インチ、27 インチに太さが増し、Wei Tze Creek の排出口付近の直径は 5、6 フィートに達した。浄化槽中の汚水と道路上の雨水は家屋に連結された配水管と道路上に埋設された排水溝を通して主管に流された。Wei Tze Creek に流入した汚水はすぐに海河に排出された。こうして推广界は華北地区における最も快適な住宅地となった⁴⁰。19 世紀では、Sir Edwin Chadwick の公共衛生と施策はイギリス社会に認められ、1865 年のロンドンでは 2 つの都市下水システムが整備され、マンチェスター、グラスゴー、さらにエジンバラでもそれぞれ下水システムが整備され、汚水処理が行われるようになっていた⁴¹。天津の英租界にお

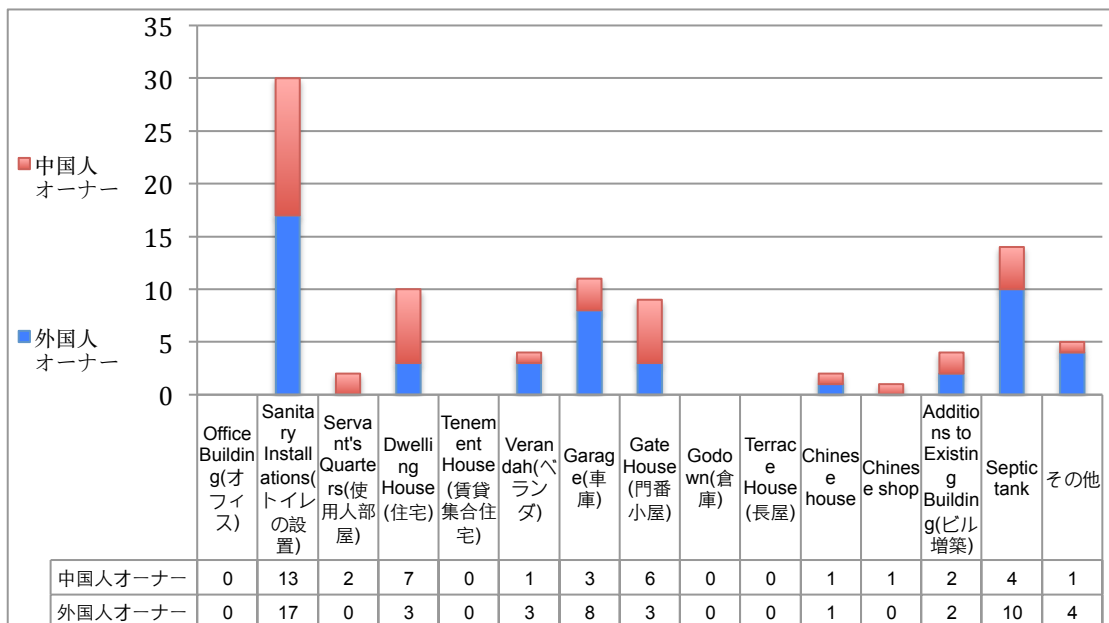


図 4-20 1919 年～1922 年及び 1925 年の推广界の建物一部新築、増改築
(1919 年～1922 年及び 1925 年年度報告により作成)

いて行われた下水システムの整備は本国のイギリスの動向とも関係していたと推測される。

第5節 原英租界と拡充界の変容と英租界全体の建設状況

第1項 原英租界の変容

ラスムセンの著書には次のように記述されている⁴²⁾。

But the Chinese, cunning in trade, soon found out that it answered their purpose better to charter steamers, and have consignments made to themselves directly, than to buy from the agents of the great houses; consequently, as the trade is entirely import, the Europeans are finding less and less to do.

このことから、外国によって持ち込まれた貿易等の経営システムは、中国の商人たちに迅速に取り入れられ、自分たちの手で貿易を行い、利益を上げていたことがわかる。20世紀に入ってからはこのような傾向はさらに顕著に見られるようになった。

原英租界では1917年以後も建物の大規模化が引き続き行われた。また、中国人による銀行等の商業建築の開発も進んだ。住宅等の建設に比べ、銀行等の商業施設の建設は膨大な資金を必要とするのであるから、中国人の租界に対する影響力も大きくなったと考えられる。以下に中国人による開発の状況について事例を挙げて説明を行う。

①中南銀行

中南銀行は1921年にインドネシアから帰国した華僑の黄奕柱が中国人の胡筆江と共同で、私営株式商業銀行として設立したものである。本店は上海であり、天津分行は1922年に開業した。写真4-3に示す建物は20世紀初頭にVictoria Roadに建設されたとされ、元は鉄筋コンクリート造の2階建てであり、地下室を備えていた。1938年には三階が増築された⁴³⁾。

②中国実業銀行

中国実業銀行は原英租界のフランス租界に近いConsular Roadに位置し、中国の実業家であった周学熙の提言によってつくられ、1919年4月に開業した。本店は天津で



写真4-3 中南銀行の建物（天津歴史風貌建築、公共建築第二巻に所収）

あった。設立時には株を発行し、北洋政府の指定により、長芦、東綱及び塩商人の投資を受けた。目的は周学熙がコントロールしていた灤州鈹務局、啓新洋灰公司、耀華硝子公司、華新紡績公司の中国系企業の資金の貯蓄と振替を行うことであった。写真 4-4 に示す建物は 1921 年に建設され、地下室を持った 2 階建ての平屋であった。



写真 4-4 中国実業銀行（天津歴史風貌建築、公共建築第二巻に所収）

第 2 項 拡充界の変容

拡充界においても、中国人、外国人の両方による開発が進められていたが、特に中国人による公共施設の建設が行われるようになった。

1927 年 6 月に莊楽峰、趙君達、馮仲文等の中国人によって、天津公学が設立された。第 3 章第 2 項で述べたように、英租界には Tientsin Grammar School が開設されていたが、中国人は入校できなかつた。そこで、当時英租界の董事であった莊楽峰等は工部局に抗議を行い、その後資金を集め、拡充界の Recreation Ground の東側にある Gordon Road 沿いに校舎を建設する許可を得た。初代校長には中国人である王紫紅が起用され、9 月に開校された。開校当初は初級小学校（小学低学年）のクラスだけの学校であった。生徒は 20 人弱、教職員は 4 人であった。その後の生徒人数の増加に従い、校舎のスペースは十分では無くなつた。1928 年 9 月に Recreation Ground の西側にある Recreation Road 沿いに移り、高級と初級の二級制になり、男女をクラス分けして授業を行った。

1930 年には拡充界の Reservoir（貯水池）の部分（付録の図 7 の B）が埋め立てられ、その場所に男女クラス別の中学の部を設立した。校舎は 1935 年に全て完成し（写真 4-5）、学校名を耀華学校に変更した⁴⁴。莊楽峰は 1930 年～1938 年まで董事会の副董事長を務めた有力者であった（第 2 節の図 4-1 に示す J.



写真 4-5 1934 年の耀華学校の校舎（1934 年年度報告に所収）

S. Chwang)⁴⁵⁾。当該学校が設立できたことは彼の力による部分が大きいことは言うまでもないが、中国人の就学に対する意欲があったことは間違いないであろう。

洋務運動においても、中国人に対する教育が行われたが、あくまでも軍事関係等の専門知識が主であり、小・中学校等のような基礎教育ではなかった。中国人による中国人向けの学校が建設されたことは、まさに低年齢から学校教育を受ける必要性が中国人にも浸透したことを示している。

第6節 小括

租界時代後期における推广界の開発について、当初の設計意図は第3節第1項のI～Vに示すように、良好な交通のアクセス、通風や採光に有利な住宅方位、衛生的な生活と洪水に対する防衛のための高低差のある地盤埋め立てと排水機能の整備、経済的な道路の幅員と充実したオープンスペース、十分に広い宅地の確保であった。これらは近代都市に必要な条件であり、当初の案からこれらを満すよう計画されたことが分かった。1917年に計画された明確な同心円状の道路や放射状の道路はヨーロッパのバロック式都市計画を彷彿とさせ、道幅を繊細に変えて、道路パターンの幾何学的な美しさを追及した審美的で、自己完結的な街区設計であった。1925年の実施案では大まかな街路網は当初案を踏襲し、同心円状の道路にも当初の名残が見られ、当該地区の特色の一つとなっている。しかし、変更された部分については、道路の単純化、直線化、また幅員の均一化が図られ、当初案よりさらに経済的で、より交通アクセスの良さと街区の使い易さを考慮した設計がなされた。つまり道路設計重視から街区設計重視に変わり、より機能性の強いものとなったのである。最終的に形成された街区規模は大きく、それによって宅地規模も大きくなり、空地の確保や通風、採光等を十分確保できる広さがあった。また街区の形状と方位については、A、B、Cの三つの区域において、A区域、すなわち後の五大道に相当する区域が最も当初の設計意図を満たしており、後に多くの上流階級の人士がこの区域に邸宅を構える要因の一つとなったと考えられる。このほか、地盤埋め立ての高さやオープンスペースについても一部が変更され、完全に1917年の設計案を実施することはなかったが、基本的には当初の設計意図を満たしていたことがわかった。それによって、推广界では高質な郊外住宅地（五大道地区）が確立すると共に、全体として機能性を追求した設計が行われた。

推广界では、住宅を中心とした建設事業が行われた。中でも Dwelling House のような上流階級が居住する住宅だけではなく Tenement House、そして Servant's Quarters のように使用人の宿舎等、集合住宅も多く建設されたことがわかった。また、

トイレと浄化槽の設置によって、衛生面も向上し、近代的で高質な郊外住宅地を形成した。

租界時代後期では董事会の中国人メンバーが増え、半数を占めることができた。また、英租界全体において、公・私に関わらず、中国人による開発が盛んに行われるようになった。原英租界では中国人によって銀行を始めとする商業経営用の大規模な建物が建設され、拡充界では学校が設立された。推广界では事業主が居住する目的だけではなく、アパートを複数建設して不動産経営を行う等、中国の上流階級の人口が租界内への流入が起っていた。彼らは居住するだけではなく、租界を通して、近代的な市場原理をも把握し、活用しようとしたこともわかった。

租界時代後期では推广界が開発され、それによって郊外住宅地が出現し、英租界全体の近代都市としての特徴が鮮明になった。その中で、都市の近代化が進展するとともに、原英租界を含めて、英租界全体への中国人の関与が深まった。租界時代前・中期の英租界は英国人等の外国人のため都市空間であったが、租界時代後期になると、英租界全体は中国人のための都市空間にもなっていたことがわかった。

注：

- 1)天津市地方志編修委員会編著:天津通志·附志·租界,1996,天津社会科学院出版社、p.185
- 2)O.D.Rasmussen: The Growth of Tientsin, 1924, The Tientsin Press, Ltd. p.6
- 3)推广界のことを指す。
- 4) 2006年に国務院によって制定された天津総体計画において、天津市は国際港口都市、北方経済中心、生態都市として位置づけられた。その後、天津及び各区政府は生態住宅地区の開発を推進してきた。
- 5)天津市规划局編著:天津城市历史地图选编, 2008, 天津古籍出版社、pp.82-83の1913年の天津地図では推广界に格子状の道路が破線で描かれており、仮の計画であると思われる。また天津市规划局編著 (2008) pp.84-85の1917年の地図では、推广界にいくつかの湿地と小道が確認でき、施設としては馬場道の近くに宅地が確認できることと、北側に英国兵舎があることは確認できる。しかし、大部分は空地であり、開発はされていない。
- 6)天津市地方志編修委員会編著 (1996)、p39
- 7)天津市地方志編修委員会編著 (1996)、pp.81-82及び1938年年度報告 pp.12-14
- 8)天津英租界第十次常年選挙大会董事長楊嘉立君演説詩既提出修正地亩章程議案,p5
- 9)天津市地方志編修委員会編著 (1996)、pp.81-82
- 10)天津英租界第十次常年選挙大会董事長楊嘉立君演説詩既提出修正地亩章程議案,pp.4-7
- 11)1938年工部局年度報告 p.14により作成、中国人は名前から判断した。
- 12)天津市地方志編修委員会編著 (1996)、pp.81-82
- 13)天津日報伝媒集団編：天津小洋楼名人故居完全档案（第一卷），天津教育出版社，2011、p.70
- 14)1917年工部局年度報告に所収。
- 15) Dictionary of Scottish Architects
(http://www.scottisharchitects.org.uk/architect_full.php?id=207644)
によると、Henry McClure Andersonは1877年エジンバラ生まれ、その後の学歴については不明であるが、1910年の国勢調査ではエジンバラのオフィスで製図技術者として働いていた。その後結婚し、1925年に天津に移住した。Edwin Cookと共同でCook & Andersonを創設、オフィスはVictoria Street 142にあった。Andersonは1942年8月、65歳、天津の米英ナースホームで逝去。
- 16)1917年工部局年度報告中の設計意図の原文を示す。
I To secure direct access from every part of the settlement to every other part with ample provision for through traffic from all directions taking into concession not merely the whole of the British Concession but also the adjoining concessions and the general surroundings. The nearer a residential

district, such as the E.M.A. is likely to become, can be brought to the business centres in this way the more readily it will be developed.

II To obtain by carefully planning the general direction of the minor streets, which the greater part of the residential property will face, the advantage of direct sunlight at some time of the day on each of the four sides of the buildings with the consequent gain in ventilation and healthy conditions. This consideration involves the avoidance of direct north and south or east and west in setting out the building blocks. Preference is given to the latter general direction of the roads to gain as much southerly aspect as possible for the prospective houses.

III To provide for adequate drainage and security from flooding. In the E.M.A. this is best done by raising the general level to at least 18.50 Taku Datum or six inches above the normal level of the Bund coping. This level is three feet above the flood level attained last autumn and it would secure natural drainage of the whole area into the Wei Tze Creek.

IV To adjust the widths of the roads to the traffic requirements. This is an economic point which calls for very careful consideration. It is suggested that, while, main thoroughfares should be wide and ample, unnecessary width in residential streets, where no through traffic has to be provided for, is wasteful and will retard development by increasing the rental of the property without giving a corresponding benefit. The economic loss is represented by increased municipal outlay for paving and maintenance and by the greater area withdrawn from the building land to supply the needless street space. Considerations of light, air and recreation can be satisfied more economically and to the greater benefit of the inhabitants by the provision of more open space about the houses and by public gardens. It is an essential part of this proposal that the space between the frontage lines of the houses be ample.

V To determine the exact road lines so as to give opportunity for architectural expression in the grouping and massing of buildings within the fairly wide limits which would satisfy the above practical considerations.

17)原文では E.M.A.と記され、Extra Mural Area を略したものであり、E.M.E.と記されることもある。推广界の事を指す。

18) O.D.Rasmussen: *Tientsin: An Illustrated Outline History*, 1925, The Tientsin Press, Ltd. に所収。

19)工部局年度報告 1917 年, p.6, pp.39-61,pp.72-81 において 1917 年の洪水の被害状況及び当時の緊急対応の様子を詳細に記録していた。また、天津市档案局によって 2003 年に作られた天津档案网によれば、天津は 1653、1654、1668、1801、1871、1890、1917、1939 年には洪水に襲われ、大きな被害が出ていた。

(http://www.tjdag.gov.cn/tjdag/wwwroot/root/template/main/ztda_list.shtml?id=10)

20)楊貴壘:天津市地面沉降測量高程基准点穩定性分析,測繪科学,1993 年 04 期

- 21) 清朝の候補道台（役職、道台は中級地方官庁の長官で、候補道台はその候補或は補佐であると思われる）黄蔭芬は Wei Tzu Creek の推广界側、Creek Road と Shannon Road の交差点付近一帯に土地を所有し、家屋や庭園を造っていた。そこは天津で黄家花園と呼ばれ、近年まで地名として存在していた。他の個人による開発は確認できないが、工部局が推广界を全体開発するまでも部分的な開発はあったと考えられ、地権者が存在していた。反対の理由として挙げられていたのは、地盤を上げるのに必要な資金と計画案の必要高さに対する懐疑であった（天津市和平区政務ホームページ
<http://www.tjhp.gov.cn/servlet/ContentServer?pagename=tjhp/Page/homepage-1>）。
- 22) 天津市地方志編修委員会編著（1996）、p.163
- 23) 1919年工部局年度報告 pp.124-125, 1920年工部局年度報告 pp.66-67, 1921年工部局年度報告 pp.88-89, 1922年工部局年度報告 pp.88-89, 1925年工部局年度報告 pp.56, 1929年工部局年度報告 p.46, 1931年工部局年度報告 pp.14, 1932年工部局年度報告 p.24, 1933年工部局年度報告 p.15, 1934年工部局年度報告 p.15, 1935年工部局年度報告 p.19, 及び各報告書に収録されている埋め立ての図による。
- 24) 1919年工部局年度報告による。
- 25) O.D.Rasmussen (1925) に収録されている図、また 1921、1922年工部局年度報告に収録されている図及び、年度報告の 1925年工部局年度報告 p.60, 1927年工部局年度報告 p.35, 1929年工部局年度報告 p.45, 1931年工部局年度報告 p.13, 1932年工部局年度報告 p.23, 1933年工部局年度報告 p.17, 1934年工部局年度報告 pp.16-17, 1935年工部局年度報告 p.19, 1937年工部局年度報告 p.41, 1938年工部局年度報告 p.21 を基に作成。1923年の年度報告は欠如しているため、図中破線部の配備状況は確認できないが、以後の他の部分の配備は順調に進められたことから、1923年部分も計画通り実施したと推測できる。
- 26) 第 2、3 章及び藤森照信、汪垣:全調査東アジア近代の都市と建築,1996,筑摩書房 pp.230-243 による。原英租界には横浜正金銀行、中南銀行等多数の銀行やオフィス、扩充界にはアングリカン教会や平安映画館等の公共施設が建てられていた。
- 27) 1917年工部局年度報告に所収。
- 28) 1917年工部局年度報告に所収の図をもとに作成。
- 29) 1917年工部局年度報告 pp.84-92 を基に作成。
- 30) 1917年工部局年度報告 p.87 の記述による。
- 31) O.D.Rasmussen (1925)中の図を基に作成。
- 32) 1919年及び 1925年～1926年天津地図を基に作成。
- 33) 天津市地方志編修委員会編著（1996）、pp.44-45
- 34) 1925年の道路幅については年度報告など文献では確認できなかったため、現存する道路を測量したものを採用している。1917年の設計に対応するため、歩道を含めた幅員を取っ

ている。天津市規劃局によれば租界の返還後、道路の拡幅は部分的に若干行われていると思われるが、記録が残っていない。ここでは極力道路両側が租界時代の建築が残っている箇所を測量し、その道路の幅員としている。

35)天津市地方志編修委員会編著 (1996)、pp.320-321 による。天津は市街電鉄が造られた最も早い都市である。1904年にベルギーによって電車電灯会社が造られ、その後、1906～1927年まで次々と7種類の路線ができたが、何れも英租界を通らなかった。

36) O.D.Rasmussen (1925) に所収されている図に記された面積と、読み取りにくい部分は現地調査による測量で確認した。

37)工部局年度報告 1938 p.24 による。

38)天津市地方志編修委員会編著 (1996)、p.347

39) 1922年工部局年度報告 p.86 Plan Nos.29、及び、吳延龍主編：天津市歴史風貌建築保護委員会、天津市国土資源和房屋管理局、天津歴史風貌建築、居住建築第二卷、2010、天津大学出版社、p.2 による。工部局年度報告には Dwelling House と示され、また場所及び建築年代と天津歴史風貌建築に示す情報と照合し、ほぼ一致することから当該建築の写真として使用した。

40) O.D.Rasmussen (1924), P.9

41)蔣浙安：查德維克与近代英国公共衛生立法及改革,安徽大学学报 2005,3

42) O.D.Rasmussen (1925), P.44

43)吳延龍主編 (2010)、p.42

44)天津市地方志編修委員会編著 (1996)、p.356

45)天津英國租界選舉人一九三六年四月十五日下午三時半在戈登教堂舉行常年大會記錄の p.1 において 1936年の副董事長は莊樂峰であったと記述されているため、図 4-1 に示す J.S.Chwang は莊樂峰の別名であると考えられる。

第5章 結論

本稿では、中国で最大規模の港湾都市である天津が、近代において租界が設けられた事を通して、条約開港都市として繁栄し、さらに近代都市へと変貌していく過程について、英租界を例として議論を進めてきた。その結果、租界時代前・中・後期において、それぞれ原英租界、拡充界、推广界のように英租界が開発・拡張されるに従い、異なる設計者によって、都市の発展段階に相応しい設計と開発が行われていたことが判明した。さらに、英租界董事会のメンバーや、開発の主体における中国人の割合が異なり、この時期区分によって、各時期における英租界に対する中国人の関与に差異が生じていたことも明らかになった。

本章の第1節では各時期における英租界の開発の意図的、機能的、そして社会的側面に分け、英租界の開発の全貌を論じる。その上で、天津の他の租界、そして中国の他の条約開港都市と比較しながら天津英租界の普遍性と特異性を論述する。第2節の考察では英租界の周辺の変化と内部要素の変化に注目しながら、現地の地域社会との相互関係を考察する。

第1節 英租界の開発の全貌

第1項 英租界の拡張と設計意図

原英租界は天津城からやや離れた南東に設けられた。このことが天津における租界時代の幕開けとなった。租界時代前期では原英租界がローヤル工兵であったゴードンによって設計され、それは多くの条約開港都市で見られた設計手法であった。特に河川と平行にメインストリートと長方形の街区を配置することは、東西南北に厳密に従い、碁盤目状に街路が配置される伝統的な中国の街区設計には見られないものである。このことによって、天津の外国支配による開港場であるとの位置づけを明確になった。

これに対し、拡充界は原英租界の内陸部へのスプロールを受ける形で開発が進んだため、計画的な設計は行われなかった。このことによって、その道路は従来の道路に従い、現在においても原英租界との境界である Tuku Road と交わる道路は T 字状の交差点をなしている。

推广界では、広大な土地に、建築デザイナーであるアンダーソンの明確な設計意図をもった計画がなされた。地盤の埋め立てからの開発であり、白紙からの都市設計を行うことができたことで、最も設計者の設計意図に合致した開発ができたと考えられる。最終的に完成された天津の英租界推广界のような近代性の強い先駆的な計画は近代中国の他の租界にも見られ、当時の中国政府も積極的に取り入れていた。

特に、異なる道路幅を持つ道路網の計画、長方形街区割りと放射状道路とを併用した街区構造は広州の黄埔港計画や大上海計画にも見られた¹⁾。天津においても後の都市計画に対して模範的な街区として影響を与えたと推測される。

このように、初期の都市構造は規模、立地等の異なる環境要因に影響され、さらに、設計の時期、デザイナーの違いによって地区により大きく異なるものとなった。特に、当初の港湾空間の設計から最終的には近代都市の設計へと変化し、特徴ある都市構造を創出したことに注目しておきたい。

第2項 英租界の拡張と近代性

都市の拡大によって、都市機能を担う施設が、その機能によって立地が徐々に分離し、結果として、商業地、公共空間、郊外住宅地といったようにゾーニングが形成される現象は都市の近代化の大きな特徴である。租界時代前期の原英租界では交易を目的とする洋行等が立地し、港としての機能を保持して交易を行うという植民都市の初期段階の特徴が強かった。それによって、商業中心地を形成したが、商業施設だけではなく、倉庫や家屋もと混在していた。租界時代中期に開発された拡充界では、近代都市のシステムを形成するために不可欠な種々の公共公益施設が建設され、公共性の高い空間が形成された。租界時代後期に開発された推广界では住宅を中心に建設が行われ、高質な郊外住宅地として形成された。「近代とは延々とつづく郊外である」と定義されるように²⁾、郊外住宅地の出現によって、英租界は単なる植民都市ではなくなり、近代都市の特徴を保持したことをより明確なものにしたのである。また、20世紀の初頭は欧米においても都市計画に対する注目度が増し、いくつかの革新的な理論、理念が提示された時代である。その影響が英租界の下水システム整備にも見られ、都市衛生が改善され、近代都市区間が形成されたのである。したがって、英租界の開設は天津にとって、開港場であるだけではなく、近代都市化という新たな歴史の幕開けでもあったと言える。

第3項 英租界の拡張と地域社会への定着

租界時代前期に原英租界が開設され、開発の主体や管理運営の全てにおいて、中国人の関与はほとんどなく、英国人を中心とした外国人のための都市空間が形成されていた。租界時代中期になると中国人が拡充界の董事を担当することがみられ、また中国人による開発も見られた。租界時代後期には中国人が租界の中に入り込み、董事会のメンバーや中国人による開発を盛んに行うようになった。つまり、英租界という、当初は外国人のための都市空間が、時期の遷り変わりと共に拡張されていく過程で、中国人の関与が強くなり、中国人による中国人のための都市開発としての性質が色濃くなっていた。このことは当時の中国人が租界空間に対する位置

づけにも表れていた。天津は1928年に特別市に指定され、国民政府の直轄となった。南京の首都計画の影響を受け、天津特別市政府は1930年に『天津特別市物質設計方案』の公開設計競技を行い、梁思成と張鋭の共同提案が一等を獲得した。当該案には区域範囲、道路系統、ゾーニング、バス路線、街灯・電気配線、公園、建物、空港、船つき場、上下水道、路面及びごみの処理等について総合的な計画が含まれていた（図5-1）。最大の特徴は租界を避けて新しい区域で開発を行わないにあった³⁾。逆に租界の計画経験を踏まえ、外国の近代の都市計画理念と方法を多く吸収していた点であった。例えば、生活と産業地域の区劃分割、異なる道路系統の計画（図5-2）等は英租界の設計にも見られたものであった。残念ながら当該案は最終的に実施されることはなかった。それでも、英租界を含めた租界空間の価値は、天津の地域社会によって積極的に認識され、中国人の都市として捉えようとしていたことがわかる。

以上からわかるように、英租界は単なる外国人だけのための都市空間ではなく、同時に当時の中国人のための都市空間にもなっており、現地の地域社会へ定着したのである。

第4項 天津英租界の一般性と特異性

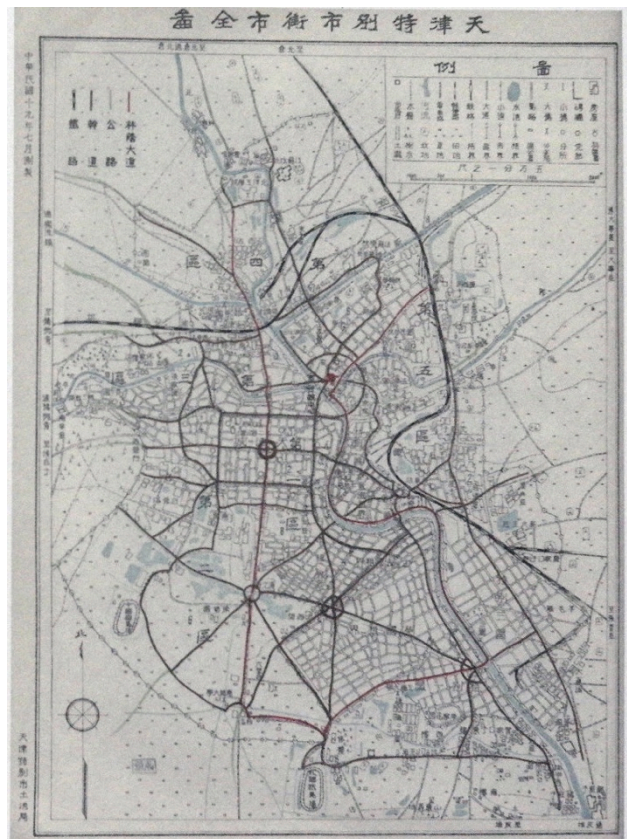


図5-1 梁思成と張鋭の計画案
(図説 近代天津城市規劃に所収)

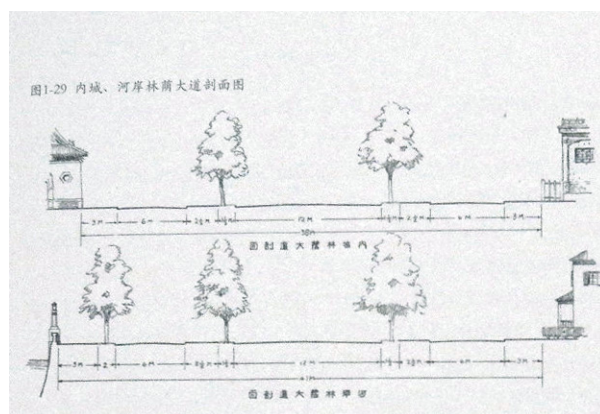


図5-2 梁思成と張鋭の計画案の道路断面
図（図説 近代天津城市規劃に所収）

天津の英租界に見られたように、まず、河川に沿って租界を設け、グリッド状の道路網を計画し、港の機能を確保した交易重視の都市設計は多くの条約開港都市に見られる手法である。そこに洋行等の商業施設が立地し、商業中心地を形成することは天津の他の租界にも見られた。写真 5-1 に示すように、フランス租界においても、海河に面して多くの洋行が建ち並んでいた様子を見てとれる。その商業中心地を起点にして、租界空間を拡張させ、それによって都市機能が分離し、近代都市を形成する。例えば、日本租界においても図 5-3⁴⁾に示すように、海河に面した区域に倉庫地域と商業区域を計画し、内陸に向かうに従い、工業地域や住宅地域を設けたことが分かる。したがって、英租界の開発には普遍性を持っている。

天津の英租界の特異性としては、まず、海や江ではなく、海河という比較的幅が狭く、流量の少ない河に面して設けられたことにある。河の土砂堆積によって船の運航に支障を生じさせたことで、貿易の輸送手段がいちはやく水運から陸運へ移行した。それによって、天津では上海等のような Bund を正面にして高大な商業建築が立ち並ぶ景観ではなく、

Victoria Road を正面とした特徴ある景観が形成された。また、上海や廈門の英租界の開発において、道路の計画は既存道路に規定されてつくられたとされている⁵⁾。それに比べ、天津の英租界、中でも特に推广界の開発は既存市街地による影響はほとんどなく、設計の意図を最もよく具現化した租界空間であったと思われる。



写真 5-1 20 世紀初頭のフランス租界
(Tientsin : An Illustrated Outline History)

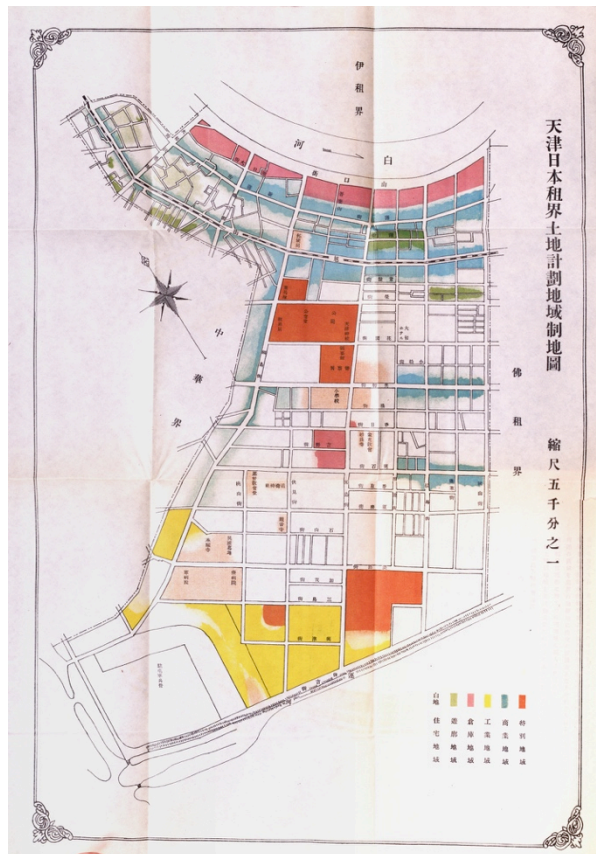


図 5-3 日本租界の土地利用
(天津居留民団二十周年記念誌に所収)

社会的側面については、天津の英租界は上海共同租界租界と類似する点が見られる。第一次世界大戦後、上海の共同租界に中国人の人口が増加及び思想の向上などの背景の下、中国人は租界の行政へ参加できないことに対する抗議を行った。その頃の上海共同租界内の人口構成はほとんどが中国人であり、また、租界歳入額の6割が中国人からであった。それによって、1926年には3名の中国人市参事会員（Municipal Council of Shanghai International Settlement）を任命し、9人の外国人市参事会員と同席し、同党の権限をもって租界市政に参加できたとされた⁶⁾。このことからわかるように、上海共同租界も天津の英租界同様に、中国人が租界の管理に関与できた。しかし、天津英租界の特徴はその時期の早さにあった。租界時代初期にはすでに中国人が董事会のメンバーになっており、さらに租界時代中期から中国人董事の人数は徐々に増え、後期になると半数を占めるようになっていた。中国人による租界管理への関与の強さも天津の英租界の特徴の一つである。

第2節 考察と今後の展望

第1項 英租界と現地地域社会の相互関係

本稿は天津の英租界の開発の全貌を明らかにした。その過程において、英租界と現地の地域社会との相互関係も見えてきた。

原英租界が開発された租界時代前期は清末期にあたり、清朝はアヘン戦争とアロー戦争の敗戦を受け、近代化の重要性を痛感していた。そのため、西洋の技術を取り入れようと洋務運動を起こした。この時期では、原英租界が洋務運動の受け皿となり、それによって建設された施設が租界の周辺に多く立地した。それによって、天津の地域社会、特に上層階級の人々は近代的な施設や技術にある程度接することができた。それによって、天津の地域社会も近代化が起こったのである。

租界時代中期の清最末期から民国初期、特に租界時代の後期の民国初期になると、英租界の管理及び開発には中国人が関与するようになった。無論、これらの中国人は洋務運動等、中国の近代化に共感していた上層階級

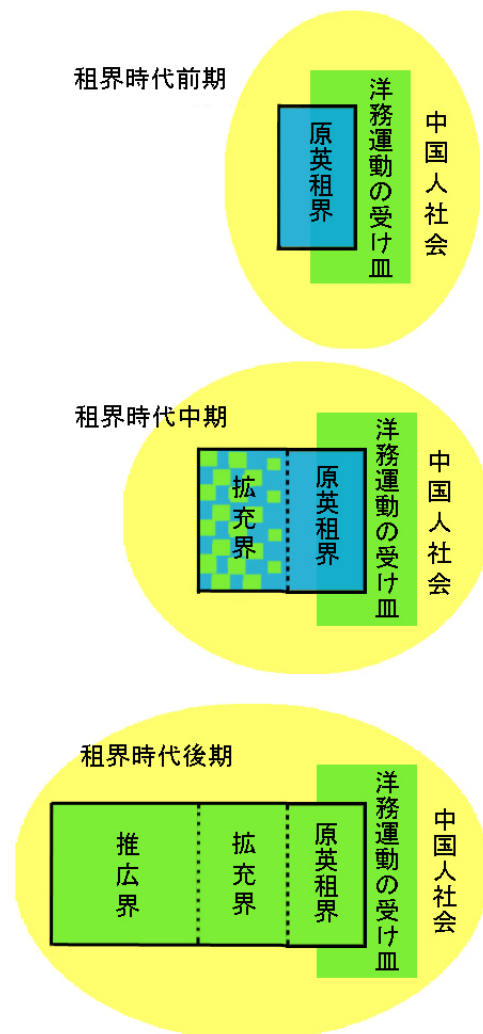


図5-4 英租界と地域社会の相互関係

であったと推測される。それによって、英租界の近代的な都市空間や建築機能等、表層的な部分は西洋式であり、中国にとって異物であるが、実際の管理や開発においては現地の地域社会による関与が強く、英租界の内部要素に変化が起きていた。つまり、英租界は異物のまま段階的に中国の地域社会に同化しながら、定着していったと考えられる。

中国における租界、租借地は「植えつけられた都市」、または「国の中の国」というように、孤立した存在であったとの評価を受けてきた。租界時代前期においては、現地の地域社会には同化せず、「植えつけられた都市」であったことに異論はない。また、中国における革命、戦乱、政権交代等の直接的な影響を受けないことに関しては「国の中の国」である評価は妥当であろう。しかし、租界時代中期から後期にかけて、英租界は現地の地域社会に同化し始め、定着していったという現象もおこっていた。

第2項 今後の展望

これまでの研究では租界における開発の全貌を扱ってきた。その中で、上記で考察したように、租界開発と地域社会の関係性について、次の点においてさらに深く掘り下げていく必要がある。まず、英租界の管理、開発を中国人が関与できるようになったことにはどのような背景があったのか。英租界では買弁等の中国人を利用して貿易を行っていたことは知られているが、その人たちは、中国人の英租界における地位の変化にどう寄与したのか。また、中国人董事は董事会のメンバーとして、どのような発言をし、どのような役割を果たしてきたのか。さらに、中国人による開発が行われたが、その際、どのような建築家を雇い、どのような建築を目指していたのか。無論、これらは天津の租界研究に限った課題ではないだろう。今後、これらの問題に着目しながら、中国のその他の租界、租借地についても解明を行っていききたい。

注：

- 1)田中重光：近代・中国の都市と建築 広州・黄埔・上海・南京・武漢・重慶・台北, 2005, 相模書房、pp.23-36,pp.46-61,pp.67-84 の記述を参考にした。1861年に広州において広東租界が完成し、この広東租界の建設計画は広州の近代化に大きな影響を与えた。その後、孫文の息子である孫科は1921年に広州において中国最初の近代都市計画の道路施策である暫行縮寛を公布している。そこから距離的に近かった黄埔では1934年に李文邦が作成した黄埔港計画が公布された。李文邦はアメリカ留学の経歴を持ち、作成された計画の道路系統はピエール・ランファンワシントン計画を参考にしていて、上海についてはアヘン戦争後に租界が開設され、1940年頃まで繁栄を極めていた。1927年に蒋介石は大上海計画を立案し実施を進めた。この計画にも欧米の近代的な手法が多く盛り込まれていた。
- 2)鈴木博之, 伊藤 毅, 石山 修武, 山岸 常人：近代とは何か シリーズ 都市・建築・歴史 7, 2005, 東京大学出版会、p.3
- 3)天津市城市建设档案馆編：図説近代天津城市規劃, 2012、p.41
- 4)天津居留民団編：天津居留民団二十周年記念誌、天津居留民団、1930
- 5)陳雲蓮,大場修：1849-66年間に於ける上海英租界の道路、土地開発過程—近代上海英租界の形成過程に関する都市史研究その1,日本建築学会計画系論文集,No.622,pp.239-244, 2007.12.30 及び、恩田重直:中国福建省の厦門における港湾空間の形成過程に関する考察,日本建築学会計画系論文集,No.527,pp.201-208, 2003.10.30 による。
- 6)上原蕃：上海共同租界誌, 東京丸善, 1942, pp.48-49

参考文献一覧

史料

- 1) 英租界工部局年度報告, REPORTS OF THE BRITISH MUNICIPAL COUNCILS, AND MINUTES OF THE ANNUAL GENERAL MEETINGS, 1906年から1940年は天津档案馆に収蔵されている。その内1907,1908, 1909, 1911, 1913, 1915, 1923, 1924, 1926, 1928年は欠落。1906～1925年までは英文であり、1927年からは部分的に中国語も併用されていた。近年になって、天津档案馆により1927年以後の年度を中国語に翻訳され、天津英租界工部局史料選編として2012年に出版されている。本稿はすべて天津档案馆に収蔵されている英文年度報告を使用した。
- 2) Hai-ho Conservancy Board 1898-1919,天津档案馆に所蔵
- 3) O.D.Rasmussen : The Growth of Tientsin, 1924, The Tientsin Press, Ltd.
- 4) O.D.Rasmussen : Tianjin : An Illustrated Outline History, 1925, The Tientsin Press, Ltd.
- 5) 天津英租界第十次常年選挙大会董事長楊嘉立君演説詩既提出修正地亩章程議案
- 6) 吳延龍主編：天津历史風貌建築，天津市历史風貌保護委員会，天津大学出版社，2010.9
- 7) 吉澤誠一郎: 天津誌,近代中国都市案内集成, 第19巻, ゆまに書房, 2012
- 8) 吉澤誠一郎: 天津案内, 近代中国都市案内集成, 第20巻, ゆまに書房, 2012
- 9) 吉澤誠一郎: 支北！！天津事情, 近代中国都市案内集成, 第23巻, ゆまに書房, 2012
- 10) 上原蕃：上海共同租界誌, 東京丸善, 1942

地図

- 1) Plan of Tien-Tsin surveyed during its occupation by the Allied Forces by officers of the Royal Engineers 1860-61 Reference tables (イギリス国立公文書館)
- 2) Plan showing the present state of the British Settlement at Tientsin (イギリス国立公文書館)
- 3) Map of the British Concession in Tientsin (イギリス国立公文書館) 当該図はイギリス国立公文書館に2枚セットで所蔵されており、その紹介には目立った建物、海河、運河(小川)、街区、公共目的に開発された道路と他の道路が示されている。もう一枚の地図(Map of Tientsin)には英租界と他の租界、河

と鉄道が示されている。また Revised 1922 と記されており、1922 年以前に描かれ、1922 年に修正したものである。したがって、当該図も同様であると判断できる。

- 4) Plan of British Concession Tientsin, Accompanying Report of 21 January, 1918 (1917 年工部局年度報告に所収)、アンダソンによる推広界の設計図。
- 5) British Municipal Area Tientsin (O.D.Rasmussen (1925)に所収) 1925 年の天津地図、当該図は天津英租界の完成形を示す最初の地図である。
- 6) 天津市規劃局編著:天津城市歴史地図選編, 天津古籍出版社, 2008 に所収の地図

主要書目

- 1) 天津居留民団編：天津居留民団二十周年記念誌、天津居留民団、1930
- 2) 天津市政協文史資料研究委員会編, 天津租界, 天津人民出版社, 1986.3
- 3) 侯振彤（翻訳）：天津地方史誌編修委員会総編修室編, 二十世紀初の天津概況, 天津史誌叢刊（一）1986.04
- 4) 中国航海史研究会, 《天津港史》編輯委員会: 中国水運史叢書—天津港史（古、近代部分）, 人民交通出版社, 1986
- 5) 天津社会科学院, 《天津簡史》編写組: 天津簡史, 天津人民出版社, 1987
- 6) 郭蕴静：天津古代城市發展史, 天津古籍出版社, 1989 年 09 月
- 7) 天津租界檔案館和南開大学分校檔案系編, 天津租界档案選編, 天津人民出版社, 1992.4
- 8) 楊秉徳：中国近代城市与建築（1940-1949）, 中国建築工業出版社, 1993.6
- 9) 天津市地方志編修委員会編著: 天津通志·附志·租界, 天津社会科学院出版社, 1996
- 10) 藤森照信、汪坦: 全調査東アジア近代の都市と建築, 筑摩書房, 1996
- 11) 並木頼寿、井上裕正：世界の歴史 19 中華帝国の危機, 中央公論社, 1997
- 12) 天津地域史研究会編: 天津史 再生する都市のトポロジー, 東方書店, 1999
- 13) ロバート・ホーム著、布野修司、安藤正雄監訳：植えつけられた都市—英国植民都市の形成, 京都大学学術出版会, 2001
- 14) 吉澤誠一郎：天津の近代 清末都市における政治文化と社会統合, 名古屋大学出版会, 2002
- 15) 田中重光: 近代・中国の都市と建築 広州・黄埔・上海・南京・武漢・重慶・台北, 相模書房, 2005
- 16) 鈴木博之、石山修武、伊藤毅、山岸常人：近代とは何か（シリーズ 都市・建築・歴史）, 東京大学出版会, 2005
- 17) 布野修司：近代世界システムと植民都市, 京都大学学術出版会, 2005

- 18) 宋美雲、宋鵬：話説津商,中華工商聯合出版社, 2006
- 19) 大里浩秋、孫安石:中国における日本租界：重慶・漢口・杭州・上海, 御茶の水書房, 2006
- 20) 西澤 泰彦: 日本植民地建築論, 名古屋大学出版会, 2008
- 21) 高村直助監修,財団法人横浜ふるさと歴史財団編：横浜 歴史と文化,株式会社有隣堂,2009
- 22) 大里浩秋、貴志俊彦、孫安石編：中国・朝鮮における租界の歴史と建築遺産, 御茶の水書房, 2010
- 23) 吳延龍主編：天津市歴史風貌建築保護委員会、天津市国土資源和房屋管理局、天津歴史風貌建築、公共建築卷一、天津大学出版社, 2010
- 24) 吳延龍主編：天津市歴史風貌建築保護委員会、天津市国土資源和房屋管理局、天津歴史風貌建築、公共建築卷二、天津大学出版社, 2010
- 25) 吳延龍主編：天津市歴史風貌建築保護委員会、天津市国土資源和房屋管理局、天津歴史風貌建築、住居建築卷一、天津大学出版社, 2010
- 26) 吳延龍主編：天津市歴史風貌建築保護委員会、天津市国土資源和房屋管理局、天津歴史風貌建築、住居建築卷二、天津大学出版社, 2010
- 27) 天津日報傳媒集團編：天津小洋楼名人故居完全檔案（第一卷），天津教育出版社, 2011年1月
- 28) 天津日報傳媒集團編：天津小洋楼名人故居完全檔案（第二卷），天津教育出版社, 2011年1月
- 29) 天津日報傳媒集團編：天津小洋楼名人故居完全檔案（第三卷），天津教育出版社, 2011年1月
- 30) 天津日報傳媒集團編：天津小洋楼名人故居完全檔案（第四卷），天津教育出版社, 2011年1月
- 31) 張利民：天津社会科学院、天津市社会科学研究會主編,城市史研究（第 27 期），天津社会科学院出版社, 2011.10
- 32) 張暢、劉悦:李鴻章の洋顧問：德瑾琳與漢納根,傳記文学出版社, 2012
- 33) 吉澤誠一郎:天津誌,近代中国都市案内集成,第 19 卷,ゆまに書房,2012
- 34) 天津市城市建設档案館編：近代天津城市規劃図説 2012 年 12 月
- 35) 王述祖主編：中国天津對外經濟貿易起源与發展, 天津商務委員会, 2013

論文

- 1) 紀廣智：旧中国時期的天津工業概況, 北国春秋, 1960 年第 2 期
- 2) 王懷遠：旧中国時期天津の對外貿易, 北国春秋, 1960 年第 1 期
- 3) 喬虹：明清以来天津水患の發生及其原因, 北国春秋, 1960 年第 3 期

- 4) 佟飛：天津開埠初期的洋行和買辦，天津日報，1964年4月22日第4版
- 5) 張仲：天津市區的歷史變遷，天津師範學院學報，1979年第2期
- 6) 史習芳：天津解放前行政區劃沿革，天津師範學院學報，1982年第5期
- 7) 侯振彤：試論天津近代教育的開端，天津師範學院學報，1982年第2期
- 8) 蔡孝箴：天津經濟中心的形成，天津社會科學，1982年第2期
- 9) 卞僧慧：從天津開埠前後的變化看近代天津的起點，天津史研究，1985年第2期
- 10) 林樹惠：李鴻章與洋務運動，天津史誌，1985年第2期
- 11) 楊大辛：天津外國租界的歷史沿革，天津史志，1985年第1期
- 12) 魏明：北洋政府官僚與天津經濟，天津社會科學，1986年第4期
- 13) 李長莉：天津洋務運動與甲午中日戰爭，天津史誌，1986年第1期
- 14) 羅澍偉：近代天津上海兩城市發展之比較，檔案與歷史，1987年第1期
- 15) 趙津：租界與天津城市近代化，天津社會科學，1987年第5期
- 16) 宋美雲：北洋時期官僚私人投資與天津近代工業，歷史研究，1989年第2期
- 17) 胡光明：被迫開放與天津城市近代化，天津社會科學，1989年第5期
- 18) 陳克：19世紀末天津民間組織與城市控制管理系統，中國社會科學，1989年第6期
- 19) 李森：天津開埠前城市規劃初探，城市歷史研究，1989年第1期
- 20) 羅澍偉：一座築有城垣的無城垣城市——天津城市成長的歷史透視，城市歷史研究，1989年第1期
- 21) 村田明久：外國人居留地の都市空間要素と構成比の比較考察,都市計画論文集(25),1990-10
- 22) 李森：近代天津第一個城市整體規劃——介紹『天津特別市物質建設方案』城市歷史研究，1991年第4期
- 23) 劉海岩、周俊旗：近代天津工業結構的演變與城市發展，城市歷史研究，1991年第4期
- 24) 陳振江：通商口岸與近代文明的傳播，近代史研究，1991年第1期
- 25) 孫躍新:中国都市における近代空間の形成過程及びその特性に関する研究-天津の旧城空間、租界空間、新開空間の形成及び相互関連を中心に、京都大学博士論文,1993
- 26) 楊貴璽:天津市地面沉降測量高程基準点穩定性分析,測繪科学,1993年04期
- 27) 劉海岩：天津的開埠與英租界的形成，天津史誌，1995年第1期
- 28) 王藝武、紙野桂人、舟橋國男、奧俊信、小浦久子、木多道宏：近代天津租界形成における土地利用並びに建築用途の變化特性に関する研究,都市計画論文集，(30-75-445) 1995

- 29) 李森, 近代天津城市規劃布局的演變, 城市歷史研究, 1996 年第 11、12 期
- 30) 平岡直樹、佐々木邦博、伊藤精晤: 20 世紀初頭においてブリュッセルに建設された田園都市の特徴, 日本造園学会ランドスケープ研究 61(5),1998
- 31) 恩田重直: 中国福建省の厦門における港湾空間の形成過程に関する考察, 日本建築学会計画系論文集,(No.527)2003.10.30
- 32) 江立雲: 中国租界立法制度初探, 天津市工会管理幹部学院学報, 2004 年 03 期
- 33) 蒋浙安: 查德威克与近代英国公共衛生立法及改革, 安徽大学学报, 2005 年第 3 期
- 34) 李百浩、吕婧: 天津近代城市規劃歷史研究 (1860-1949), 城市規劃学刊, 2005 年第 5 期
- 35) 衛莉、張培富: 帰国留学生与中国近代建築学的体制化, 晋陽学刊 2006 年第 1 期
- 36) 劉海岩: 租界、社会變革与近代天津城市空間的演變, 天津師範大学学報, 2006 年第 3 期
- 37) 林青、池添昌幸、竹下輝和: 中国天津租界地における歴史的住宅建築の非住宅化傾向—中国天津租界地における歴史的住宅建築の空間変容に関する研究その 1, 日本建築学会計画系論文集 (605) 2006.07
- 38) 陳雲蓮、大場修: 1849-66 年間に於ける上海英租界の道路, 土地開發過程—近代上海英租界の形成過程に関する都市史研究その 1, 日本建築学会計画系論文集,(No.622)2007.12.30
- 39) 劉海岩: 20 世紀前期天津水供給与城市生活的變遷, 近代史研究 2008 年第 1 期
- 40) Chen Yu: The Making of a Bund in China: The British Concession in Xiamen (1852-1930), Journal of Asian architecture and building engineering 7(1), 2008-05-15
- 41) 周曉冬、栗達: 天津五大道地区的建築藝術特徵探析, 藝術与設計 (理論), 2009 年 4 月
- 42) 劉庭風、田卉、張晶蕊: 天津五大道洋房花園探析, 中国園林, 2010
- 43) 張亦馳: 天津首座英租界公园—維多利亞花園, 現代園林 2010 年 05 期
- 44) 陳雲蓮、大場修: 上海共同租界における日本人による都市開發過程と施設配置の実態—上海の都市形成に関する研究—日本建築学会計画系論文集, (No.694)2010.08
- 45) 夏青、許熙巍、許萌、崔楠: 天津五大道歷史街区空間形態及風貌特色解析, 天津大学学报, 2012

- 46) 張天潔、李澤、孫媛：混雜現代性與公共空間——淺析近代天津的公園發展，新建築，2012年05期
- 47) Dana Arnold、趙紀軍：場所的複雜性——對天津的跨文化解讀，新建築 2012年 05 期
- 48) 張威、張津莉：天津泰安道歷史文化街區建築遺產保護，建築學報，2012年06期
- 49) 張秀芹、洪再生、宮媛：1752.1903 年天津河北新區規劃研究，2012 中國城市規劃年會論文集(15.城市規劃歷史與理論)，2012 年 10 月
- 50) 山田晴通：19 世紀末英國的企業主導型模範村落ホーンウィル (Bournville)の歴史と現在の景觀(上)，東京經濟大學人文自然科學論集，第 133 号 2012.12
- 51) 曹磊、王苗：天津近代租界建築中的地域文化及地域色彩——以『天津歷史風貌建築』為視角的文化探析，北京科技大學學報，2013年01期
- 52) 任雲藍：近代天津租界的公共環境衛生管理初探，史林，2013 年第 5 期
- 53) 任吉東：近代天津城市文化中的租界元素研究，南京社會科學，2013年06期
- 54) 天津經濟期刊課題組：天津近代文化亮點 ——利順德大飯店，天津經濟，2013年第6期
- 55) 陳明遠：中國租界史的再認識(之二) 租界標志著中國現代化進程的開端，社會科學論壇，2013年07期
- 56) 小代薰：明治初期の神戸「内外人雜居地」における公共施設の整備過程：神戸開港場における内外人住民の自治活動と近代都市環境の形成に関する研究，日本建築學會計画系論文集，(No.695) 2014.01
- 57) 張頤、鄭越、吳放、張鍵：古韻新生——天津利順德大飯店保護性修繕，新建築，2014年03期
- 58) 譚汝為：天津五大道與小洋樓文化，天津市社會主義學院學報，2014年03期
- 59) 渠濤、張理茜、武占雲：不同歷史時期特殊事件影響下的城市空間結構演變研究—以天津市為例，地理科學，第 34 卷第 6 期 2014 年 6 月
- 60) 陳磊：天津英租界的產生、建設與收回，藍台世界，2014年10期

初出一覧

論文名 (公表誌)

本論文該当箇所

Liu Yichen : 「The formation and feature of the low residential places of concession area: A case study of Tianjin City, China」 (The 9th International Symposium on Architectural Interchanges in Asia, 2012.10)

※概要審査付き
第4章の一部

劉一辰, 藤川昌樹 : 「中国天津における英租界推廣界の開發経緯に関する研究」 (日本建築学会学術講演梗概集, 2013, F-1 分冊, pp.35-36)

第4章の一部

劉一辰, 藤川昌樹 : 「中国天津の英租界推廣界の開發の計画意図及びその経緯」 (日本建築学会計画系論文集, 79(704), 2191-2198, 2014年10月) ※審査付き

第4章

Liu Yichen, Masaki Fujikawa: 「The Structural Development of the British Concession in Tianjin (Tientsin), China」 (16th International Planning History Society conference, 2014.7)

※審査付き
第2章、第3章の一部と第4章

劉一辰, 藤川昌樹 : 「中国天津における原英租界の形成過程」 (日本建築学会学術講演梗概集, 2014, F-1 分冊, pp.391-392)

第2章の一部

謝辞

この度、本研究を博士論文として完成させることができたのは、何より指導教官である藤川昌樹先生のご指導のおかげであると思っております。他研究室から移動してきた自分に対し、いつでも親身になって研究に関する相談に乗っていただき、都市計画史研究の進め方から論文の作成方法まで、一から教えていただきました。私の調査のため、天津にまでお越しいただき、暑い中街歩きを行ってくださいました。また、3年間の研究室生活の中、普段より研究以外のことについても気さくに話をしていただきました。ここに改めて感謝の意を表したいと思います。

博士論文の審査にあたり、村上暁信先生、藤井さやか先生、山本幸子先生そして野中勝利先生には大変お世話になりました。また、その際には論文の修正における貴重なアドバイスをいただきました。また、渡辺俊先生、松原康介先生をはじめ、日頃の研究活動や、研究室でも生活において、いつも暖かく見守ってくださいました。

また、小場瀬令二先生は修士課程から博士一年までご指導をいただきました。他分野から都市計画に研究方向を変更した自分に対し、いつも快く助言をしてくださいました。

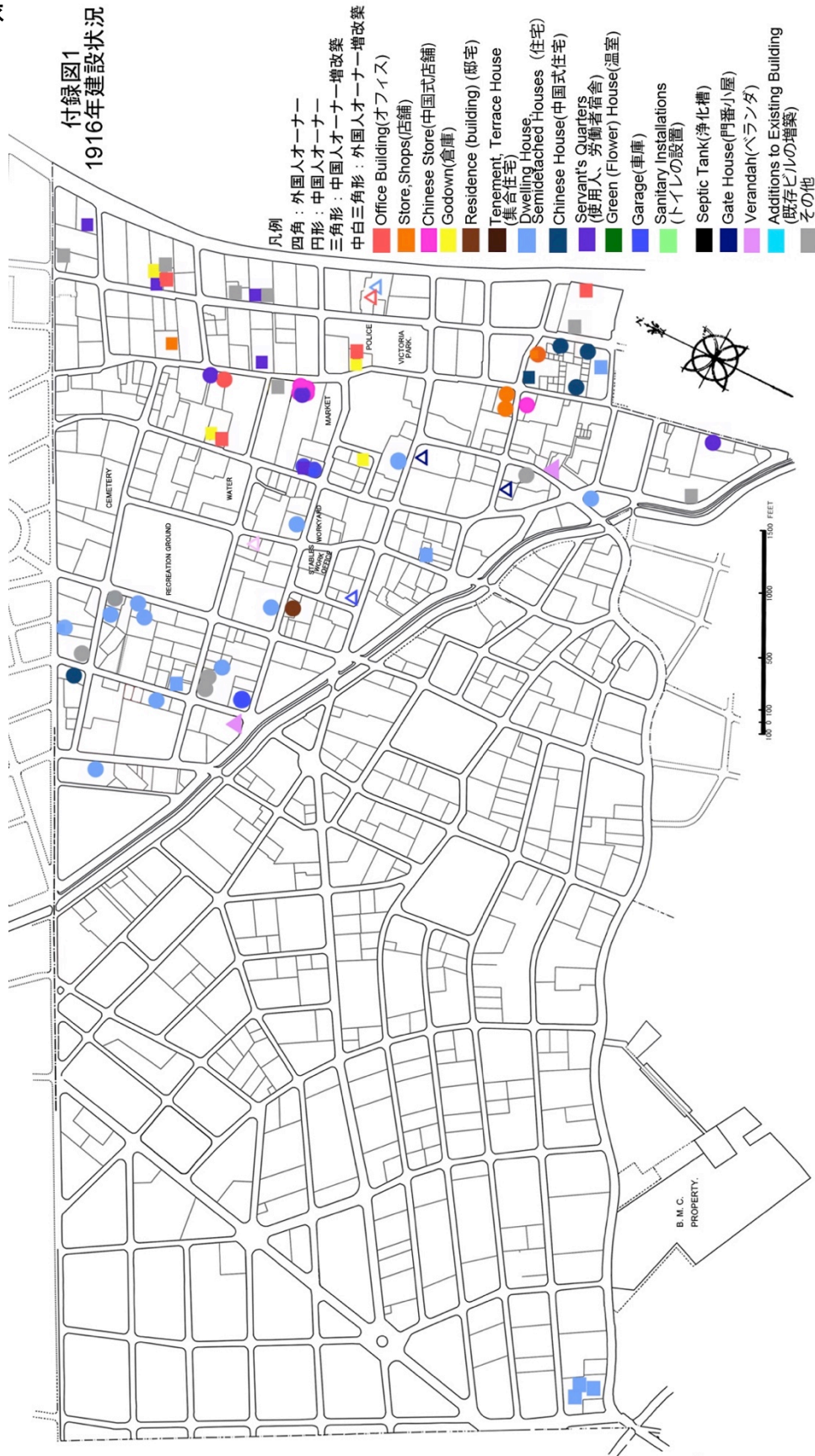
博士論文の執筆において、羅澍偉先生、万新平先生、張利民先生、劉海岩先生、そして秦川先生にはいろんなアドバイスをいただき、さらに貴重な史料も貸していただきました。また、天津档案馆のスタッフの方々には、史料を探す際には何度もお世話になりました。

最後になりましたが、藤川研究室に在籍した3年間、研究室のみなさんにはお世話になりました。また、愉快かつ有意義な時間を過ごすことができました。ここに感謝の意を表する。

劉 一辰

付録

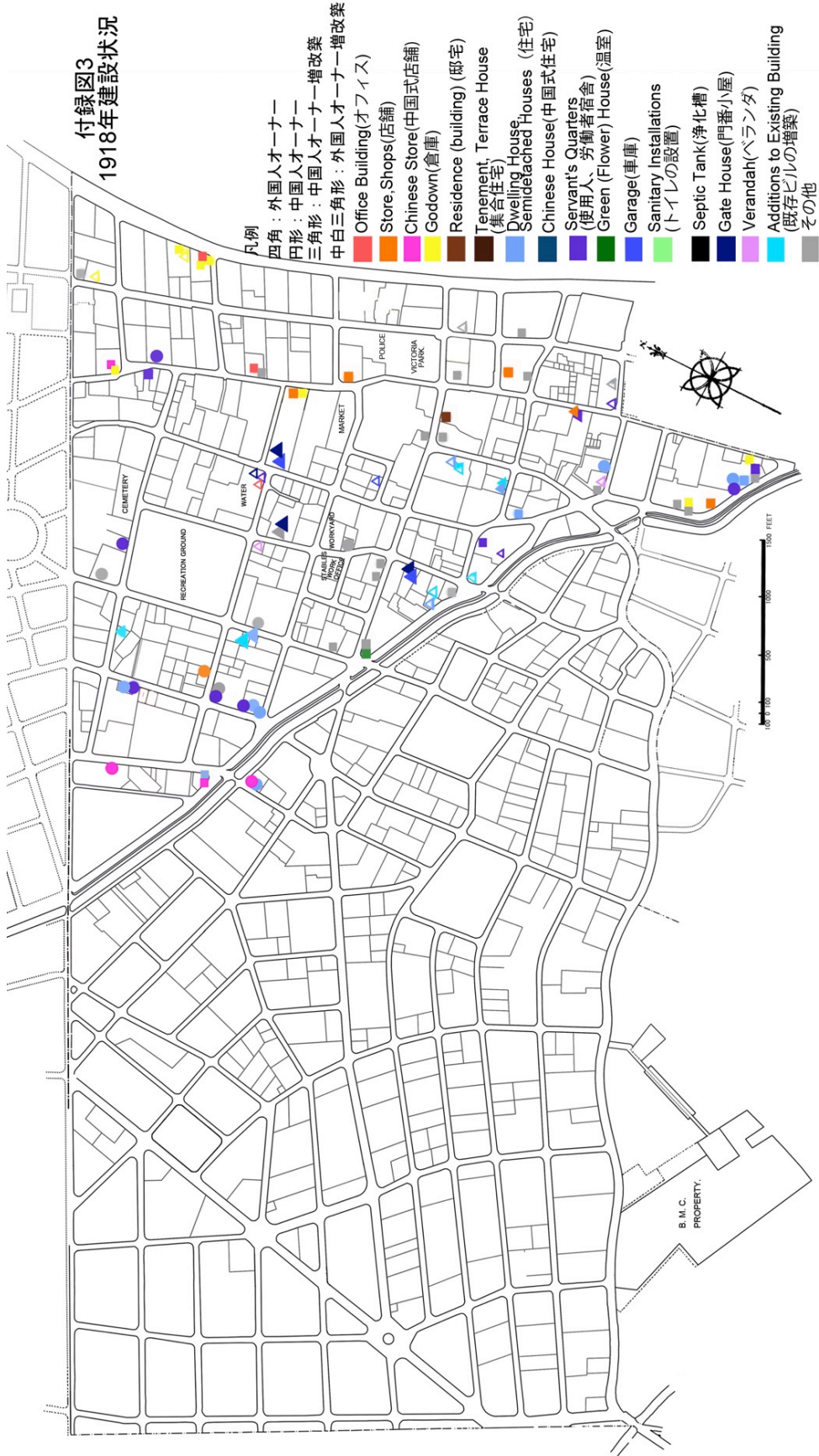
付録図1 1916年建設状況



付録図2
1917年建設状況



付録図3
1918年建設状況



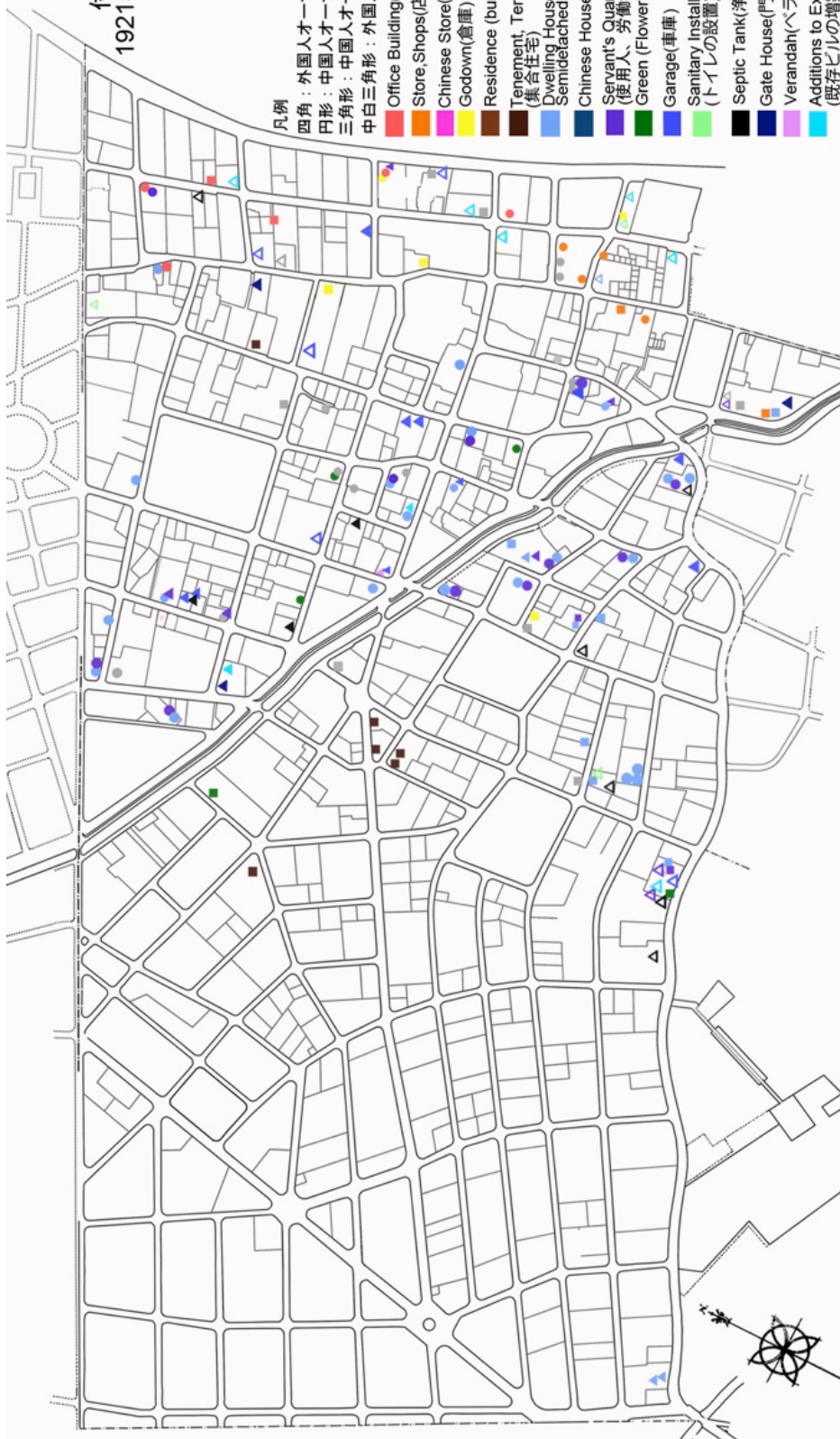
付録図4
1919年建設状況



付録図5
1920年建設状況



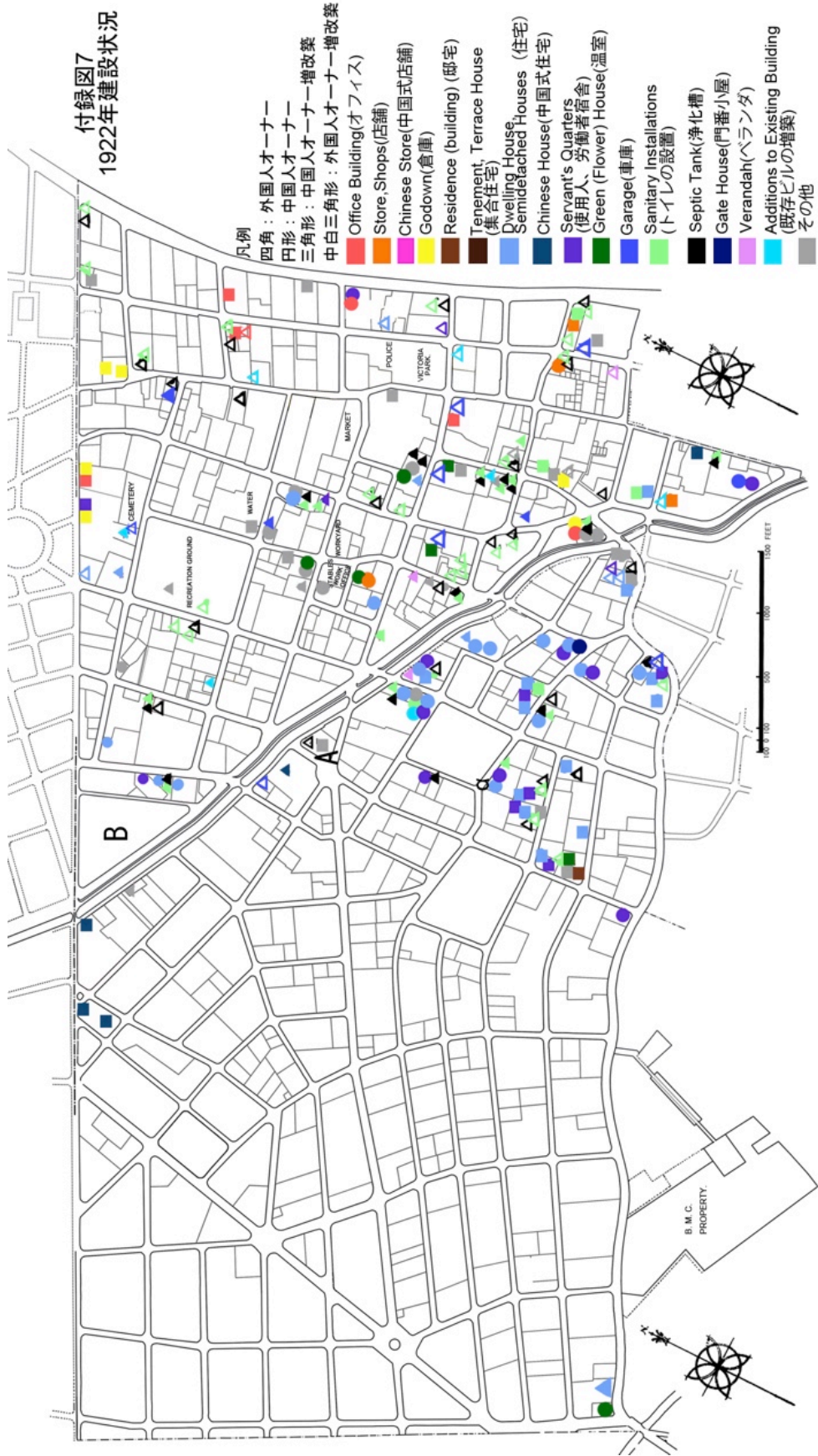
付録図6
1921年建設状況



凡例

- 四角：外国人オーナー
- 円形：中国人オーナー
- 三角形：中国人オーナー増改築
- 中白三角形：外国人オーナー増改築
- 赤四角：Office Building(オフィス)
- 赤正方形：Store, Shops(店舗)
- 赤五角形：Chinese Store(中国式店舗)
- 赤六角形：Godown(倉庫)
- 赤七角形：Residence (building) (邸宅)
- 赤八角形：Tenement, Terrace House (集合住宅)
- 赤九角形：Dwelling House (住宅)
- 赤十角形：Semidetached Houses (住宅)
- 赤十一角形：Chinese House (中国式住宅)
- 赤十二角形：Servant's Quarters (使用人、労働者宿舎)
- 赤十三角形：Green (Flower) House(温室)
- 赤十四角形：Garage(車庫)
- 赤十五角形：Sanitary Installations (トイレの設置)
- 赤十六角形：Septic Tank(浄化槽)
- 赤十七角形：Gate House(門番小屋)
- 赤十八角形：Verandah(ベランダ)
- 赤十九角形：Additions to Existing Building (既存ビルの増築)
- 赤二十角形：その他

付録図7
1922年建設状況



付録図8
1925年建設状況

